

浅野誠

南城

南城論・観光・尚巴志マスタープラン・
シュガーホール・集落・市史・学童保育・保育園

2013～2017

2013～2017年（一部2011，2012年を含む）に、ブログ「沖縄南城・人生創造・浅野誠」（2013年までは「田舎暮らし・人生創造・浅野誠」）に掲載した記事のなかから、南城関連のものを選び編集したものである。

この期間、南城市の諸委員会や諸組織にかかわる機会が多かったが、その折に出会ったもの考えたものなどが反映している

2018年2月編集発行

目次

記事は、各項ごとに、記事公開年月日順(新しいものから古いものへ)に並べてある。
項目右側の年月日は、記事公開日。

1. 南城論

7

南城市の字ごとの激しい人口増減	2017年10月16日
南城市のいろいろな会議に出る	2016年4月1日
転入率 持ち家率	2015年6月5日
「南城を歩く・暮らす」 新南城物語	2014年4月2日～12月11日
スタート予告	
1) 南城としてのまとめ 「なんじい」へ	
2) 「手作り南城」と自然	
3) タマグスクあたりからの海岸・太平洋の景観	
4) 知念岬・久高の景観	
5) 中城湾周辺の景観を楽しむ	
6) 空と海の景観	
7) 気候	
8) 災害と地形	
9) 自然と祈り	
10) 人口増・アパート増と住宅	
11) 最大の「移住者」は女性たち	
12) 訪問者観光客	
13) 私が案内するグスク・御嶽・海岸	
14) 訪問者案内でよく行く所	
15) カフェ・レストラン	
16) 多種多様なイベント・行事	
17) 11月のイベント 半島芸術祭・オープン・ガーデンなど	
18) 人生産業が盛んになりそう 産業を考える	
19) 車中心の交通事情 車過剰依存からの卒業へ	
20) 買い物 物価	
21) 高齢者向け医療福祉	
広報なんじょう「ほろよいまち談義」と玉城青少年の家嘱託職員大量募集	2014年2月14日
いろいろな南城物語候補	2013年8月20日
南城論への準備	2012年3月29日～4月13日

- 1 中心市街地なしに4町村が合併
- 2 大量生産・大量消費ではなく、知識創造型へ
3. 南城の豊かさ 人間関係 自然との関係
4. 多彩な文化創造と文化協同
5. 地域の頭脳

2. 観光・観光コア施設

43

南城市観光施設委員会

2017年10月6日

私の「南城市観光コア施設」学習ノート

2016年4月27日～8月19日

1. 南城市観光コア施設整備の基本構想検討
2. 「人を呼び込む」魅力
3. 福祉・人生創造の視点も含んで、観光で、市民と来訪者とのつながりを促進する
4. 他府県における複合施設の事例検討1
5. 他府県における複合施設の事例検討2
6. 「文化的景観」
7. 敷地周辺の自然的条件・地理的条件
8. 交通 敷地周辺の集落
9. 敷地周辺の史跡 遊歩道候補
10. 南城での文化にかかわる諸取り組み 「手作り南城」
11. (続) 南城での文化にかかわる諸取り組み 「手作り南城」
12. 観光の変容と南城型観光の追求へ
13. (続) 観光の変容と南城型観光の追求へ
14. 市民の交流・たまり場に来訪者(観光客)も参加する ユンタク場・市民カフェ
15. 「道の駅」 医療 子ども空間 ギャラリー
16. 大学キャンパス 職員・ボランティア
17. 沢山の日常的なイベント 屋外とつながる、市内諸施設とつながる
18. 多様なニーズに開かれた複合的なコア施設
19. 市民参加を軸にした、進め方と完成後の運営
20. スポーツ施設機能1
21. スポーツ施設機能2
22. スポーツ施設機能3
23. 個性的魅力が溢れる多目的の複合施設

アジアからの個人観光者が、このあたりでも増えた

2015年7月9日

南城市はリピーター好みの観光地か

2011年4月2日

3. 尚巴志マスタープラン

69

尚巴志マスタープラン事業『ゆうゆう風吹く音楽会～文化遺産めぐりコンサート～』	2015年11月20日
糸数城址でグスクめぐりコンサート	2014年11月20日
尚巴志紙芝居 大里南小学校	2014年9月27日
尚巴志のまちづくりコンサート&シンポジウム	2014年7月14日
尚巴志のまちづくりコンサート&シンポジウム(南城市)での私の提案	2014年7月2～11日
尚巴志活用マスタープラン報告書と尚巴志まちづくりシンポ	2014年5月25日
尚巴志円卓会議	2014年3月3日
南城市尚巴志活用マスタープラン作成大詰め	2014年2月22日
南城のたくさんの取り組みの新しいステージ	2013年11月23日
南城市を盛り上げるいくつもの物語を育む尚巴志活用マスタープラン作成作業	2013年8月16日
『尚巴志活用プラン』作成のための第二回市民ワークショップ	2013年7月15日
ワクワクの「南城市尚巴志活用マスタープラン」検討委員会スタート	
尚巴志の時代と現代 多様な豊かさを南城おこしへとつなげる	2013年3月23～25日

4. シュガーホール

83

シュガーホール「とら・とろ・ぴあコンサート」	2015年11月14日
シュガーホール 市民のための企画・運営講座／受講生の募集	2015年07月20日
シュガーホール新人演奏会	2015年5月26日
南城市文化センター・シュガーホール運営審議会	2015年3月13日
シュガーホール開館20周年記念国際音楽祭式典・コンサート	2014年6月9日
シュガーホール新人演奏会	2014年5月27日
おきでんシュガーホール新人演奏会オーディション	2014年3月25日
うらやましいシュガーホール・ジュニアコーラス 定期演奏会	2014年3月17日
シュガーホール活性化計画答申を市長に提出	2014年3月6日

5. 集落(シマ)

90

シマ(集落)の歴史的变化と多様性	2017年8月14日
南城市史インタビュー 「シマの子ども」 公民館幼稚園など	2017年1月17日
興味深い南城民俗調査活動	2016年1月23日
新原の「ハチウビ健康ウォーキング大会」参加	2016年1月5日
沖縄の集落(シマ、字、地域自治組織、コミュニティ)についてのミニメモ	2015年12月13日～2016年5月9日
1. 考えるきっかけ	
2. 集落スタートはいつか	
3. 集落の地理的条件	

4. 人口 土地用途 家屋配置など
5. 集落の地図上の形 人口構成 人口増減
6. 坂本磐雄「沖縄の集落景観」を読む
7. 社会増・Uターン・Iターンと集落づくり
8. アパート・マンション・新興住宅地
9. 集落の激変
10. 集落の激変 生産・生活の共同性の変容と弱まり
11. (続) 集落の激変 生活の共同性の弱まりと孤立的家族の増加 塀の高さ
12. (続) 集落の激変 住宅の変化
13. シマ(集落) 起こしへ 1 全員加入組織と任意加入組織
14. シマ(集落) 起こしへ 2. アソシエーションにかかわる
15. シマ(集落) 起こしへ 3

スクガー(底川) マーイ	2015年11月23日
小谷マーイ	2015年11月22日
南城の集落の暮らしの話を知る 聖地での服装 このごろの私	2015年10月22日
「南城市の民俗」調査活動スタート	2015年10月1日
南城市史「南城市の民俗」専門委員会スタート	2015年6月10日
「人類史にみる百名玉城の物語」講演	2015年3月8日
須藤義人「久高オデッセイ」(晃洋書房2011年)を読む	2011年10月16～25日

6. 市史

122

『南城市のグスク』を読む	2017年8月1日
「南城市に残る戦争記録」 南城市史文化展	2016年2月25日
南城市のグスク展 志喜屋グスク	2015年1月23日

7. 学童保育

125

南城市学童保育連絡協議会総会	2017年5月23日
南城市の学童保育 南城市学童保育連絡協議会総会に向けて	2016年5月21日
「南城市学童クラブ 現状と課題」 学童クラブと市議会との意見交換会	2016年2月21日
知念のなかよし学童クラブ訪問	2015年8月15日
活動的で創造的な南城市学童保育クラブ指導員	2015年7月16日
南城市学童保育連絡協議会総会	2015年5月25日
南城市議会の委員会で学童保育を集中審議	2014年5月29日
ドッジビー大会 南城市学童保育低学年交流会	2013年11月11日

8. 保育園

133

どんぐり保育園起工式

2017年2月7日

「こども園おはな」との出会い

2016年3月8日

関連既刊

いずれも2012年から2013年にかけて編集発刊したもので、本書掲載記事にさきがけた関連記事が掲載されているので、参照されたい。

- シリーズ南城物語
- 1 南城の聖地・名所
 - 2 南城の芸能・工芸・芸術
 - 3 南城のカフェ・レストラン・宿泊施設・ガーデン
 - 4 南城で暮らす シマの暮らし
 - 5 南城を盛り上げる

浅野誠エッセイシリーズ 2 音楽芸能・美術工芸

1. 南城論

南城市の字ごとの激しい人口増減

2017年10月16日

広報なんじょう10月号に、字ごとの10年間の人口増減、地域別高齢化率（平成28年）、市町村別特殊出生率（平成20～24年）が掲載された。興味深いので、いくらか紹介しつつコメントしたい。

これらの資料は、南城市並びに各字の将来を考える上で重要である。その点では、今後の市の将来構想や施策及び各字の将来構想と施策が注目される。それとともに、個人・家族がどのような基準で居住地を維持しないしは選択しているかの検討も必要だろう。研究上も注目される事であろう。だが、沖縄における人口研究はそれほどあるわけではない。その点では、専門的研究が期待される。

なお、図表が色分けで示されているので、微妙な色加減や印刷具合もあって、誤読可能性があることを前もって断っておく。

まず字別の人口増減だが、10年間で30%以上増が7、20～29%増が8、10～19%増が8、0～9%増が9、0～9%減が21、10～19%減が9、20～29%減（色具合がはっきりしないので、もしかすると30%以上減）が3となる。

1) 増減の開きが大きい。10年で30%増、20～29%増といえ、人口爆発とでもいえそうだが、それらは合計15だ。20%以上の人口減もまた、深刻な率であり、このままいくと、よく話題になる限界集落に陥る可能性をはらむ。無論、他府県でいわれる事例とは状況が大きく異なるので、安易な評価判断はできない。

それにしても、これほど開きがあるとは、私の予想以上だ。

2) 人口爆発といえるほど増えた地域は、ほとんどがアパート・マンションの増加のためと推測される。都市化の進行という表現があたるだろう。団地型一戸建て建設によると推測されるのは、2～3だ。

もともと人口が多い地域に人口増傾向がみられやすく、少ない地域に人口減が見られやすい。交通の便、買い物の便などを見ると、便のよい所で人口増、よくないところで人口減が進んでいそう。

なお、市内の一戸建て分譲地や県営団地市営団地の大半は、10数年以上前にはすでにできており、今回のデータに人口増減が反映しているのは、1～2とわずかだ。

3) 増加をになうアパート・マンションの住民の多くは、一戸建て住民と比べて流動性が高い。字自治会への加入の働きかけがされても、反応が鈍い傾向がよく話題になる。

アパート・マンションの住民が、南城市から市外へと出ていく流れのなかか、逆に市外から南城市へと入ってくる流れの中なのかも注目される。将来的に、ずっとアパマンションなのか、それとも、一戸建て

に移るのか、その点も注目される。それは、アパート・マンションが賃貸なのか所有なのか、ということともからむ。

4) 字自身の取り組みとどうからむのだろうか。その点では、周りの字が人口増が多いのに、人口減である字、逆に周りに人口減が多いのに、人口増である字が、どういう傾向を示しているのか、検討にあたいしよう。

5) 地域別高齢化率は、人口増が見られる地域では、20.3～22.4%と低く、人口減が見られる地域では、27.5～29.5%と高い。

したがって、人口増減と同様に、対処策が強く求められているようだ。

6) 南城市の特殊出生率は、県平均1.86人のなか、1.66であり、周辺市町村と比較しても、飛びぬけて低い。したがって、近年の南城市における人口増傾向は、社会増によってになわれており、自然減をはるかにこえる社会増が予測される。

以上には、かなりの推測が入っている。行政による、あるいは研究者によるより一層の調査分析が期待される。

南城市のいろいろな会議に出る

2016年4月1日

このところ、なぜか南城市のいろいろな委員会の委員を頼まれるようになった。そして、年度末なので、結構会議がある。南城市になる前の玉城村を含めて、この地に住み始めて12年目だ。地域のために役立てばうれしいと思って、頼まれれば、できる限り引き受けている。

そのなかで、学ぶことは多い。ここ10年近く、地域起こしとか沖縄起こしということをテーマにしてきたので、私の問題意識と重なる部分は多い。私の元々の専門分野の教育関係でないものが多いのは、めぐりあわせというべきだろうか。それらの委員会では、年寄りの部類に属するので、委員長役を仰せつかることもある。

委員になられる方は、多様な分野の方々なので、私がイメージする世界より、うんと広い視野からの発言に出会うことも多く、「エーッ」「なるほど」と教えられることが多い。

最近、出席した委員会というと、新しい市庁舎の隣にホールをつくる構想の検討委員会では、福祉向けのものにしてはどうか、という発言は、私の視野外だったので、「なるほど」と思わせられた。そういえば、そうした施設を作っている市町村の例も読んだことがある。他にも多様なアイデアが続出なので、どんな風な話がまとまっていくのだろうか。この企画は、市民参加のワークショップなども予定されており、豊かなアイデアが集まってくることだろう。楽しみにしている。

もう一つ、最近出席した委員会は、「地方創生」予算とからんで、実に多様に取り組みされてきたプロジェクト

トの第三者評価をする委員会だ。聴いていたプロジェクトが多いが、その全容を聴き、実に興味深い取り組みだったことを知る。それらは、先導的性格をもったものなので、今年度したものが、今後どのように展開するのか、させるのか、そんな点にかかわって、率直に私の意見を述べた。

シュガーホール（写真）の運営審議会は、務めて10年近くになる。年度末の会議では、一年の振り返りと新年度企画の討論が大きい。今年は、初のオペラ、そして新年度はまた新たな市民ミュージカル企画が大きい。と同時に、市民自身が企画を立ち上げる講座がきっかけになって行われた、子育て中の親子対象の企画が、大盛況で行われたこと。また出前講座企画などが強い印象を与えたようだ。

そのシュガーホールも、指定管理者制度をどうするのか、という難しい議論に直面している。そのことをめぐって他府県調査に訪れた人達が、そこで、シュガーホールがよく知られていることに逆に驚いたという話が印象的だ。独立採算制とはかみあいにくい文化施策を、いかに継続発展させていくのか、検討論議は続く。

ところで、近年の地域起こしは、ハコモノづくりに象徴された経済成長時代のようなありようとは異なり、人口減少時代に対応し、住民自身が深く関与してソフトをいかにつくるかという課題に向き合わなくてはならない。そのことを私自身が考えるために、このブログでも連載中の「沖縄の集落」（第5項に掲載）を含め、いろいろと発信している。

とくに、最近の南城市の人口増加を作り出しているアパート・マンションに住む、若い層を中心とした方々が、地域づくりにどうかかわってくるか、というテーマに取り組む必要があるだろう。那覇など都市圏へのベッドタウン的役割にとどまらず、彼らが南城おこしに積極的にかかわるような工夫が求められている。

そんななか、湯崎真梨子『続地産地消大学』南方新社2015年を読んだ。和歌山の山間地を中心に、地域づくりに取り組む和歌山大学の「長靴をはいたおばちゃん教授」である著者が、多様な取り組みの中で書いたものだ。

次の記述は大変興味深い。南城市にも同様の世界が健全に生きていると思うから、なおさらだ。

「よくある、高齢山村は生活に困窮している、という偏った思い込みは間違いです。高齢山村は多くの危機を内包してはいるけれど、それをしのぐ自立の姿を調査の度に確認します。日の出と共に起き、日暮れと共に寝ること、農作業で身体を動かしているのに、それでも散歩をして集落を毎日めぐること、斜面に棚田を作り、むらの土を踏みしめ、米を作り菜を植え、そして食事をする。こと。（中略）人間の生きることの本質を体現した、この価値を、次の世代に引き継ぐ方法はないのでしょうか。」 p 86-7



転入率 持ち家率

2015年6月5日

沖縄県企画部統計課「100の指標からみた沖縄」（沖縄県統計協会2014年）に掲載されたデータのなかに、次のものがある。

県外からの転入率	平成25年
1位 竹富町	7.62%
2位 恩納村	5.29
3位 座間味村	5.06
4位 渡嘉敷村	4.36
5位 与那国町	2.87
6位 石垣市	2.85
7位 那覇市	2.78
8位 糸満市	2.44
26位 南城市	1.44
平均	2.03

——やはり、観光の延長線上、あるいは「田舎暮らし」「癒し」「自然との交流」を求めて、といった感じだろう。それにしても、南城は平均以下というのは驚き。なぜだろう。

持ち家率	平成22年度
県平均	49.6%
南城市	76.5%

——沖縄の持ち家率はとても低い、そのなかで南城市はとても高い。それはおそらく公営住宅とかアパートが少ないからだろう。しかしこれは5年前の統計。それ以降激増しているアパートを勘案すると、県平均に近づいているのだろう。

「南城を歩く・暮らす」 新南城物語

2014年4月2日～12月11日

スタート予告

新年度になり、新しい気持ちになる。そこで、ここで暮らして10年目になることを節目にして、「南城を歩く・暮らす 新南城物語」を連載することにした。

まずは、私が現在地で暮らしてきた流れを紹介しよう。

2004年 玉城生活スタート

2005年～2007年 近隣の方たちと玉城ユンタクをしばしば開く。(のち「移動玉城ユンタク」に)

2006年 南城市スタート

2007年 「沖縄田舎暮らし」(アクアコーラル企画)発行

2007年 南城『地域フォーラム』(南城市・琉球新報共催)にパネリストとして参加

2009年～ シュガーホール運営審議会委員 副会長・会長を務める

2012年 それまでのブログ関連記事を編集した「シリーズ南城物語」をHPに掲載する(全5冊)。

1. 南城の聖地・名所
2. 南城の芸能・工芸・芸術
3. 南城のカフェ・レストラン・宿泊施設・ガーデン
4. 南城で暮らす シマの暮らし
5. 南城を盛り上げる

2012年～ 南城市学童保育連絡協議会顧問

2013年～ 尚巴志活用マスタープラン検討委員会座長

この連載を思いついたきっかけは、尚巴志活用マスタープラン検討委員会で、多様な南城物語と結び合ったエコミュージアムづくりが話題になったことにある。そこで、私なりの「物語」をあらためて描きたくなる。

一回読み切り型でトピック風を書いていくつもりだ。週一回ほどのペースを考えているが、いつまで続くかは、未定だ。

トピック候補は、

概観、自然景観・気候、祈り、人々、人口、人の出入り・移住、人の出入り・観光、観光スポット(琉球王国・玉泉洞、ユインチホテル、斉場御嶽、久高など)、カフェ・レストラン、産業、財政、交通、子ども・若者、女性、教育、芸術芸能、雇用、高齢者、医療福祉、基地、歴史、スポット、エピソード、
といろいろだ。

御注文などを、コメント欄に書いてくださるとありがたい。

1) 南城としてのまとめ 「なんじい」へ

8年前の2006年に南城市が誕生した。住民の希望で誕生したというわけではなく、国の施策による「平成の大合併」という外の要因を中心とするものだ。

合併する町村の組み合わせもいろいろなものが浮上したり消えたりして、最終的には、「思わぬ組み合わせ」となった。中心市町があって、実質的にそこに「吸収合併」されるような、よくある形とは全く異なる。だから、南城市となるべきまとめ、結合要因があったというわけではない。また旧4町村は、いろいろな面で、ほぼ均衡する存在だった。誕生直後の市長選挙には、旧4町村のなかの3村の村長が立候補したことが、そのことを示している。

また、市名にしても、試行錯誤のようだった。当初、有力だった東方(あがりかた)市は消え、新語である南城が浮上した。新語だけに馴染み感が弱かった。それでも何年か経つと、落ち着いてきた感がある。

だから、旧4町村のゆるやかな連合として始まり、相互ができるだけ平等になるような気づかいを感じるが多かった。市役所も旧町村役所をそのまま使用したため、4つ庁舎がある形を当初はとった。今は2

つの庁舎に集約されつつあり、また新庁舎建設計画の話も聞く。

住所表示も、南城市玉城・大里・佐敷・知念（旧町村）字〇〇（元の字名そのまま）といったものになった。最近、佐敷・玉城・知念にまたがる「つきしろ」が、旧町村表示なしにしたことが、大きな話題なったほどだ。

合併当初、住民たちは、旧町村を越えて他の3町村とどうつきあえばいいのか迷う感じだった。とはいえ、少しずつ旧町村の境界を開放し、境界を越えた交流が進んでいく。

また、南城市としてのまとまった行政施策やイベントが軌道に乗り始め、南城市域全体を対象とする活動を展開する組織がいくつも軌道に乗り始める。たとえば、青年会連合ができるとか、南城祭りが開催されると、それらが交流の場、さらには協同の場を提供しはじめた印象がする。

こうして、住民は、旧町村民としてのアイデンティティだけでなく、南城市民としてのアイデンティティも持ち始め、両者を併用するようになっていく。たとえば、南城市外で自己紹介するとき、南城市というか玉城というか、私などは迷う。だが、子ども・若者たちには、「南城市です」と名乗る動きが広がっているようだ。「ものごころついたときから南城だ」という層が分厚くなりつつあるのだ。

こうしたなかで、南城市としての、緩やかな統一性を示すシンボルめいたものを求める動きが出てくる。最初のころ、南城市マークとか、市花とかいっても、自分たちのものという感覚は薄かった。だが、ユルキヤラ「なんじい」の登場は、大きな変化をもたらしたようだ。ハート型の南城とか、東御廻り（あがいうまーい）の南城とかは、そこへの過渡期のような感じだ。

「なんじい」は、さまざまところで、シンボル化し、ナンバープレート、土産物などにも使用され始めた。

そんななかで、市外の人々に、「南城はなんか面白そうな動きがある」という印象が広がり始める。田舎の村々が集められてできた「市らしからぬ市」なんだけど、自然・歴史・文化・イベントが豊かで、訪問しなくなるようなところというイメージが出来てきたためだろう。

そうした市外の人たちの声に、「南城はおもしろいかも」と気づき始める南城市民も増えてくるようになったのだ。

2) 「手作り南城」と自然

このところの南城の特徴の一つは、大型ハコモノの建築とか大型企業の誘致とかいったものより、すでにある豊かな自然・文化を生かしたソフト中心の活性化ということにある。

2007年に開かれた南城『地域フォーラム』（南城市・琉球新報共催）にパネリストとして参加した私は、「手作り南城」という言葉を使って提案したが、まさにそういう方向で、実に多様な取り組みが進んできた。半島芸術祭 in 南城、オープン・ガーデン、南城祭り、青年芸能祭、尚巴志マラソンなどのイベントも、まさに手作りで、市民も来訪者もともに楽しむという感覚だ。

その中であって、今年20周年を迎えるシュガーホールで開かれる諸イベントは特筆すべきだろう。たとえば、オーディションによる新人演奏会は、県内外に広く知られるクラシック新人の登竜門だし、市民ミュージカル「太陽の門」にいたるまでの何回もの町民・市民ミュージカルは、市民参加型の企画で、これまた全国的に注目されている。

花野果村、かりゆり軽便駅、高原の駅、がんじゅう駅など市内各地にある地産地消の産品販売所も、「手作り南城」そのものだ。最近では、地域素材を使った商品開発も盛んになってきた。

さらには、歴史の長い字単位での取り組みも注目されている。知名のヌーバレー、仲村渠の綱引き、玉城の獅子舞などの伝統行事に加えて、最近では小谷のウククマーイといった興味深い取り組みもある。

こうしたことができるのは、南城の自然と文化の豊かさ、そしてそれを愛し、そのなかに溶け込んで暮らしている市民の存在だ。

こんな南城について、いろいろな角度から綴っていこう。

まず豊かな自然。

私たち自身の話になるが、10数年前に、再び沖縄生活を始めることを決めたのだが、その候補地としてこの地を選んだのは、自然の豊かさであり、自然に包まれた暮らしができるということに大きな理由があった。

なんといっても、海と森。伝説に近い話だがアマミキョー族が、当時としては大挙して沖縄に上陸し始めたのは、自然の豊かさに眼をつけたからだろう。海と森に加えて、水が豊かな耕作可能地があった。今、受水走水があるあたり、そして私が住む中山などは美田といわれた。そして農業技術が高まる中で、広大な佐敷の地が稲作を豊かに展開させたが、それが尚巴志の琉球王国統一作業の基盤になったともいわれる。

海は、長い長いリーフのある東南海岸、そして北側の中城湾沿い。泳げる場も多い。リーフ内外は、豊富な漁場もある。それが数千年にわたって、この地に暮らす人の食糧を支えていたはずだ。加えて、これまた豊かな食を提供した森に恵まれていた。だから、港川人、そして最近発掘が進んでいるサキタリの人々が、この地で暮らしていたのだろう。貝塚も多い。リーフの切れ目からは、島の外からくる船も入り、交易関係を作り上げた。藪薩の浦原の水路などもそうだろう。

そうした豊かな自然が、多様な人々の出会い・交流を生み出し育ててきた。

この豊かな自然を壊す動きが少なかったことも幸いだった。台風などの自然災害なども、自然自らの力で回復してきた。

とはいっても、沖縄戦は大規模な破壊をもたらし、地形を変えたようなところもあったようだ。現在はゴルフ場になっているが、玉城における戦後の基地づくりによる自然破壊も大きかったようだ（後に実は軍基地ではなくてCIA基地だったことが判明した）。グスクの石が基地建設のためにもっていかれて、タマグスクの修復作業が苦勞していると聞く。また、基地が豊富な水をとったため、志喜屋集落が大変なことになったと聞く。水豊かな地域であるのにもかかわらず、農地やゴルフ場での農薬使用もあってか、飲み水としては不適切になってきている事態は、自然破壊の類ともいえるだろう。水量が激減したカーもあるようだ。

また、沖縄県の多くの地域で埋め立てが進行し、自然海岸を壊す動きも広くみられるが、南城では、それをかなり制限してきたといえよう。自然を開発して形を変えるのではなく、自然を残すことが財産になるのだ。海の汚染をくいとめることも大切なことだ。人間が捨てたゴミが多い海岸の清掃の取り組みも広がっている。

3) タマグスクあたりからの海岸・太平洋の景観



こうした豊かな自然は、当然豊かな景観を持つ。私が気に入っている景観を、ここ数年で撮りためた写真のなかからいくつか選んで紹介していこう

まず、我が家から急坂を登って20～30分ぐらいで行けるタマグスク。700年ぐらい前に構築されたグスク跡が残っている。このあたりでは一番高く、360度の見晴しだ。我が家来訪者の多くを、ここへ案内してきた。県内居住者でも、ここに上られた経験者は少ない。

上左は入口の写真だが、いろいろなところで紹介されているから、ご存じの方は多そうだ。ここから

は、本島中部まで見渡せるが、なんとといっても、海岸・太平洋の広大な景観が素晴らしい。地球の大きさ丸さを感じる。



中左は南西方向を見る。奥武島、遠くに摩文仁が見え

る。すぐ近くに我が家も写っている。

中右はタマグスク



の門の向こうに、知念半島を見る。

ここは、聖地であり、雨乞いをするところでもある。構築された頃は、按司間の戦いもあったことだろう。グスクが構築される以前から、重要な地点として存在していたかもしれない。

以前は、グスク内まで上るのに苦労したが、今では木製階段が設置され、容易に上ることができる。斉場御嶽に匹敵する重要な聖地だが、訪問する人は少ない。ただし、夏至、冬至の時は、朝陽夕陽が、入口の岩の丸いところから差し込むのを見ようと、満員状態になる。

ここの石を隣接する米軍基地（実はCIA基地だったことが判明。現在は琉球ゴルフクラブ）建設に使用したらしい。そのためか、復元工事は長期にわり、現在も継続中だ。





前ページ右はタマグスクから南東方向の太平洋を見る。左の方に久高島が見える

ここから太平洋をのぞむのと同じような景観が、糸数グスクあたりから知念グスクあたりまでの南斜面に連なっている。だから、カフェも多い。景観を楽しむために建てられた住宅も多い。我が家もそうだ。場所ごとに景観の個性があって、楽しみが多い。

上左はタマグスクから西に800メートルほどにあるグスクロード公園から、南西方向を写した。摩文仁方向だ。

自然景観に酔うだけでなく、米艦隊が並んで艦砲射撃をし、日本軍だけでなく住民が隠れ逃げまどった光景を思い浮かべる。

我が家も、この写真のように、こうした景観を楽しめる場だ。

上右は浜辺の茶屋近くで撮影した夕陽夕焼けだ。

4) 知念岬・久高の景観

景観の2回目は、知念半島先端の知念岬あたりと久高島の景観だ。

左は、久高島に宿泊した朝、海岸から見た朝陽だ。島影一つない太平洋から上がる。太陽そのものと、それが海面に映ったものとが並ぶ幻想的なものだ。

久高島の南東側には、美しい海岸がいくつもある。昼間もとても美しいが、この朝陽は最高だった。

右は久高島から知念半島南岸を見る。



手前の島がコマカ島。その上は、百名あたり。白い大きな建物は、





KDD。その左下が我が家あたりになる。左端には、奥武島にあるシーサイドビューの細長い建物が小さく見える。わたしたちは、2003～2004年、我が家完成前にここに長期滞在していた。

上右は、知念岬から海岸沿いに北方向を見る。かすかに勝連半島や津堅島がみえるはずだ。リーフ、イノーが美しい

上左は、知念岬から西方向を見る。一番奥の向こう側が我が家があるあたりになる。右方にニライカナイ橋が見える。左の島は、志喜屋のアドキ島だ。

この海岸沿いに歩いたこともある。楽しくのんびりした散策になる。正面の集落は字知念。

5) 中城湾周辺の景観を楽しむ

南城市の北側の中城湾をめぐる景観も素晴らしい。大里城址公園、ユインチホテル周辺(とくに猿人の湯)、つきしろのカフェストリート、木創舎などからの景観が素敵だ。佐敷干潟の周りの海岸線から見るのもいい。佐敷津波古の小高い丘からもいい。

左写真は、佐敷の兼久海岸あたりからのスクナムイを中心とする知念半島の景観だ。

右は、佐敷干潟を間近から見た。



左は、佐敷海岸から、大里城址方向を見たものだ。手前にはシュガーホールが見える



右は、ユインチホテル周辺の自転車道から、与那原・西原方向を見たものだ。

天気がよいと、琉球大学病院、中城城址、勝連城址、ホワイトビーチあたりまでよく見える。

このように、方向・角度をいろいろと変えて見ると、楽しみが多い。

これらの視野には、尚巴志をはじめとする沖縄歴史物語が多い。また、馬天御嶽のように、がけ崩れで移転したなど、地滑りがあるところでもある。中城湾はかつて山だったのが、沈下したのだ、という説を聞いたこともある。中城湾は、戦前、山原船が出入りして物資移動が盛んであったし、軍隊も活用した。今は石油関連船の出入りも多い。他方で、クルマエビ、モズク、ヒジキなども含めて漁業も盛んだ。

6) 空と海の景観

右写真は、ヤハラヅカサ近くでの初日の出

景観は、風景だけでなく、空・海そのものの風景がある。

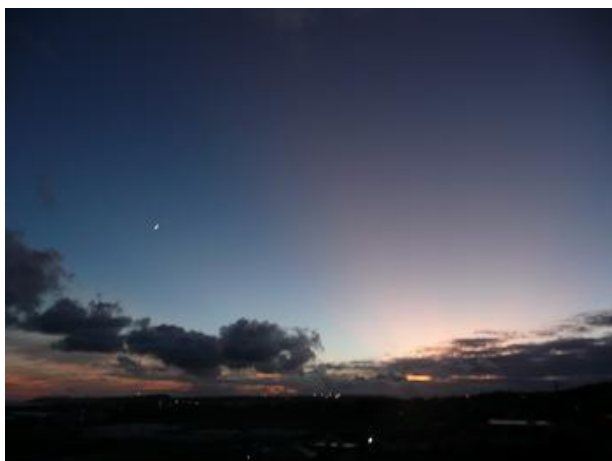
空にはまず太陽。ここでは日中の太陽よりは、朝陽夕陽が美しい。沖縄の信仰では、真上の太陽より、朝夕の太陽に関わるものが多いという話を聞いたことがある。キラキラ照り付ける太陽よりは、地平線・水平線のかなたから聖なる豊かなものをもたらし、また一晩だけ去るものとしての太陽、という存在イメージなのだろう。

南城では、東にある太平洋から上がる太陽。そこにニライカナイをイメージする人もいる。私もそうだ。それに久高島を重ねる人もいよう。太陽が沈む西は、私たちにとっては、冬になると摩文仁方向だ。南城の人々のほとんどは、丘に沈むイメージだろう。たとえば、佐敷の人は、大里の丘だろう。豊見城や糸満の丘をイメージする人も多だろう。東シナ海に沈む本島西海岸の人たちがもつものとは、ずいぶん異なるだろう。

左は、摩文仁の丘あたりの夕焼けと三日月

朝夕に見られる虹も美しい。

右写真は、我が家屋上から見る二重の虹。 百名の丘あたり。



次ページ右は2012年5月の月食夜の月星も美しい。



西の空は、那覇方面の明るい照明のあおりで見にくいですが、東空は月星がよく見える。玉城の我が家からは、天の川が、東から天頂にかけてよく見られる。夏の南の空のさそり座は美しい。他府県で見るとは難しいが、ここでは南の正面に見られる。その隣には、南斗六星も見られる。沖縄に住んで初めて知った星座だ。

空の景観には、他に雲雨があるが、突然飛び込んでくるのは、飛行物体だ。飛行機・ヘリコプター・ハングライダーなど。



飛行機は、那覇空港への進入路にあたることから、

数分間隔、混むときは1分感覚で旅客機を見る。我が家上空から3～4分で離着陸だ。



左写真は、夕焼けと飛行機。右の方にある那覇空港にまもなく着陸だ。

自衛隊機は多くないが、米軍機は結構通る。とくに嘉手納に離着陸するステルス型新型戦闘機は、高度1万メートル近いのに、激しい爆音を伴う。その多くは、太平洋上の訓練区域に通うものようだ。オズプレイもたまに見かける。

ヘリで多いのは、海上保安庁や警察のもので、夏の海岸レジャー者に注意を喚起するものが目につく。

夏になると、ハングライダーが多い。これが結構騒音を出す。時には民家近くに来るので、空からのぞかれているという気分になることもある。

右写真は、私たちが住む中山海岸で写した夕焼けと海。

海の景観に入ってくるのは、船だ。奥武島漁港を使う漁船。モズク収穫船。工事用船舶の通行も多い。タンカーやコンテナ船など、大型のものが沖を通るのを見かけることもある。風変りな船が沖に数日「滞在」することもある。

風が強いときには、沖のリーフに砕ける波がすごい。台風の際は、唸り声をともない、我が家まで聞こえてくる。とくに強いときは、リーフ内側のイノーにまで白波がたつ。



沖を通るクジラの汐吹を見た人がいるそうだが、私は未経験だ。イノーの上に、鳥が飛び交うのを見るのは日常的だ。イノーの魚をとらえているようだ。渡りの季節に、高い空を飛ぶ鳥の団体を見ることもある。

7) 気候

市域のなかでも、場所によって気候がずいぶん異なる。糸数に天気予報に登場する測候ポイントがあるが、海拔186メートルで、風通しがとてもよいところだ。だから、天気予報で那覇より3度ぐらい低い観測が報道されることもしばしばだ。南城市内の住宅地の大半は、海拔100メートル以下にあるので、条件が随分異なる。私が住む南海岸沿いの中山では、糸数よりもやや高めだと思う。

知念半島の北側の佐敷、東側の知念、南側の玉城、親慶原やつきしろなどの台地上、大里などの内陸部、離島である久高島とでは、気候がかなり違う。

斜面に立地するところでは、どちら向きかで大きな差異がある。たとえば、私たちが住む南向き斜面に立地する中山では、南風は海から直接当たるが、北風は後ろの丘にさえぎられる。台風の風への警戒も地域によって異なる。



また、雨にも違いがある。佐敷方向に出かけると、玉城では降っていたのに、佐敷では降っていないとか、その逆のことはよくある。また、丘の上では湿気が高く、霧が発生することも多い。親慶原の道路を通っていると、視界が50メートル以下になるほどの霧に出会うことがある。丘を越えて新里ビラや、その反対側の仲村渠あたりまで来ると、霧が消えてしまう。

写真は、海拔20～30メートルの我が家の屋上から、タマグスク方向を写したものだが、我が家から直線距離にして、500メートルほどの標高180メートルのタマグスクが完全に雲？霧？におおわれている。海拔100メートルぐらいからは、真っ白くなっている。

る。

10度以下になることは、年に一度あるかなしかだ。15度以下になると、寒いと感じる。夏は、30度を超すと、夏真っ盛りだな、と感じる。33度を超すと、たまらなく感じて、日蔭に限る。34度を超すことは滅多にない。名古屋や京都などで37℃などというニュースを聞くと、「沖縄に避暑に来ませんか」と言いたくなる。

道路や建物におおわれている那覇などの都市型気候とはずいぶん異なる。我が家のように海岸に近いと、ほとんどの場合、風が吹いているので、体感温度は、それほど上がらない。

それにしても、太陽が出る夏は、外出を朝夕だけにしたくなる。夕方散歩は、6時30分以降の夕食後になる。6、7月の日没は7時30分近くごろだ。

この地に住んで10年たつが、風速56メートルの台風を2度体験した。我が畑も含めて、近隣の木々が随分折れたが、目だった建物被害の話は聞かない。

我が家からは、大波が打ち寄せてくる光景が見られる。(次ページ写真)

満潮時になると、大波がリーフを越えて、イノ一を突進してくる。一度、そのまま海岸にまで達し、一部が防波堤を越えて畑を浸水させ、農業被害をもたらした。農業被害で大きいのは、風によるサトウキビの倒伏や、ビニールハウス被害とともに、潮風による塩害が大きい。海岸から300メートルほど離れている我が畑庭にまで被害が及ぶ。賢い人は、台風通過後に大事な植物を水で洗う。それをしなかった我が畑庭は、塩害をまとも受けたことがあった。



8) 災害と地形

前回、台風と台風被害のことを書いたが、今回は、災害と地形について書こう。

台風の時も含めて怖いのは、大雨によるがけ崩れだ。数日前も、志喜屋で大雨によるがけ崩れ、巨岩崩落が、新聞報道された。数年前にも、尚泰久王墓のある巨岩が崩れかかり、国道331号線に影響が出そうになって、応急工事が行われた。

南城市にはあちこちのがけ崩れ危険地域がある。地盤がクチャ（泥岩）層ででき、そのうえに岩がのっているところでは、クチャが水を通さないで、そのうえを地下水が通り、大雨が降ると崩れやすくなる。我が家近辺もその危険があるようだが、近年では実際には起きていない。

しかし、そうした地形が、垣花樋川、仲村渠樋川、受水走水などの、水量豊かな湧水をたくさんつくっているのだ。恵みと災害は表裏一体なのだろう。

中城湾を囲む地域も、がけ崩れの危険が多いところだ。数年前の中城の琉球大学からやや北東側の斜面が崩れ、住宅の被害があったことが報道された。南城市でいうと、馬天御嶽が、がけ崩れで移動したことはよく知られている。

大雨の時、水が溢れだすことがある。我が家周辺でも、しばしば水路から溢れる箇所がある。グスクロードなどの道路工事が、溢れる原因を作っていると語る人もいる。最近はや予測を超える雨量があることがある。そんな時は、大変気になる。

逆に、日照りで農作物被害が出ることもある。聖地タマグスクは、雨乞い行事が行われることでも、歴史的に有名だ。

2013年には、竜巻が海岸沿いに通過して、ビニールハウスなどが被害を受けた。沖縄は日本列島のなかでは竜巻が多いところだそうだ。

津波は、2011年3月の時は、わずかな水位上昇でとどまったが、数百年単位の歴史で見れば、大きな津波を受けただろう。私の推理だが、海抜20、30メートル以下の集落は、比較的新しくできたところが

多い。もともとの集落は、丘の中腹以上にある。私が住む中山集落も、もともとは、海拔50メートルほどに立地していて、戦前戦後の時期に、現在の20～50メートル地点まで降りてきたようだ。

津波と集落立地については改めて考える必要があるかもしれない。ちなみに、我が家は、20～30メートルに立地している。このぐらいなら大丈夫だろうと、私は勝手に判断している。

先に、クチャ層のことを書いたが、クチャが風化して有機物が混じって畑土化すると、ジャーガルになる。南城市の畑は、ジャーガルか島尻マージだ。いずれもアルカリ性土壌で、日本列島ではきわめて稀ということだ。私が育てているハーブ類にはアルカリ性を好むものが多いようだ。逆に、植木類には酸性が好きなものが多いので、鹿沼土などを加えないと育てるのが難しい。

中山海岸が、「遺物集積地」と文化財関係地図に書いてあるので、専門家に聞いたら、遺物が流れ着くことが多いからだそうだ。週に何回も海岸散策する私だが、遺物にめぐりあったことはない。ウミガメの遺体が流れ着くことはよくある。

リーフの切れ目から海流が流れ込んでいるためだろうか。海流が作る水路は、奥武島漁港に行きつく。中山付近は、小さな湾になっているが、それは海流が削ったものだろうか。私にはよくわからない。

写真は久高島から見た知念半島南部 左から奥武島・百名・仲村渠・垣花・志喜屋。手前の島はコマカ島。



9) 自然と祈り

南城市では、豊かな自然に包まれて人々の生活があるといった雰囲気をもつところが多い。といっても、自然破壊はかなり進んでいる。護岸建設が進み、自然海岸は百名ビーチ・藪薩の浦原など限られたところになっている。知念半島東北部高所のスクナムイが、ゴルフ場建設で削り取られて形が変わったことを悲しむ人の声も聴く。

(左写真は、大潮干潮時に写す。中央にヤハラヅカサが写っているが、このあたりが藪薩の浦原、左に百名ビーチが伸びる)



南城市景観まちづくり計画が2012年に策定され、景観保護、景観つくりの方向が一步すすんだ。とはいえ、都市化が進行している地域では、新築される住宅が、一軒一軒は工夫されているけれど、地域として美と調和を生み出すようにはなっていないだろう。「町並み」をどのように作り出していくのだろうか。

自然になじむ建て方についての模索がもっとなされていいだろう。我が家を建てる時、土地造

成はしない、立木は建物箇所以外は切らない、建物箇所の立木は移植する、ということをお願いして設計してもらった。なかなか難しい注文だったが、かなり実現した。グーグルの航空写真で見ると、森の中に我が家があるが、打ちっぱなしの建物なので、よく見ないと、どれが我が家なのか見つけにくいかもしれない。

この地域に人々が住み始めたのは、おおよそ2万年前のころだろう。途中、途絶えたこともあるだろうし、新たな移住者を迎えたこともあるだろう。だが、住んだ人々は、豊かな自然の恵みを受け取るとともに、自然に畏敬の念を抱き、祈りをしたことだろうと推理する。

その自然には、まずニライカナイの海がある。ヤハラヅカサは、その象徴的な場だろうが、南城市一帯のあちこちに、ニライカナイのようなものを感じる人は多いだろう。訪問者に「ニライカナイはどこですか」と尋ねられると、「あっちの方向です。あなたが聖なるものを感じる場所です。」などと話したりもする。

そのニライカナイの海から朝陽が上るときが、一番の祈りのときだろう。



そして、巨岩と森が結び合ったところに、人々は御嶽をつくり祈った。場所によっては、巨岩がないところもある。そこでは、人間は自然に包まれる感覚だ。

私の第一の「お気に入り」は、スーパナツカサ（潮花司）だ。濱川御嶽から20メートルぐらいの位置で、濱川御嶽に向き合った場だ。大木の枝が地面を覆い、周りも木々で囲



まれている。そこにいと、自然に包まれた感覚になる。そのスーパナツカサを支える、高さ数メートルの巨岩も大好きだ。オーラを感じる。他にも巨岩があり、巨岩に包まれた感覚になる。南方向に開かれているが、そこから出て海岸につくとヤハラヅカサだ。

上左写真はスーパナツカサ

上右写真は、スーパナツカサを支える巨岩

もう一つの「お気に入り」は、タマグスク（天つぎあまつぎの御嶽）だ。タマグスクの上の平らなところも木々に包まれる。その南の端からは、我が家を間近に見下ろすことができる。

カフェやぶさちの横を奥に歩いていくと、藪薩御嶽がある。そのすぐ隣には、景観が素晴らしいところがあるが、そこからは、ニライカナイの海が見渡せる。ここは、ヤハラヅカサや濱川御嶽の上方になる。

こうしたところが、南城にはいくつもある。

最近では、そうしたところが、パワースポットだということで話題になる。そして、多分、風水的にもいいところだろう。私は、そのあたりはよく知らない。我が家を訪問されたかたちで、神との距離が近い方は、我が家をパワースポットだ、気の流れがいいところだといってください。私にはよくわからないが、我が家は自然に包まれたいいところであることは、私も実感している。

多くの南城住民は、そうした場に住み生活しているのだと思う。南城がそんな自然豊かな場であり続けることを祈りたい。

10) 人口増・アパート増と住宅

南城の人々をテーマとして、連載の第二ステージに入る。

南城市の人口は、合併当初4万人ほどだったが、最近四万二千人を越えたという。合併当初、市街地がない「市」だし、中心地がない「市」という印象をもったが、それが面白いと私は思っていた。だから、「田舎」をウリにできるとも思う。

だが、都市の雰囲気をもつ地域が登場してきた。佐敷の津波古や新開周辺もそうだが、大里のスーパー周辺が特にそうだ。そして、ラッシュ状況にあるアパート建設が、都市化に輪をかける。その周辺を見ると、「田舎」を卒業した気分させられる。

その背景には、都市計画の変化がある。大里と佐敷は、合併前から那覇の広域都市計画区域に入っていて、土地利用の規制があったが、玉城や知念は未計画区域だった。我が家を建てた玉城では、容積率500%と、現実にはほぼありえない数値だった。我が家の現実の容積率は、50%なのだ。まさに田舎だったのだ。車庫証明も必要ない。

南城市発足間もなく開かれた町づくりシンポジウムで、佐敷の方が、当時移住してきたばかりの私の発言にかかわって、「玉城はいいが、佐敷では、子どもたちのために家を建てようと思っても、規制があって建てられない」とフロアから発言されたことが記憶に残っている。

しばらくして、そのシステムから脱して、南城市域全体の都市計画土地利用計画が作成された。そのことが大きなきっかけとなって、新しい地域にアパート建設ラッシュが起きた。従来からアパートがたくさん立地していた地域を含めて、現在、津波古、新開、新里（以上旧佐敷）、大里の平坦地、愛地、船越、當山（以上旧玉城）など那覇に近いところに新設が相次いだ。最近の南城市の人口上昇を生み出している大半が、これらの新築アパートへの移住者だろう。とはいっても、元々南城市出身の人が引っ越した例も多いだろう。以前は那覇などに住んでいたが、南城に適切なおところを見つけたミニUターンの人もいようだろう。

また、県営団地市営団地が、知念、仲伊保、新開、大里、嶺井、親慶原、百名などに立地しており、かなりの人口をもっている。なかには、そこだけで自治会をつくり、行政上の字相当になっているところもある。

また、ニュータウン（住宅開発地）が、大里グリーンタウン、大里ニュータウン、つきしろ、新開などにある。これらは、スタートして30～40年近くたつのだろうか。それでも大都市周辺でいわれるほどの高齢化が進行しているわけではなく、その近くには、保育所・学童保育クラブがいくつもある。また、字行事が活発で、青年会をつくったりして、市内でも活発な地区が多い。



また、南城には、約10の高齢者施設（有料老人ホーム、特別養護老人ホームなど）があり、そこに多くの人々の生活がある。他に寄宿舍などがあるかもしれないが、私はまだ気づいていない。

このほかは、一軒家だろう。各シマ（字）に属するのがほとんどだが、そうでないお家があるかもしれない。ニュータウンも含めると、おそらく住民の半数以上が一軒家に住んでいるだろう。そして、その多くが「先祖代々」の屋敷地だろう。

シマ（字、集落）の多くは、数百年以上続く農業中心でやってきたところだろうが、市内のあちこちに、近世末期から明治期に首里などから移ってきた人たちがつくった、かなりの数にのぼるヤードゥイ集落がある。既存の集落と合同した字になっているところもあれば、単独で字をつくっているところもある。

一軒家は、ほとんどがコンクリート作りだ。屋根を見ると、建築年代がわかるが、茅葺どころか、スレート瓦葺も少なくなってきた。最近では、再び見直されてきた木造が目立ち始めた。また、コンクリート建物にも、赤瓦屋根が目立つようになってきた。

写真は、つきしろから見た新開・津波古あたり。その先は与那原

11) 最大の「移住者」は女性たち

私が住む旧玉城村字中山を例にとると、いわゆる移住者は、世帯数にすると70余りの全世帯の中で数世帯だけ。アパートとか、商店街があるところを除いて、長年続いてきたシマでは同じような事情ではないだろうか。その移住世帯には、ヤマトからと県内からとがある。ヤマトからには、私たちのような、ヤマトウンチュとウチナンチュカップルの例もある。

土地を購入して家を建てて移住する場合は、集落の端、ないしは離れたところになることが多い。集落の真ん中は土地取得が難しいからだ。集落との付き合いを最小限度にとどめがちなセカンドハウスの感覚の人は、集落から離れたところに住む例が多そうだ。

私たちのように、集落の端といっても、集落の中といってもいいところに住んでいると、時々、珍しい顔をされることもある。シマの付き合いに馴染めるかどうかに関心をもたれるからだろう。私たちは、それなりに集落の中の付き合いをしている。

シマ（字、集落）に住んでいて気づいたこと。シマへの移住者で一番多いのは、シマの男性と結婚して、現在地に移住してきた女性たちだ、ということ。

あるとき、シマの人たちとの会話のなかで、「最大の移住者は、お嫁さんたちだよ」と、どなたかがおっしゃった。だんだん、その事情がわかってきた。

「お嫁さん」の中で、同じシマ出身の人の比率が、年齢とともに徐々に減っていく。80代以上だと、同じシマの人同士の結婚が多そうだが、60代ともなると、シマ出身の「お嫁さん」は例外的になる。多くは、近隣のシマ出身の方が多い。旧玉城村でいうと、旧知念、旧佐敷などから来られた方も多し。そして、南城

市域外から来られた方もちらほら見かける。40代ともなると、もうあっちこっちからこられている。時代変化は激しい。

他方、70代以上の男たちの多くは、生まれも育ちも現在の生活も、同じ一つのシマである。年齢が下るにつれて、その比率は減っていく。40代以下になると、現在はシマに住んでいるが、20代30代のころは別の場に住んでいたというUターンが普通になる。

そんななか最近、新しいケースが登場している。シマ生まれの女性が、男性を引っ張ってきて、Uターンする例だ。これから、こんな例も増えてきそう。また、シングルで生活する男性女性が、増えてきている。

シマの歴史を考えると、シマに生れ育ち、今もなお生活している人をイメージしやすい。その多くは男性だが、いまでは、シマ人口の半数どころか、四分の一もいるだろうか。

そうしたなかで、結婚でシマに来た女性たちが、重要な位置にあることを思い知らされる。男社会と見えるようなシマ社会を陰で支えてきた「移住女性」たちが、徐々に表にでて、シマ社会づくりに関わってきているのだ。

「移住」ということは、複数の世界の経験をもつということ、それだけに、「シマ」を内側からみるだけでなく外側からも見るができるという豊かさを持つということだ。

ということで、移住してきた女性たちの眼をとおして、シマを、さらには南城を見ると、興味深く重要な発見が数珠つなぎに出てくることだろう。

これまで、地域の多くの場で語られる物語は、無意識に男性型のものが多かったが、女性型で語る物語はどんなものになるだろうか。とくに「外」の経験を豊かにもつ女性の眼で、これまでの物語を語りなおすと興味深いものになるだろう。

12) 訪問者観光客

今回は、南城を訪れる観光客を中心に書こう。

ここ10年での激変は、観光タクシーを利用して個人がレンタカー使用になったことだ。我が家前の道路も、昼間は地元の車よりレンタカーが多いことがよくある。新原ビーチ、浜辺の茶屋・山の茶屋などへの訪問者だろう。なかには、受水走水・濱川御嶽・ヤハラヅカサ訪問者もいるだろうが、相当な「通」だろう。

おそらく、飛行機&ホテル&レンタカーのバックでの2~3人というのが多いだろう。観光バスを使う団体客もないではないが、我が家前の道路は狭すぎて通れない。おそらく斉場御嶽などへの訪問者が多いだろう。

他には、修学旅行が結構の数だろう。最近では、スポーツイベントなどへの参加者見物者もいるようだ。

人気なのは、カフェでのんびりすることだろう。この10年でカフェもずいぶん入れ替わったが、しっかりした特徴をもつカフェはずっと続いている。特に味は重要なようだ。景観の良さだけでは物足りないのだ。そうしたカフェは、いろいろな工夫を次々となされておられる。

味をウリにできる個性的なレストランが増えている。もずくそばのクンナトウは代表例だろう。また、タイ料理「シャム」のように、海外の料理を専門にする店が、ほかにも見かけるようになってきた。予約なしでは席がとれないような店もある。

ユインチホテルと百名伽藍のホテル以外に、ペンションと民宿がいくつかあるが、大半は那覇周辺ホテル

に泊まれるようだ。だから、夕方5時以降、観光客は見当たらなくなる。それでも、最近、工夫されたペンションなどが少しずつ増えてきて、滞在する方も増えているようだ。南城市に宿をとる方には、リピーターが多いように思う。

多くは、半日ぐらいの滞在なので、期待したい滞在体験型観光客の増加は今後の取り組み課題だろう。そんななか、修学旅行の民泊での滞在体験はとても注目できる。自然を味わうだけでなく、なんといっても人々とのつきあい体験がいい。修学旅行以外でも、こうした滞在が増えることを期待したい。夜の星月、海の音を聴きながら、静かに滞在することの魅力が伝わるといいな、と思う。そして、モノづくり、人つきあいを堪能していただきたいと思う。

ゴルフ大会や尚巴志マラソンなどのスポーツイベントに加えて、洋楽と芸能を中心に、シュガーホールなどでの企画への参加者が多いことも一つの特徴だろう。それらには、那覇周辺や中部からの訪問者が多い。県内からの訪問者が多いのも南城の特徴だろう。

残念ながら、路線バスを使用する訪問者は少ない。今後の工夫に期待したい。

観光施設でいうと、おきなわワールド・玉泉洞が一番注目されている。入場者数からいっても、美ら海水族館や首里城に次いで多いところではないだろうか。40年以上前の「復帰」頃開園したのだが、当時は玉泉洞だけだった。その後、いろいろな施設を加えた複合施設になっている。最近ではガンガラーの谷に人気が出ている。そこに、考古学上重大な発見が続いているが、そのあたりも注目されていけよう。おきなわワールドで見られるエイサーも人気だ。エイサーが好きならリピーターもいる。ハブショーも、マングースとの「決闘」はなくなったが、別の形で続き、人気のようだ。ここで作られる地ビールはかなりいける。



ここには、近隣の人たちが何人も働き、店をもっている。ここを含めて、観光産業が、南城では雇用の場として重要だ。どの観光施設にでかけても、そこで働く知り合いに出会うことが多くなった。

写真は、ガンガラーの谷

1 3) 私が案内するグスク・御嶽・海岸

今回は、観光客を含めて南城市訪問者に、私が案内するところを並べよう。

1) グスク

聖地という意味では、斎場御嶽と並ぶところ、人によってはそれ以上に感じる場所でもある。

・タマグスク 我家から車で5～7分。徒歩30分足らず。

最近、木の階段もできてアクセスしやすい。歴史上からみても、現在の祈りからいっても、随一の場だ

が、訪れる人はそれほど多くない。だから、他の訪問者といっしょになることは少ない。ただし、夏至と冬至だけは例外で込み合う。ここから我が家がすぐ近くに見える。

・垣花グスク ここを訪れる人は、滅多にいない。歴史は謎に包まれている。亜熱帯自然林のままなので、雰囲気を感じる点でもいい。

・他に、知念グスク、糸数グスク、大里グスク。説明しだせば、きりがなほだ。

2) 御嶽

斉場御嶽は混むので、避けて他を案内する。

・濱川御嶽と潮花御嶽、そしてヤハラヅカサ。この三つは至近距離にある。

・藪薩御嶽 上の三つの上方に位置して、直線距離は近いが、全く異なる国道331号線から入る。しかし、わかりにくい場所なので、案内者が必要などころだ。すぐ近くに「藪薩の浦原」という、海岸・イノー・水路・リーフ全体を見渡せる絶好の場がある。

以上は、数百年以上にわたって、もしかすると1000年内外もの間、聖地であったと推理される。いまでも、御願に訪れる人が絶えない。

・久高島 時間に余裕のある方々には、半日～一日かけての案内となる。集落のはずれにある、いくつもの聖地、そして、南東側のいくつかの完璧に美しい海岸を案内する。クボ御嶽は、男子禁制なので、私は素通りするしかない。他にいくつもスポットがあるが島の人の案内が必要だ。

・他にいくつもある。南城市域には、御嶽が密集している。

3) 海岸

・百名ビーチ ヤハラヅカサ・アージ島と新原ビーチの間の自然海岸。建物など人工物はない。最近は、カイトセーリングのメッカになっている。パラグライダーの人もいる。

すごく美しい。ウミガメも立ち寄る。時に、ここが聖地であることを無視して、濱川御嶽前で着替える人がいて、困るなあ、と思わせられることがある。

・中山・玉城海岸 ここは、私たちの海岸だ。週に2、3度、散策で訪れる。文化財が流れ着く海岸として指定されているが、ゴミも沢山流れ着くのが困りもの。

無論、隣の新原ビーチはよく出かける。私たちの子どもたちが小さい頃、年に数回泳いだところだ。そんな縁もあって、現在地に住むことになった。

・奥武島龍宮周辺 ここも聖地だ。しかし、水と岩石が作り出す景観は、聖地にふさわしい。

龍宮から東へは、美しいイノーが続く。

・他にもあざまさんさんビーチ、佐敷干潟など、南城市は多様な海岸に富んでいる。

写真は、奥武島龍宮



1 4) 訪問者案内でよく行く所

前回、よく案内するグスク・御嶽・海岸を書いたが、今回はそれ以外の所について書こう。

戦跡を案内してほしいといわれることもあるが、大部分の方は、摩文仁・姫百合などの戦跡地を訪問なされている。まだのかたには、それらを案内することもある。我が家から自動車ですぐのところだ。

南城市内では、アブチラガマだ。日本軍の野戦病院も置かれたし、住民の避難壕でもあり、数多くの悲劇的事態があったところだ。修学旅行とか平和学習などで、ガイドを受けつつ入る方がほとんどだ。その経験のない方を案内する。誰もが、強烈な印象を受ける。案内所で懐中電灯を借りるが、他のグループがない時は、非常用に2本借りることもある。真っ暗なか、懐中電灯も消して、ときに近い状態を実感してもらうことにする。負傷兵を含めた日本兵と住民がいる状況は、想像するしかないが。

何度行っても、私自身も衝撃が強すぎるので、最近では訪問回数が減った。

タマグスク訪問の際に、隣の琉球ゴルフクラブが、1972年までCIA基地だったことをお話する。

ユインチホテル近くに出かけた際は、琉球民政府跡地（写真）も案内する。その一帯が、戦後の要所であったことをお話する。まもなく、この周辺に市役所が建つ計画が進行中だ。



時間があるときは、「猿人の湯」にご一緒する。私たちは、月に一回以上は、ここでリフレッシュしている。

文化・音楽に関心があるかたには、シュガーホールを案内する。何か公演があるときはお誘いしたいが、旅日程とかみあわせるのは難しい。

南城市は、第一次産業が健在なので、畑を回りながら、農産物のお話をするのも多い。

電照菊、さやいんげん、ゴーヤ、オクラ、さとうきび……

そして、花野果村など直売所を案内することは、いつものことだ。

時に亜熱帯の森に行きたいとおっしゃる方もいる。そういう方は、山原の森にいかれることが多い。でも、我が家周辺でも、その気分を味わうことが可能だ。一番簡単なのは、我が家の隣の森をみてもらうことだ。広大な墓敷地なので、自然植生に近い。

少し歩けば、タマグスク周辺には、そういう場が多い。青少年の家のウォークラリーコース（写真）などは、山原の森に匹敵するほどだ。なにせ、このあたりの別名がヤンバル林なのだから。もっとも、みなさん、森に入る服装準備などがないので、「さわり」にとどめるが。他に、ニライカナイ橋、知念岬などの絶景の場にお連れする。そのついでに、木創舎など、工芸スポットを案内することが多い。半島芸術祭 in 南城が開かれるほどだから、訪問できる場所は、数十か所もある。我が家近辺でも、玉城焼、ク



ラフ陶など何個所かある。

お疲れの訪問者には、私たちが常連になっているマッサージ「蘭」にお連れする。十分すぎるほどの施術で、安価ときている。そしてユンタクが楽しい。都会では信じがたい印象をお持ちになれる。

15) カフェ・レストラン

数年前にも、このブログに南城市のカフェ・レストランを連載したのだが、そのころは、数回連載すれば、名の知れたところはほぼすべて紹介できた。そして、新規開店があれば、たいていは行って見た。

しかし、今では、新規開店も多いし、既存で頑張っているところも数が多くなった。つい先日、誘われて大里に新規開店のイタリアンレストランに出かけた。それでも、新規開店はフォローできる数ではなくなってきた。ここ数年で、それだけ事情が変わったということだろう。

南城は競争が激しい。生き残れる条件は、景観がいいことだけではダメになっている。やはり味が勝負であること、そして、その店でしかないウリが不可欠であること、ということがはっきりしてきた。

だから、10年以上やっているところは定評があるということだし、3～4年以上やっているところは、生き残れる条件を第一次クリアしたということだろう。

そして、地元客中心と、観光客および都市地区からの客を主対象とする店とに二分化しているようだ。観光客対象のところは、ガイドブックに載ることが不可欠だろう。そうだとすると、口コミの比率も高い。南城境界は、団体客ではなく、個人のレンタカーで来訪する客が中心だからだ。そして、客数が多いところは、予約するか長時間待つかが必要になっている。先日、来客を連れて、あるカフェに行ったら、40分待ちといわれてあきらめたことがあった。

そして、価格も、地元客対象と観光客対象とでは、大きな開きが出てきたことも確かだ。ランチだと、800円以下と、1000円以上との間に区切りがある感じだ。

南城のもう一つの特徴は、観光客対象の店は、ほとんどが昼間のみの営業だ。地元対象だと、夜の営業が欠かせない。夜営業は、玉城では数少ないのが残念だ。長年、地元対象になってきた数軒があるだけだ。知念も同じようなものだろう。

これまで書いたことは、「呑み屋」的要素が強いところにはあてはまらない。私が「呑み屋」要素があるところに、ほとんどでかけないから、事情がわからないのだ。

また、最近、雰囲気が都市化してきている佐敷の津波古地域や大里の中心街についても、私がほとんどでかけないから、事情はよくわからない。私の好みは、あくまでも「田舎暮らし」向きなのだ。

こんな私たちが、時々出かける店を並べておこう。時々といっても年に1～3回ぐらいだが。

黄果報（堀川）、奥武島海産物食堂、クンナトゥ（奥武島）、シャム（富里）、常（親慶原）……



いずれも、地元食材を生かしているところだ。

前ページ写真は、カフェくるくまから、イノー、久高島を眺める景観

16) 多種多様なイベント・行事

南城にはイベント・行事がすごく多い。それらによく出かける私だが、つきあえるのは、そのなかの1%にもならないだろう。

多い理由は、まずはシマ(字、集落)単位のものが多いからだ。長い歴史を持ったものが多い。私が暮らす中山でいうと、4年に一回のジーハンタ。年一回の豊年祭(出生祝い、敬老会を兼ねる)、年2回の綱引きが代表的なものだが、他の字ではもっと多そうだ。隣の奥武島などは、年に何回も、いや月一回何かがあるという印象だ。

こうした地域行事で盛んなのを並べてみよう。まず旧盆後の多様な芸能。エイサーだけでない。知名・安座間・久手堅のヌーバレーが有名だ。そして、獅子舞があちこちにあるが、隣の字玉城が有名だ。実は、宇中山にもあるのだ。

南城市青年会連合会主催の青年芸能祭りは、それらを一挙にまとめてやってくれるので、とてもいい。シュガーホールでも上演することがある。

そして、旧盆前の綱引きもすごい。あちこちである。以前は、国道331号線を通行止めにするくらいだったそうだ。仲村渠のものが有名だ。さらに旧5月4日のハーリーもいくつかの漁港で開かれる。奥武島ハーリーでは、学校が休みになり、小中学生が行うレースもある。

シマ単位でないものとしては、4月ごろ門中が集まって、墓の前で行う清明祭が重要な行事だ。開催日が集中する日は、道路渋滞があるほどだ。旧3月3日の浜下りは、個人・家族単位の行事の印象だ。

合併前の旧4町村でしていたもので、南城市が引き継いで市行事になったものがある。尚巴志マラソンが代表例だろう。

スポーツ大会は、字対抗形式で、種目ごとに開かれている。先日は陸上競技大会があった。私が毎年参加するのは卓球大会。南城市第一回大会で中山は優勝したが、その後は惜敗が続く。そして、一昨年からはとうとう選手がそろえられなくて、欠場。昨年からは、船越の助っ人として出ている。

無論、小中学校単位での運動会はあるし、字で運動会をすところもある。驚きは、門中で運動会をすところがあることだ。

他にも、自転車やウォーキングの大会もあるし、小規模のウォーキング企画もある。

シュガーホールを会場にしたイベントが多いのが南城の特徴だろう。新人演奏会、ジャズ、オーケストラ、そして数年に一回だが、市民ミュージカル。毎週一回以上の企画があるといっているほどだ。他にも、各地の公民館ホールなどでの行事がある。

さらに、文化協会の展示会が体育館を使って開かれる。有志が主催するクラフトの展示販売企画などもあちこちで開かれる。そして、昨年のハーブフェスティバルのように、全国から参加者が集まる企画もある。ストリートダンスの全国大会が何回かあった。

大規模なものとしては、多分4年に一回ということだろうが、グスクロード公園での南城祭りがある。数

千人以上が集まる。最後の花火打ち上げを、私は我が家屋上で楽しむ。直線距離は1キロもないので、大いに楽しめる。

これらの参加者は、地元民中心のものが多いが、地元に加えて南城出身者が参加するものもある。さらに市外からたくさん参加する企画もあるし、県外参加者がいる企画まである。なかには、市外参加者の方が地元参加者より多いものもある。そんなイベントの多さが、南城市の知名度を上げているようだ。



市外からの参加者が多いし、企画の面白さと継続性で特筆したいのは、半島芸術祭 in 南城とオープン・ガーデンだ。次回に詳しく書くことにしよう。

写真は、2008年開催の南城祭りでの猛烈に大きなムーチー作り光景。大里のムーチー伝説の芝居とこのムーチーづくりには大変な観客が集まった。

17) 11月のイベント 半島芸術祭・オープンガーデンなど

南城市広報誌「南城」10月号は、写真のような別冊を作り、11月に行われる盛りだくさんのイベントを紹介している。

その中で、今年初めて登場するもの、あるいは、今年だけの単発企画が6つ。

物産館1周年記念イベント(2～9日)

小池博史ブリッジプロジェクト「注文の多い料理店」(11日)

文化講演会「よみがえれ尚巴志」(16日)

南城市グスク巡りコンサート(18～21日)

久高島のイザイホー展(22～24日)

うたとライブで奏でる影絵の夜(23日)

尚巴志活用マスタープランの流れでのイベントが多いのが特徴だ。全部は無理だが、私もいくつかには参加したい。

毎年開かれるものが三つ。

尚巴志ハーフマラソン in 南城(9日)

第7回半島芸術祭 in 南城(14～24日)

南城市憩いのオープン・ガーデン(22～30日)

ここ30年余り走ったことさえない私は、マラソンに参加する予定はない。他の2つは、スタート以来、ほぼ毎回参加している。



たくさんの会場があるので、毎年、これまで行ったことのない会場を中心に回っている。

まず半島芸術祭。スタート当初、恵美子と隣人とで、私たちの家を場に、日時を限定して開催したことがある。100名を超す方が訪問されて、大変な賑わいだった。芸術素人でも開けるのだが、その後は息切れしている。

実にたくさんある工房を訪問するのは実に楽しい。そして、なぜか、作品を購入してしまうことが多い。ということで、たくさんの会場を訪問すると、ふところの難しさが生じる。作品には、目玉が飛び出るほどの価格のものから、100～200円のものまでさまざま。作っているその場なので、とても楽しい。

以前は、あちこちで活躍され半ば引退された方々が中心になって運営しておられたが、今では、工房の主たちが自ら運営なさっている。

オープン・ガーデンも実に楽しいし、気分が爽快になる。大小、歴史、花中心・樹木中心、洋風・和風・琉風・自然風、立地条件など、実に様々だ。私は、我が庭作りに大いに参考になっている。

双方とも、訪問は平日がすいていていい。ゆっくりと楽しめる。ホストとユンタクする機会も多い。植物談義、工芸品づくり談義が楽しい。思わぬ再会、新しい友達づくりの機会になることもある。

最近では、観光バスでの訪問ツアーも組まれている。県内各地からの訪問者が多いが、県外からの観光客が増えれば、滞在体験型観光の一環となろう。

18) 人生産業が盛んになりそう 産業を考える

南城市域の産業の特徴を考えてみよう。

まず1000人以上も働くような大きな企業はない。おきなわワールド(写真)が一番大きいのだろうか。産業というには似つかわしくないが、市役所・刑務所・自衛隊に雇用されている人は多い。他に、ゴルフコース・ホテル・福祉施設・学校・スーパーなどがあるが、100人以上働くほどではない。

それは、1960～1990年代日本の経済成長を作りだした大量生産大量消費型の企業がない、ということでもある。そして、これからは、そうした大量生産大量消費型の時代ではない。

では、南城市域の産業の特徴は、何だろうか。あるいは、今後充実発展が予想されるものは何だろうか。「人生産業」だと私は思う。この言葉は、私が作った言葉であり、いまここで初めて使う言葉だ。

そのわけを書きならべていこう。

1) 人生の基礎としての命・健康を支える中心の農業漁業が、長く培われてきた知恵をもとに、加工販売も加えた第六次産業型として、今後も継続展開していこう。オクラ・サヤインゲン・パパイヤなどの野菜、モズクなど水産物など、健康食品系のものが中軸をなす。さらに人々を癒す菊の生産も多い。

仲善や沖縄長生薬草などをはじめとして、農産物を加工して健康食品などにする企業が増えている。花野果村や軽便駅など、農家と直結したファ



ーマーズマーケットなども増えている。

2) 老人ホームなど福祉施設が多く見られる。市外からの入所者も多そうだ。自然環境・人間関係などを求めて、市域内の施設を選ぶ人が増えてきそうだ。

3) 西洋医学だけでなく、針灸マッサージ整骨整体など、代替医療と呼ばれるものが多様に展開している。自然と人間関係が作りだす「癒し」効果と結びついた展開が、今後の広がりを作りだしそうな気配だ。観光とも結びつきそうだ。

4) 観光は大量消費型というよりも、「癒し」「精神性」などと結びつき、あるいは体験などと結びついたエコロジーなものとして、人生探求型のものとして展開しつつある。久高島や斉場御嶽が代表格だが、他にそうしたところは数限りなくとっていいほどある。パワースポットとして評判になっているところも多い。ホテルやペンションなどもそうした特徴を押し出している。数多いカフェ・レストランも、こうした色彩を帯びるユニークなところが多い。こうした傾向は、今後さらに強くなるだろう。

5) 人生の質を高め充実させる工芸・芸能・芸術の創造に携わる人が多く、そこから生み出されたものを楽しむ場、工芸品販売などが大変多い。観光訪問者にそれを楽しむ人が多い。

6) 子育て・教育にかかわる保育園・学童保育・学校などが、自然と人間に包まれた環境の良さと結びついて展開し、その色彩をさらに濃くするだろう。

若い女性を対象にした西大学院のような特色ある学校もある。

7) 健康づくりにかかわるスポーツ系の施設・イベント、そしてマリッジが增えつつある。観光と結びつく例も多い。

8) 「あの世」にかかわる墓なども多く、ニライカナイを実感できるいくつかのスポットも特色をなしている。現世の人生を越えた結びつきを感じやすい場なのだ。そうしたことを支え促す「産業」にも注目が向けられている。

こうしたみると、まさに人生産業展開の場として南城があることがわかっていく。

19) 車中心の交通事情 車過剰依存からの卒業へ

南城市は、他市町村同様、圧倒的な車社会だ。車以外では、公共交通機関としてのバスと、「デマンドバスおでかけなんじい」「市役所支所間のバス」「JAバス」そして、各種福祉施設などの送迎バスがある。加えて、タクシー、そしてレンタカーが目につく。

車中心を推進した一つは、道路整備の進行だ。車と道路整備に反比例するかのようには、バスが衰えていった。路線・本数が減った。私がよく乗るバスでは、市外から南城市内に入るとき、「このバスは、地方自治体の補助金で支えられています」という趣旨の放送が流れる。乗客が少ないので、補助金なしでは、赤字だからだろう。終点間近の我が家近くの中山バス停で乗降すると、最初の客、最後の客になることが普通だ。



以前と比べれば、運行本数が減ったとはいえ、時間のずれは数分以内にとどまることが多くなったし、バスの中での転倒を防ぐための配慮もすっかりなされている。結構使ってよいバスだ。

タクシーは、大里や佐敷では流し運転のものに乗ることができるが、玉城・知念では電話呼び出しになる。最近では、10～20分で来てくれるので助かる。市民割引をしてくれることもある。

道路は整備されたが、歩道整備が不十分なところ、歩道はあっても、草木などの障害物のため、電動車いすの人が通行できるかと気になることがある。また、近年はスポーツとして自転車に乗る

人が多いが、自動車運転の際、かなり気を使う。普通の人が自転車に乗るのを見かけることは少ない。

「おでかけなんじい」「支所間のバス」「JAバス」などは、今後の拡大が期待される交通機関だ。というのは、車を使えない交通弱者と呼ばれる人々の移動にとって不可欠な存在となりつつあるからだ。そして、ベビーブーム世代が、あと10数年で交通弱者の仲間入りすることを見込んだ対応が必要だからだ。

そして、いずれにしろ、現在のような車社会というか車過剰依存社会を徐々に卒業していく必要があるように思う。私個人も、車卒業になりそうな10年後を見据えて行動しなくてはならない。たとえば、買い物はどうするか。近所のある男性高齢者は、国道の歩道を杖をついて徒歩で出かけている。関係省庁の用語では「買い物難民」になる。

10年後というと、沖縄でも人口減少が本格化するようだ。人口と年齢構成に対応した交通を考えていなくてはならない。

南城市には、戦前軽便鉄道が活躍したところがある。そのこともあって、鉄道敷設への期待が高まる。国道331号につくってはどうか、などという意見を聴くことがあるが、現実的論議にはいたっていない。

気になるのは、レンタカーがあまりにも多いことだ。我が家周辺の道路では、通行量の2～5割ぐらいを占めることが日常的だ。入り組んだ田舎道に迷う車も多い。住民の日常生活向けの狭い道に、地域事情に疎いレンタカーがたくさん入ることは、いろいろな問題をもたらす。このあたりでは、制限時速前後で走る車がほとんどだが、レンタカーは、農作業用の軽トラが走る農道・市道を40キロ以上で走らせるものが多い。散策するときに怖さを感じることもある。

「よんなーよんなー」でいきたいものだ。最近、工事を知らせる看板に、ウチナーグチで安全を呼びかける言葉が書かれていることが目につくようになったが、観光客の方にもよろしくお願ひしたいものだ。

自動車販売店、自動車修理工場、給油所などは、かなり充実している。県道国道などでは、道路標識がしっかりしてきたが、小さな道路、集落内道路などは、集落の人しか分からないところが多い。そろそろ、しっかりした集落内案内図がほしいものだ。

写真はグスクロード 歩道も自転車道もある。

20) 買い物 物価

南城での買い物・物価ということになると、「暮らし方による」とまず言いたい。単純化していうと、都会型暮らしと田舎型暮らしとの違いがある。もともと、最近では両者の違いは縮まっているといえるだろうが。

簡単にいうと、都会型暮らしは、「便利さを求めて、お金で買えるものは買う」であり、田舎型は、「できるだけ、自前もしくは近隣や親戚関係で調達できるものは、お金に頼ることを少なくする」というものだ。野菜を例にとると、こんなヴァリエーションがある。

家庭菜園で作る。

近隣や親戚関係で交換し合う

近所の個人商店、共同売店、ファーマーズ・マーケットなどで買う。

近くのスーパーで買う

離れているとしても、有名な大規模スーパーで買う

このなかの近所の個人商店・共同売店はすごく減った。私が住む近辺には、もう個人商店はない。価格は、店によって大きく変わる。那覇あたりで買うのと近所で買うのとでは、野菜などでは大きな違いがある。観光土産物などは、国際通りや空港で買うのと、地元で買うのとでは、倍ぐらいの違いがある商品もある。食事をするときも、観光客が出入りするところと、地元の人が出入りするところでは、かなりの差がある。

私たちは以上のなかでいうと、田舎型暮らしに近い。8年ほど前にテレビ番組「月十で暮らせる町・村」に出たが、番組が示した計算法による月々の生活費は、二人暮らしで8万5千円だった。それを聞いた東京の人の感想は「嘘でしょう」だったが、地元の近所の人には「浅野さんたちは、そんなに使っているの？」といわれた。

最近、南城もスーパー戦争が激しい。そのあおりで日用品の個人商店は壊滅状態だ。人口4万人の南城市に、大きなスーパーが10近くもある。知念と玉城にある農協スーパー以外は、大里・佐敷にある。この2地域が、最近では都市的な雰囲気を作りだしている。

コンビニも増えた。でも、やはり大里・佐敷が中心だ。我が家近くというと、車で10分の親慶原の2軒ぐらいだ。コンビニの世界にひたっている都市からくる若者は少なさに驚いていた。

ついでに書くと、飲料の自動販売機の多さには驚かされる。畑の真ん中にもけっこうある。通行量がとても少ない道にもある。困るのは、夜それが異様に輝いて、夜の静けさ暗さを台無しにしてしまうことだ。

こんな事情だから、車なしでは「買い物難民」になる。総務省の「買い物難民地図」に、我が中山も入っていた。私たちが車が使えなくなったときには、かなり苦労しそうだ。

郵便・宅配、ケイタイ、インターネットなどは、最近では都市地区と変わりなくなった。

郵便局以外の金融機関は、銀行が佐敷に一軒だけだが、最近ではATMがあちこちにできて、困ることが激減した。

2 1) 高齢者向け医療福祉

高齢者入門期にある私は、高齢者向けの医療福祉がどうなっているのかに関心を向け始めている。

まず、病院は、佐敷の入り口にメディカルセンターがある。我が家から車で20分もかからない。車で30分でいける病院ということでは、数か所ある。ホームドクター的機能を果たす地元密着型開業医は、大里や佐敷にいくつかある。しかし、知念・玉城に内科はない。対照的といっているほど、歯科診療所は多



希望すれば12枚使える。一回につき1200円の補助が出る。私は、すべてマッサージ「蘭」で使用している。これを使うと、一回1000円もしない額で1時間たっぷりマッサージを受けられる。私の健康の源の一つだ。

また、各種の老人ホームも増えてきている。高齢者の皆さんに会うと、このあたりの事情を聴いている。もしかすると、私も利用することになるかもしれないので、情報を増やしたいからだ。設備サービスの整い方、料金など、多様なようだ。

高齢者が集うということでは、市内何カ所にある福祉センターなどが活用されているようだ。また各地域の老人会が活発な活動をしているようだ。ゲートボール、パークゴルフなどのスポーツも盛んだ。私も誘いを受けたことがあるが、まだ参加していない。

60～90代ぐらいの人々が集えるサークルめいたものが、もっとあればいいと思う。文化協会の展示会に行くと、絵画・写真・盆栽・・・などの趣味グループが活気を呈しているのがわかる。

地元で長く住んでいる人が集う共同体型と、多様な人々が自由に集う市民社会型とがあちことにあるが、さらに豊かに広がっていくことが期待される。

い。

だから、医療事情がとくに悪いということはない。しかし、足腰が悪い人、自動車が使えない人は、かなり苦勞する。近隣の人は、親戚知人に送迎を頼んでいるようだ。救急事情は、悪くない。我が家から車で数分のグスクロードに消防本部があり、市内各地に向かう。

代替医療でいうと、いろいろあるが、近年整骨院が増えてきたのが特徴だろう。乱立気味とさえ感じる。

私は、これらから十分すぎる恩恵を受けている。写真のような「南城市国民健康保険 はり・きゅう・あん摩・マッサージ施術利用券」というのが、



広報なんじょう「ほろよいまち談義」と 玉城青少年の家嘱託職員大量募集

2014年2月14日

私は、南城市広報誌「広報なんじょう」を結構愛読している。身近な情報が多いからだ。

今回の注目点

1) 硬いトーンが強かった以前、編集担当者に「行政情報だけでなく、インタビューなどの親しみやすい特集記事などを入れてはどうか」と語ったことがある。

今回で連載6回目になる「みえる音、きこえる魂—シュガーホールより—」(中村透執筆)は、その先駆けになるだろう。

加えて今回、「新連載 ほろよいまち談義」が、マイケル中本×平田美智子の対談でスタートし、紙面を豊かにしている。マイケルさんは存じ上げないが、平田さんは、市内の行事に出掛けると、必ず会うというほどの「すごい」人だ。演技力もすごい。

もう一つ驚いた記事がある。それは、「みえる音、きこえる魂—シュガーホールより—」記事の下の「玉城青少年の家 嘱託職員募集」だ。募集は、専門職員(教職経験者など)4名、専門職員補1名、事務長1名、庶務会計1名と多い。職員総数は知らないが、推測すると、所長以外の多くが新規採用ということになるのだろうか。

加えて、募集が「南城市シルバー人材センター」(852-6655)から出されていることにも驚いた。県立施設が民間委託とか指定管理者とかになっている話は耳にしてきたが、我が家から徒歩20分の「玉城青少年の家」がそうになっているとは知らなかった。

これまで以上に、青少年のために有意義な施設になることを願う。



いろいろな南城物語候補

2013年8月20日

16日記事(第3章に掲載)に書いた尚巴志活用マスタープラン作成作業に関わっての話。

南城物語を綴ろうということで、項目を立てて年代順に並べてみた。

- 1) 2万～1万年前 武芸洞に住んでいた人々。山の幸・海の幸
- 2) 3000～1000年前 藪薩の浦原の水路で、交易もしながら狩猟採集をしていた人々
新原貝塚 百名貝塚などもかかわる。
- 3) 1000～800年前(推理) 移住のためにヤハラヅカサに上陸した人々。受水走水を使って農耕を始めた人。交易を盛んにした人。
- 4) 700～600年前、知念グスク・タマグスク・糸数グスク・大里グスク・佐敷上グスクなどをつくり、相互に対抗・連携しながら、地域を統治していた按司たち 軍事・交易・農業・オモロ
- 5) 600～500年前 農業生産と御嶽をよりどころに、集落を作り上げ維持していった人々
- 6) 500年ほど前 女性を中心に、祈りをリードしていた人々。首里王府によるノロ・ユタ統制に翻弄

されつつも。斎場御嶽・久高の祭祀

7) 数百年前 大里 オニムーチャー伝説

8) 300年前 蔡温治世の中、村分け、村の移住など、新たな村づくりに努める人々。祈りを含む村行事、共同作業など

9) 200～120年前 首里から田舎に移住してきた人々

10) 250～150年前 海外からの漂着者やペリー軍隊の沖縄滞在などの中で、外国人との出会い。

字玉城の稲福さんの話。奥武島への漂着。

11) 125～100年前 小学校設置・就学督促への様々な対応

12) 110～70年前 海外移民の物語 南米・南洋・本土出稼ぎ

13) 110～70年前 徴兵をめぐる物語

14) 120～70年前 サトウキビ生産をめぐる喜びと悲劇

15) 120～70年前 村芝居などの地域芸能

16) 90～70年前 軽便鉄道

17) 70～68年前 沖縄戦 アブチラガマ

18) 68～65年前 米軍統治 知念市 収容所 米軍政府・民政府 知念高校 親慶原

19) 60～41年前 米CSG 水をめぐる志喜屋住民の苦悩

20) 55～30年前 離農者の増加・勤め人の増加 本土就職

21) 50～20年前 地元産品 インゲンマメ モズク エビ

22) 20年前～現在 シュガーホール 音楽

23) 20年前～現在 工芸の活発化 陶器・小物制作 半島芸術祭 in 南城

24) 20年前～現在 観光の活発化 たくさんの絶景カフェ

25) 20年前～現在 市外からの人口移入 那覇などの都市地域から 県外・外国から 新たな出会い

26) 8年前～現在 南城市誕生 町おこしへ

27) 近年 大里・佐敷を中心に、都市化傾向 ニュータウン、スーパー・コンビニ、アパートの増加
インターネット環境の整備

これらの項目を改訂・取捨選択しながら、物語を書いていきたいな、と思っている。うまくいく自信はないが、数項目以上は書きたいと思う。

南城市域全体の「エコ・ミュージアム？」づくりのきっかけになるかもしれない。

南城論への準備 2012年3月29日～4月13日

1 中心市街地なしに4町村が合併

振り返ってみると、沖縄についてこだわっていろいろと考え書いてきたことに比べると、南城・玉城にこだわって考え書くことが余りにも少なかった。無論、沖縄生活通算25年と南城・玉城生活通算8年の違いがある。それにしても、南城・玉城については少ない。それでも、沖縄おこしを含めて地域おこしということ、ここ6～7年のテーマにしてきたわけだから、多少なりとも考え書くことをしてみたい、と思うように

なった。

とはいっても、少しはしたことがある。特に、2007年の琉球新報と南城市主催の地域フォーラムの際に、パネリストとしてかかわった前後がそうであった。玉城ユンタク会を重ね、さらに南城移動ユンタク会をもち、南城・玉城在住のいろいろな方と論議した。また、2007年刊行の「沖縄田舎暮らし」でも少し触れた。

また、さらにずっとさかのぼると、シュガーホールで90年代半ばの町民ミュージカルが作られた際、いろいろと示唆を受けるとともに、応援をしたこともある。

そして、今、縁あって、シュガーホールの運営審議会の会長になって改めて、このことを考えるきっかけをいただいた。ということで、これからいくつか書き散らしていこうと思う。

まずは「南城」ということについて、書こう。

周知のように、南城市は、旧大里、佐敷、知念、玉城の4町村の合併によって生まれた。

合併する町村の組み合わせが変化した経緯がある。報道によると、当初は、佐敷、知念、玉城に与那原の4町村の組み合わせ、また大里は南風原などとの組み合わせが模索されていた。なんらかの合併が必要だと言うのだが、それは「内発」的なものではなく、「平成の大合併」と言われる外的なものであった。

だから、合併にあたって一つの強力なアイデンティティがあるというわけではない。「東四間切」という表現が使われるが、それはそんなに日常的なものではなく、そういう言い方が昔あったと聞いて、初めて知ったと言う人の方がはるかに多いだろう。だから、合併後も、旧町村単位で考えることがかなり残っている。

しかも、各旧四町村を比べると、人口・面積・経済力・産業基盤などで、著しい差異は見だしにくい。よくある合併は、中心になりそうな市町村があって、そこに他が「吸収」される感じのケースが多い。しかし、南城はそうではない。

中心市街地があるわけでもない。南城市を取り囲む、与那原・南風原・八重瀬の三町の方が、都市的様相が強い。だから、「市」といわれても、どこが「市なの」という感じにさえなってしまう。

むしろ、「市らしくない」ところがいい、ということかもしれない。また、求心的アイデンティティがなく、多彩さがあることにアイデンティティを求めるのが現実的かもしれない。

そして、重要なのは、新しい「市づくり」を「ゼロに近い形」で始められたことだ。旧町村が各々持っていた宝物を共有物として広げられるのだ。プラス思考でいくと、興味深い模索が始められる。実際、そのように進行しているように思う。

2 大量生産・大量消費ではなく、知識創造型へ

南城市内の産業構造を見てみると、圧倒的に第一次産業と第三次産業であり、第二次産業は少ない。建設ラッシュの時代には建設業が盛んだったようで、現在の高齢者には第一次と建設労働との兼業の経験者が多そう。

建設関係以外の第二次産業で目立ったものは少ない。また、第二次産業には大規模工場をイメージすることが多いだろうが、道路工事の下請け現場に典型的なように、比較的少人数での肉体労働がかなりの比重を占める。その点では、機械化以前の第一次産業と共通した面がありそう。

こうして見てみると、大量生産・大量消費を促した第二次産業的ありようの影響が、都市地域と比べれば、

低いといえそうだ。だから、第二次産業比率が低いということを「遅れている」といって否定的にとらえる必要はない。むしろ、開き直って、そのことを肯定的にとらえてはどうだろうか。

第三次産業従事者は、市外への通勤者が多く、市内では公務を除くと、小規模経営の店とその従業員が多い。それらには観光に関わるものが多い。比較的大きい玉泉洞や琉球ゴルフクラブなどにしても、たくさんの従業員をかかえているわけではなさそうだ。市内各地に散在するカフェなど小規模店が圧倒的に多そうだ。

また、近年では福祉医療関係で働く人の増加が目につく。今後もこうした観光・福祉・医療などの分野で、機械に依存せず、人手による「世話」「ケア」にかかわる業種が重要な位置を占めていこう。さらに、それらは人間が作り出す文化にもかかわる。工芸など文化的なモノづくり、芸能・芸術など人自身による表現などがそうだ。さらに製品のデザインもそうだ。

そうした「産業」展開を追求していくことが一つの焦点で、観光もそうした表現・創造とからんでいく。さらに、サービス提供者対享受者の関係ではなく、享受者自身も創造していく、提供者自身も学び発見していく、という体験型のものが展開していくだろう。

第一次産業や第二次産業も、そうしたタイプの第三次産業と結びついて展開する動きが広まろう。

とすると、これらの第三次産業が、単なる人手の提供ではなく、創造性あふれるものへと展開していく。また、その人手が「知識創造」と結びついた知識労働となっていくだろう。大量生産ではなく小品種少量生産提供になると言うことは、そうした比率を高めていくということだ。

そこで必要になってくるのは、そうした人材を育成していくことだ。しかし、残念ながら、それへの関心は低い。学校教育でそうした視野をもつことは、学校教育のなかでいえば、1%もあるだろうか。美術関係の大学や専門学校を卒業した人が、その専門性を生かした生産販売をしているのが、先駆的事例だろう。

ちなみに、ていだブログの南城地域のベストテンには、こうした関係のサイトが常時ならんでいる。おきなわワールド、ガンガラー、ユインチ、虹亀商店、アマムなどなど。

今後の夢と課題は大きい。

3. 南城の豊かさ 人間関係 自然との関係

3月28日の新聞に、県企画部統計課が公表した2009年度県市町村民所得の概要が掲載された。県民一人当たりでは年20万4千500円で、それを100とすると、那覇は117.6であり、南城は84.5である、などの数字が示されている。

これをどう見るか。世界的には、GNP（国民総生産）という指標がよく使われるが、ブータンがGNH（国民総幸福）を提起していることは、よく話題となる。日本でも、東京の荒川区がそれに似た幸福の指標についての調査研究をすすめているという。そうした発想で、南城を見たらどうなるだろうか。

それにかかわって、私は、生活における金銭依存率ということを繰り返し話題にしてきた。物価の差異はよく話題になるが、生活のなかで、金銭による売買の比率がどうなっているか、を見る必要がある、ということだ。そうすると、食や住などでは、田舎と都市とでは大きく異なる。田舎でも都市的生活を営もうとすると金銭依存率は高いが、田舎的生活を送ると、低くなる。

たとえば、私自身の例をとると、愛知にいて都市的生活を送っていた時と、現在の玉城の自宅での日常生活では、金銭依存率がかなり異なる。2対1に近い感じだ。

だが、私は該当しないが、子どもがいる世帯の教育費などは、田舎と都市との違いがないのが現実だ。

こんな事を考えると、教育費も含めて都市的要素が強い費用を除けば、南城市の84.5という数字は、100をはるかに超える実質をもつと思う。南城には、金銭依存率を低くするパワーが備わっているというべきだろうか。

そのことを考える際に重要なのは、人間関係がもつ豊かさがどうなっているか、である。都市では、田舎的な縛りが少ないとしても、人間関係の薄さが、豊かさを引き下げているのではないか、と問うてみる必要がある。また、自然との関係での豊かさにも注目していただろう。

食を例にとろう。家庭菜園、近隣との物々交換、さらに近くの農家直販所での購入、などは結構なパワーになると思う。あるいは、友人知人隣人などとの交際で、飲食代を必要とする比率は、都市生活者とは大きく異なるはずだ。

こうした人間関係、自然との関係がもたらす豊かさを、南城での豊かさの視野の中に入れる必要があろう。無論、南城の人間関係や自然との関係でも、都市に似た難しい問題が広がっているだろう。でも、都市地区と比べたら、問題の発生量はまだ小さい。

時々、コンビニがない、少ないから南城は不便だと言う人に出会う。だが、私などは、そんな不便を感じたことがない。生活スタイルの問題だろう。コンビニ的生活は金銭依存率を高めるものだと、私は思う。

こんなことを考えながら、南城の豊かさと言うものについて、考えていきたい。

4. 多彩な文化創造と文化協同

南城の強みの一つに、多彩な文化とその担い手の大量存在がある。

多彩というのは、陶芸、木工、染織などの工芸、美術、ダンス・舞踊、伝統芸能、現代演劇、クラシック音楽、ジャズ、古典音楽などといったジャンルの多彩さもあるが、それにとどまらない。

同じジャンルの中でも、プロ、セミプロ、アマなど、多彩な人材がいて、裾野が広い。裾野の広さと言うことは、制作に関わる人口が多い、ということでもあろう。

さらに、ジャンルを越えた協同創造が行われている。シュガーホールの市民ミュージカルが典型的だろう。

また、この多彩さ広がり、創造表現者が同時に鑑賞者になるといった構図をしばしば作りだしている。

陶芸などがそうだが、芸術品として鑑賞するだけでなく、日常生活品として活用するものも多く、いわゆる生活芸術と言ったものが多い。観光客が求める工芸品にもそうしたものが多い。村芝居をはじめとする伝統芸能のように、地域の存続発展と深く結びついたものもある。

こうした制作・発表・鑑賞の場も多様である。南城を代表するシュガーホールは、一級品の施設だが、半島芸術祭のように、制作者の工房自体を発表の場とするなど、市内各地にその場が広がっている。また、ユインチホテルとか、玉泉洞などの観光宿泊施設も、営業を兼ねつつ、そうした場を提供する。市内に多数存在するカフェにもそうした場を提供し、ギャラリー的性格を持つ事も多い。

半島芸術祭のような持ち方は、誇るべきすぐれた形であろう。

脱線気味になるが、丘の上で人家がないグスクロード公園で、「祭り」や「芸能」大会が開かれるのも、ユニークだろう。

そうした空間の活用は、田舎的性格と準都市型性格の混在というか、混用をもたらし、興味深い。南城市は、田舎的風土の中に都市的な文化を多分に含みこむ、と同時に、都市的な文化の中に、田舎的豊かさをもちこむ、といった点でも興味深いのかもしれない。

5. 地域の頭脳

これまで述べてきた南城の多彩さをサポートする一つの要因に、人材の豊かさがある。たとえば半島芸術祭を中心に担うのは、芸術との直接的な関わりが薄いかもしれないが、アイデアと行動力が豊かな熟年パワーである。

豊かな経験・人間関係を蓄積した人々が大量に生活していることが、南城の強みになっている。以前からの居住者だけでなく、近年市内に移住してきた人も多い。私と同業の大学教員も、かなり居住している。若い人たちも多い。沖縄県立芸術大学をはじめとする芸術系学校を経て、多様なジャンルの制作活動を行っている若者の多さも、南城の特質の一つだろう。

そうした人々の力により、各種の文化行事・文化企画が推進されている。また、南城おこしに関わる提言も、そうした豊かな人材によって担われている。こうした人材が、これまで以上に地域の頭脳になって活躍することが期待される。近年、地域計画作成というと、市外県外にあるコンサルタント会社に外注する例が、他市町村では目立つが、南城の場合、市内の人材で賄える比率が高い。

こうしたことを今後さらに発展させていくためには、地域の自律的發展を構想できるリーダー集団・頭脳集団を持続的に育てることが求められる。さらに、そうした人材を育成する場の形成、また、小中高校で、その基礎としての地域づくり教育が求められる。私がいつてきた「沖縄づくりの教育」であり、「南城づくりの教育」といってもよいだろう。その点で、すでに行われている、中学生が南城おこしプランに関わる取り組みなどは、大いに拡大してほしいことである。

また、こうした地域の頭脳の結集点を作っていくことは重要だろう。南城おこしの会議、アイデア大会、南城塾づくり、地域誌、地域紙、地域FMづくりといったことが期待される。南城塾というのは、ここ20年ぐらい「流行している」大人向けの「政治塾」といっていいかもしれないが、それらは選挙に立候補する人材育成だ。ここでは、地域起こし・南城おこしを語り合い、提言を考え、実行しあうために、学び研究しあう「塾」だ。幕末にあった慶応義塾とか緒方塾などもその例だろう。

こうしたことでは、商工会などがそうした活動をすでに担っているが、多種多様な組織による拠点づくりが求められよう。また、市役所には、そうした課題を担当する部局が置かれているが、市民・専門家との一層の協力協同関係を築いていくことが期待されよう。

2. 観光・観光コア施設

2010年代半ばになって、南城市の観光関連の委員にたてつづけに就いた。その一つの「南城市観光コア施設整備基本構想検討委員会」のなかで考えたことを中心に綴った。

南城市観光施設委員会 2017年10月6日

南城市のまた新しい委員会にかかわることになった。名前が長い。南城市観光コア施設整備基本計画専門委員会。おまけに委員長をすることになった。この前段の基本構想委員会で委員長をしたから、その流れで止むを得ないだろう。これで、現在、南城市の3つの会長・委員長をすることになった。これまでも含めると、6～7個になる。なんと、すべてもともとの専門の教育学とは程遠い分野だ。物好きがこうじたという感じだ。

現在建設中の市役所の隣に、市民と観光者とが集って交流できるような施設をつくるという話だ。これまでは原野で、行ったことがある市民がほとんどいないようなところだが、新規道路やバスターミナルなども予定され、南城市の新たな中心と構想されている場所だ。それにしても、どれだけ魅力のあるものができるか、議論はハードはともかくもソフト面をどうするかがカギになる。多様な分野の専門家が集って、検討を進める。市民や職員から、そして観光者からもいろいろな意見が寄せられ始めている。

※ この委員会は、次の記事以降で述べる基本構想委員会での作業をひきついで「基本計画」を考えることが役目だ。これにかかわる記事の掲載は、今後のことになるだろう。

私の「南城市観光コア施設」学習ノート

2016年4月27日～8月19日

1. 南城市観光コア施設整備の基本構想検討

「南城市観光コア施設整備基本構想検討委員」という長い名前の委員を委嘱された。しかも委員長にさせられてしまった。委員は、琉球大学や県立芸術大学所属、あるいは地域在勤在住の観光・地域・デザインなどの専門家の方々である。委員の方々、そして市役所の担当の方々、さらにこの業務を請けた国建、そして何よりも市民の方々のサポートを受けながら、任を全うしていきたいと思う。

南城市民であり、市のいろいろな企画にかかわってきた私には、やや唐突な印象もあるこの任だが、素人といって言い逃れするわけにはいかないの、かなりの学習をしていかななくてはならないと「腹を決めて」、学習を深めはじめた。

ということで、何回かにわたって、私の学習について書き綴っていこう。読まれた方々の「入れ知恵」を

よろしくお願ひしたい。

幸いなことに、基本構想の策定は、この委員会だけでなく、役所内の諸課をまたがったクロスファンクシヨン会議、約 20 名の有識者からのヒアリング、地域円卓会議、市民ワークショップなどを開きつつ進められる。

こうした構想を市民参加で練り上げるのは、今ではごく当たり前のことになっている。完成後の運営も市民参加でする施設も増えている。

その第一回市民ワークショップは、4 月 30 日午後市役所玉城庁舎で開かれる。市民参加での構想作成のうで重要な出発点になるので、多くの市民の参加が期待される。私も、どんな考えがでてくるか注目したので、参加予定だ。

この施設は、知念半島の丘の上、市域の中心点あたりに新築準備中の市役所の隣に作られる予定のものだ。「アリーナ」と呼ばれたりもする。

1980年代から90年代にかけて、各地に多様な施設が建てられたが、なかには稼働率が低いとか、維持管理経費がかかりすぎて悲鳴をあげているとかの話をお聴くことがしばしばだ。また、指定管理者制度が導入されたが、なかなかうまくいかず問題点が多いという例もあるようだ。

私自身のこうした事業への関与経験としては、琉球大学の現在地への移転の際に、教育学部建物構想作成にかかわったことがある。その際、教室設計にかかわっては、大規模教室はマスプロ型授業を促進してしまう問題だけでなく、稼働率が低くなる問題に留意する必要がいわれた。今回の施設も大規模のものが想定されているので、同様の配慮が必要なのだ。大規模人数が集合する場合にはよいが、そうした回数は多くないから、そうでない時にどのような活用をはかるのか、多様な活用を配慮した構想が必要になる。

そんななかであって、同じ南城市内にある、音楽専用ホールをもつシュガーホールは大健闘しており、全国的に知られた施設になっている。稼働率も高く、南城市の知名度の高さに貢献している。それでも、文化施設は、国や自治体の財政支出で成り立つ部分がかかなり高いのが一般的であり、シュガーホールも例外というわけにはいかない。文化で著名なフランスでもそうである。人口密度が高く、入場料1万円でも満席になるような地域では、なんとかなるかもしれないが、文化施設は、そうした「宿命」をもっている。

そのシュガーホールが、類似施設のなかでも健闘しているのは、その個性を強く押し出し、ブランド化とでもいえそうなレベルまで関係者が奮闘し、自治体の強力なバックアップがあり、サポートする市民・鑑賞者が多いからといえそうだ。

脱線したが、新設する「アリーナ」も、こうしたことを視野に入れて考えていく必要があるだろう。また、大型ホールとしてのシュガーホールとの連携と役割分担を視野に入れた構想作成が必要だろう。

2. 「人を呼び込む」魅力

今回の構想は、施設つまりはハコモノをつくるわけだが、それは作って「あとは任せる」というわけにいくものではない。どういう活用を想定するのか、できた施設がどういう活用を生み出していくのか、いいかえると、どんなソフトを想定してハードをつくるのか、という当たり前の事を、しっかり視野に入れていく必要があるのだ。

そのソフトというのは、なんといってもまずは、利用者活ユーザーというヒトの問題だ。

ヒトには、1) 市民と2) 来訪者とがある。2) 来訪者には、2 a) 沖縄県内の他市町村から、2 b) 他府県・

海外からの二つがある。2b)は圧倒的に観光者が多いが、南城市にはリピーターである個人観光者が多いのが特性でもある。南城市で開かれるイベントなどへの参加、体験滞在型観光の方も多い。リピートするなかで、移住にまで至る方も多い。

2a)には、南城市での諸企画に参加する人や、ドライブで遺跡・景観・カフェなどを楽しむ人が多い。そして、この地域を気に入り、市内に移住する人も結構いる。それには、自然環境文化環境だけでなく、生活環境の要因がある。

こうしたことは、「人を呼び込む」魅力といえよう。先日、大型書店で関連書籍を探している時に出会った本の一冊は、井上正良・長瀬光市共著「人を呼び込むまちづくり」（ぎょうせい2013年）だったが、このタイトル通りの視点である。

それは、2)の人々ばかりではない。現に住んでいる1)市民についてもいいうることだ。むしろ中心の対象者といえよう。現市民が、「これからも住み続けたい」という「住みがい」を感じる魅力を作り出すということであろう。

ここ50年ぐらい、学校を卒業した若者のほとんどが、市域外・県外に就職・進学をしていった。しかもその多くは、居住地も市域外に出ることで、人口の社会減をつくりだしてきた。無論、そのなかの一定部分が、Uターンしてきた。これからも、その構図は続く気配だ。無論、若者が外に出ることで大きなプラス面を得るであろう。と同時に、Uターンする、あるいは学校卒業後も市域内にとどまって、進学就職するという構図をより増加させることも期待されてよい。

そのためには、自然環境文化環境と同時に、生活環境の充実が中軸的課題になる。衣食住を中心として生活を豊かで充実したものにしていかなくてはならない。それは、「ゆりかごから墓場」までの、多様な世代に対応する必要がある。とくに若い世代にとっては、出産・子育て・教育にかかわること、また医療介護問題も含んでの高齢者の生きがいと生活に対応した課題をも視野に入れる必要がある。そして、文化や娯楽といったことも重要な問題であろう。さらに仕事といったことも欠かせない問題だ。

こうした産業・文化・教育・福祉など、全般にわたる地域の魅力を増大させていく必要がある。それと、2)の人々への対応としての観光は、南城の中心的課題となる。これらの諸領域は、個々バラバラに存在するのではない。たとえば、観光は雇用につながるし、生活の利便性あるいは文化的豊かさと連動する。また、福祉は雇用とつながる産業問題でもある。

こうしたことを促進するものとして「コア施設」の基本構想が策定される必要がある。だから、ただ単に観光だけの問題ではない。あるいは、1)の市民の大規模集合場所というだけの問題ではない。このように多様な分野にまたがる機能を掘り起こし拡大していく「複合的」なものにならなくてはならない。いいかえると、たんなるハコモノではなく、市域の多様な分野での事業展開のきっかけを大量に作り出す機能が求められよう。

3. 福祉・人生創造の視点も含んで、観光で、市民と来訪者とのつながりを促進する

前回、産業・文化・教育・福祉などの諸分野を視野に入れて考える必要について書いた。そのなかの福祉についていうと、実のところ、先日の委員会でデザイン専門の方から、新施設を福祉に焦点化して考える発言をいただいて、改めて考え始めたことである。

私にとって、これまでかかわってきているようで、意外に弱いのは、福祉にかかわることだ。福祉に近い分野の教育にかかわってきたし、その教育と地域おこしにかかわっては、長い間考えてきて、「沖縄おこし・人生おこしの教育」(アクアコーラル企画 2011年) という著書まで出した。

だが、福祉は対照的に「お寒い」状況だった。子どもにかかわる福祉(児童福祉)は、教育と結びつきやすいから考えてはきたが、高齢者福祉、医療福祉、生活福祉、障がい者福祉、精神福祉、司法福祉などの分野、あるいは広げて地域福祉などについて、多少は付き合ってきたが、それほど深めていないし、それら全体をつないでみていく視点も弱かった。ひるがえって、子どもにかかわる福祉にしても、保育・学童保育・養護といった分野は、要請や必要があった際に考える程度で済ましてきた。

また、私は、生き方・人生、そして人生創造・人生おこしについて論じてきたが、それが福祉の問題と深く結びついていることにまで、思いをいたすことは少なかった。福祉の言葉は、最近では欧米語でいうと、ウェルビーイングといわれるから、まさに生き方・人生にからむ問題なのだ。

そして、私の場合、人生・生き方を個人の問題、個人が判断創造する問題としてのアプローチが強かったように思う。集団として、あるいは社会・地域としての人生・生き方をとらえる視点を深める必要があろう。たとえば近年、格差や弱者の問題がクローズアップされているが、それも当事者個人の問題という捉え方では打開できないことがはっきりしている。

こうして、ある委員の発言をきっかけに、福祉・人生創造の視点から、新施設を考え始めることとなった。

さて、産業・文化・教育・福祉に加えて、今回強調されている観光と関わらせて考えることが南城市に特徴的なことだ。

といっても、観光は 90 年代までのマストツーリズムの時代とは大きく変化している。その変化を先取りして南城市の観光があるという見方もできよう。それは、リピーターが、あるいはクチコミで誘われて、個人旅行として来訪することにあらわれている。オープン・ガーデン、半島芸術祭 in 南城、尚巴志マラソン、シュガーホールのニューイヤークンサート・ミュージカル・オペラなどの諸イベントが、それを強く促進している。

それは前回述べた 2 a) でも 2 b) においても言える事である。大型観光バスでの来訪者よりも、マイカー・レンタカーでの来訪者の比率が圧倒的に高いことがそれを示していると言えよう。

それはまた、斉場御嶽や久高島などで「癒し」を求める事に象徴されるように、ウェルビーイング、生き方にかかわるものを求めての来訪者が多いことにも表れている。替医療やハーブに関わる企画なども、健康・医療福祉・生き方にかかわることだ。すでに移住している人にも、そうした魅力に引き寄せられた人が多い。

それは、自然と文化との交流であるし、いずれ 2) 来訪者と 1) の市民との交流ということにも拡大してこよう。

だから、観光といっても、2) の人々だけを対象にして考えるのではなく、1) の市民との交流をも視野に入れる必要がある。と同時に、「観光地のことは、在住者よりも来訪者の方が詳しく、来訪者にいわれて在住者が改めて、その価値を再発見する」とよく言われるように、在住者自身が、2) との交流協働を通して、地域の優れた自然・文化を再発見するというをも視野に入れる必要があろう。

写真は、予定敷地の道路を隔てた真向いにあるユインチホテル・猿人の湯



4. 他府県における複合施設の事例検討1

3月の第一回委員会で紹介された9つの「複合施設の事例一覧」のなかから、参考になりそうな点を記しコメントしよう。

いずれも、南城市と置かれた条件が違い過ぎて、モデルとして参照できるものとはいいにくい。といっても、それらがもつ特性などが、参照アイデアとなる可能性があるという意味で注目できよう。だから、それらを参照しつつも、南城らしいものを創造するということになるろう。

というものの、あえて南城市に近いものを無理に選ぶとすれば、「きらめき広場・哲西」（岡山県新見市哲西町）と「市民交流センター「えんぱーく」（長野県塩尻市）である。

1) 「きらめき広場・哲西」

人口規模3万余の山村に、2001年に建設された施設。延床面積約5800㎡

市役所支所・図書館・文化ホール（300席）・生涯学習センターに加えて、診療所（内科・歯科・薬局）・保健福祉センター、道の駅（買い物機能）を付設している点が注目される。また、公共交通機関の集中点にしており、そこにいけば、何でもそろっているというワンストップサービスを備えている。

図書館は年中無休で、幼児一時預かりサービスもある。

図書館は、指定管理者のNPO法人が運営している。診療所は貸出。その他は市の直営。

2) 「市民交流センター「えんぱーく」

人口6万余の歴史のある町に、2010年に建てられた市直営施設。延床面積約12000㎡

図書館、子育て支援センター、市民交流センターとフリー交流スペース、青少年・シニア活動支援、ビジネス活動支援という五つの機能をもつ。商工会議所やハローワークや民間オフィスまで含んでいる。

ホールは、155席、52席と広くはないが、多様な会議室が11室ある。市の観光商工課や交流支援課も入っている。ICTルーム、音楽練習室、食育室まで用意されている。フリー交流スペースもあり、建物のなかで、ちょっとした町の広場という感じを受ける。

多世代の市民むけの多機能施設として注目される。

いずれも、市民が集い、語り合い、学び合い、いたわり合い、活動を広げていく機能を中心に置いている点で注目される。前回書いた福祉機能も多分に含んでいる。また、双方とも、図書館機能が重要な位置にある

点も注目される。当たり前のことだが、要するに、人に焦点をあてた施設であることがよくわかる。



写真は、予定敷地から数百メートル離れた民政府跡を示す記念碑。このあたりは、戦後の米軍による沖縄統治の中心機能を担った施設が並び立っていたところだ。

5. 他府県における複合施設の事例検討2

事情はかなり異なるとはいえ、アイデアをいただきたいと思う施設を並べよう。

3) 「ホルトホール大分」(大分市 人口50万近く) 2004年建設 延床面積約37000㎡

1200席の市民ホールに、120席の小ホール、17室の会議室

加えて、障がい者福祉センター、健康プラザ、子育て交流センター、図書館、サテライトキャンパス、産業活性化プラザ、まちづくり情報プラザがあり、多機能の大きな施設である。

4) 「オガールプラザ」(岩手県紫波町)

飲食・物販・医療・教育系の10の民間テナントと町運営の情報交流館(図書館・地域交流センター)とで構成される官民複合施設

最近、バレーボールに特化した体育館(民設民営)を併設

5) 「道の駅 富士川楽座」(富士市)

物販だけでなく、アミューズメント施設などを併設

6) 「シティホールプラザ「アオーレ長岡」」(長岡市)

計画・資金調達、運営段階において市民と連携 官民協働運営

7) 「横浜市スポーツ医科学センター」(横浜市)

スポーツに特化し、医科学施設を加えて施設。市民の健康づくりのサポートも

前回は含めた以上は、担当コンサルタントの国建が提供した県外事例から抜き出したものだ。今回の新施設は、以上の施設がもつ諸機能に加えて観光機能に強くかわるものだ。

その点では、県内にもいくつかの事例がありそうだ。私がこの1月に訪問した竹富島に環境庁が設置運営しているゆがふ館もその一例となろう。また、国頭の道の駅ゆいゆいもそうだろう。考えようによっては、県立美術館博物館もそうだろう。

写真は、敷地近くの高齢者向け施設「しのめ」一帯



6. 「文化的景観」

モノつまり新施設と、3までに述べてきたヒトとのつながりの中で考えることに加えて、南城市全体の生活環境、文化環境、自然環境などのかかわりをも、視野に入れる必要があるだろう。

ところで、最近、この連載の2で紹介した本に加えて、琉球大学国際沖縄研究所「新しい島嶼学の創造」プロジェクト編「島嶼型ランドスケープ・デザイン 島の風景を考える」沖縄タイムス社2016年、を読んだ。

今、ランドスケープ（景観）ということが、町づくり・地域づくりのうえで、大きな話題になっているようだ。その際、景観は、私のような素人が思い浮かべがちだった「見た目」といったことにとどまらず、その中にこめられた自然・歴史・文化・生産・生活などの総合として捉えられるものようだ。そんな文脈のなかで、「文化景観」という言葉が関係者のなかで強い関心をひいているようだ。同書から紹介しよう。

「『文化的景観』（Cultural LandScapes）とは、ユネスコの世界遺産委員会により、『自然と人間との共同作品』であり、人間社会又は人間の居住地が、自然環境による物理的な可能性と制約のなかで、社会的・経済的・文化的な内外の力に継続的に影響されながら、どのような進化をたどってきたのかを例証するもの」 [UNESCO World Heritage Center 2012] と定義される概念である。」飯田晶子「パラオの文化的景観にみる自然共生」 p 1 1

「1992年にユネスコの世界文化遺産に「cultural landscape」が導入され、日本では2005年に文化財保護法が改正された際に「文化的景観」が盛り込まれた。文化的景観とは、人々の日常的営みや社会的諸活動が地域の自然や文化の中で積み重ねられ具体的に形成され、また人々によって知覚されるものである [本中2009: p 9]。換言すれば、文化、社会、経済、政治、信仰など非視覚的な要素に影響を受けつつ具現化されると同時にそれらの要素を通して認識されたものを文化的景観という。そのため、社会状況の変動様態次第で、当該の文化的景観は緩やかに変わっていくこともあれば、急激に変ずる場合もある。すなわち、文化的景観は、変化（change）の緩徐性と変容（transformation）の急進性を内在的にあわせもつ存在である。」波多野想「台湾・金門島にみる文化的景観のダイナミズム」 p 2 9



これらを参照していうなら、すでに南城市域に存在している自然・歴史・文化・生産・生活の多様で豊かなものを基盤にして、南城市域にふさわしいさらに新たな文化的景観（「形」と「中身」）を作るということになる。

だから、新施設が南城市域にポツンとできるというものではない。これまで存在してきたものを踏まえて、新たなものをどのように加えるのかという課題なのである。



来訪者に即して言うとは、来ることだけが目的になるのではなく、来訪したことがきっかけになって、渦が広がるように、市域全体への訪問へと広がるような波及効果を持つものにしていく必要がある。さらに、それらがリピートや体験滞在型の比重を高めるものへと継続していくことが期待される。なかには、移住に至る人もありそうだ。

だから、新施設は、単なるハコモノではなくて、新たな文化・歴史・生活・生産を生み出すものとして、「文化的景観」を生み出すものにしていく必要がある。

写真の大城按司の墓は文化財であり、文化的景観の一つだろう。敷地予定地から徒歩で10分余りの距離だ。敷地からのトレイルの候補になるだろう。このあたりには、こうしたものが多い。琉球政府の名前が入った石柱じたいも文化財の仲間入りをする時代も遠くないだろう。



7. 敷地周辺の自然的条件・地理的条件

新施設が予定されている場所を単なる敷地平面と見るのではなく、南城の自然・文化・歴史・生活・生産とどうかかわっているのかを踏まえる必要がある。それについて見ていくことにしよう。

まず、南城市全体をあえて一言でいうなら、「沖縄の偉大な田舎」といえるかもしれない。それは、「田舎」



の良さ
と同時
に、生
産と生
活、精
神世界
にかか
わる歴
史と文
化、自



然を豊かに持っているからだ。

中左右写真は、グスクロード

下写真は、新敷地の現況

ではまず、自然的条件、地理的条件について見よう。



・亜熱帯の動植物（熱帯と温帯の双方を含みつつ、沖縄の固有種を多数もつ）

山原の森が注目されるが、それと同じような森が中南部にもあり、その代表的なものとして南城市域があり、新敷地周辺にもある。例 受水・走水の裏手の遊歩道、斉場御嶽周辺 屋比久のスクナムイへの傾斜地、グスクロード公園近くのやんばるやま、新敷地の喜良原、稲福、大城方向あたり

南部は戦争によって自然が大きくこわされたが、7

0年たって回復も進行している。山原とは地形・地質も異なる森があることに注目したい。なお、新敷地周辺は、戦後の米軍管理下にあったところも多い。そのこともあってか、ギンネムに覆われたところもある。そうしたところで、「南部の森」の復活を意図的に追求することがあってもよいだろう。

・石灰岩台地の上に位置する。

このあたりにトレイル（自然遊歩道）を設置することがあってもよい。体験農園のアイデアも聞かれる。現在の自転車道を充実させることも重要。

・台風の暴風に対して遮るものが少ない。濃霧の発生が多く、湿度が高い。それらをマイナスととらえるよりも、プラスととらえることが考えられてもよいだろう。

・親慶原にある土地改良区にある川は、途中で地下水になって、ゴルフ場下を通り、志喜屋に抜ける。琉球石灰岩台地の特質で、豊富な水源地ともなってきた。

・新里ビラの急坂は多くの物語を生んできた。がけ崩れで消滅した桃原集落跡も遠くない。

・掘れば温泉が出る。すぐ隣のユインチホテル「猿人の湯」がそうだ。

・見晴らしの良さも注目できる。敷地から少し歩けば、中城湾（時には山原の山々）を取り巻く絶景が見られる。勝連半島、沖縄市・うるま市あたり、中城城、琉球大学、首里、太平洋、津堅など。南方向のグスクロードあたりに行けば、太平洋・久高も見られる。

絶景は、夜になれば、見事な夜景になるし、星空観察もできるところだ。

8. 交通 敷地周辺の集落

前回から続いて、敷地周辺の話だ。

まず交通問題。南城市域の中心に立地し、建築中の新インターに隣接し、空港をはじめとする沖縄本島各地へのアクセスがよい。

自動車を持つ人には絶好の地点となろう。だが、高齢化社会を迎え、自動車が運転できない高齢者の増加、そして子どものための公共交通網の整備が課題となつてこよう。なんじいバスなどの一層の充実が期待される。

レンタカー普及が、このあたりの観光事情を激変させたが、レンタカーに過剰依存しない観光も追求したい。その点では、全国各地の観光地にあるような、市内各地の観光スポットをつなぐ公営交通機関の整備も検討しなくてはならないだろう。

次は、周辺集落

敷地の地番は新里だが、旧4町村の交点に位置する。現況では、宅地は多くなく原野が多く見えるが、いくつかの個性的で多様な集落が近くにある。

集落のいくつかを見てみよう。

隣接する喜良原・親慶原は、旧玉城村にあり、近世末期から明治期にかけて、首里をはじめとする各地からの移住者たちが開いた集落だ。当初は農業中心であったが、戦後、基地が作られて、集落移動もあり、基地従業員に就く人も多かった。基地がゴルフコースに変わる中で、多様な職種に従事する人が出てくる。コンビニや飲食店なども多く、バス路線や営業所もあって、交通の要所となっている。

垣花・仲村渠・百名は、旧玉城村にあり、グスク時代、さらにそれ以前からの歴史が語られる集落だ。戦後、基地・ゴルフコースができて、様子が変わったが、それでも歴史性を強く感じさせる集落だ。

稲福（上稲福）・大城は、旧大里村にあり、考古学研究所の発掘も行われるなど、グスク時代からの長い歴史をもつ集落だ。

新里・小谷は、旧佐敷町にあり、中城湾を囲む位置で、新敷地に上ってくる場所にあり、新里ビラは名の知られた急坂だ。

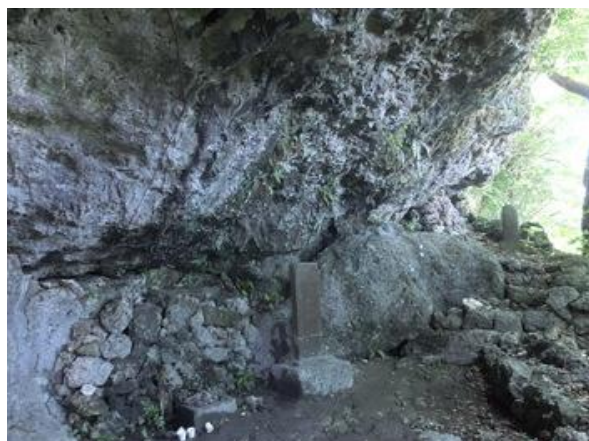
つきしろは、旧玉城・知念・佐敷にまたがっているが、40年ほど前に開発されはじめた新しい街だ。沖縄各地から移住してきた人々が、新たな街づくりに取り組む集落だ。

志喜屋・山里・具志堅など、旧知念村の集落の畑地は、つきしろに隣接し、絶景のニライカナイ橋へ通じる道路がある集落だ。また、自衛隊基地があるし、沖縄刑務所があることも忘れてはならないだろう。

このあたりのどの集落にも共通することだが、知念半島全体の水源地の役割を果たしている。しばらく前まで、この水で、各集落は簡易水道を使っていた。また垣花樋川をはじめとして有名な名水が多い。その水を使って、クレソンなどの栽培も行われている。



右写真は、敷地隣のユインチホテルのスポーツ施設あたりからの佐敷・知念方向の景観（スクナムイなど）
左写真は、敷地東側にできた道路 この隣に新インターができそうだ。



9. 敷地周辺の史跡 遊歩道候補

こんな地域だから、歴史的に名高い箇所があちこちに点在する。まず、新敷地の至近距離にあるアマチジョウガマは、第一尚氏ゆかりのところだ。グスク関連史跡としては、上稲福遺跡・タマグスク・垣花グスク・ミントングスク・糸数グスク・大里グスク・大城グスク・佐敷上グスクなどと限りないほどだ。

ほかにも、遺跡は多い。大城按司の墓、アジの墓（左写真）、ウナザラの墓……

右写真は、大城按司墓近くから見る大城ダムや糸数周辺

中左写真は、自転車道から見る 左がユインチホテル 右が新敷地

近現代の史跡としては、戦後の米軍統治の中心地であったのが、まさにこの地だった。琉球民政府があったのは、敷地から徒歩10分ぐらいだ。敷地周辺には、関連施設が並んでいたようだ。知念高校の旧敷地も近くにある。

そしてCSG(現琉球ゴルフ場)。これについては、意外に知られていないので、南城市史編集委員会「南城市史 総合版(通史)」2010年南城市教育委員会刊の記述を紹介しておこう。

「秘密基地(CSG)知念キャンプの設置(中略)



朝鮮戦争の最中にCSG(混成サービス・グループ)＝知念キャンプとよばれる部隊が設置された。当初から秘密部隊といわれ、基地の機能やその目的は全く不明で、従業員の採用も厳重な思想調査のうえ行っていたといわれている。CSGは知念半島最大の職場となり、地域経済を潤すドル箱でもあった。

基地内の奥に隔離されたエリアがあり、そこでスパイ訓練や捕虜の尋問などが行われていたと噂されていた。朝鮮戦争やベトナム戦争では、秘密工作員らが使用する特殊用具が梱包されていたといわれている。復帰直前に米国のマスコミによってその実態が暴言され、CIA(米国中央情報局)の基地であることが明らかとなった。

ることが明らかとなった。

一九七二(昭和四七)年五月一四日、知念キャンプは閉鎖され、従業員六〇〇人も全員解雇された。その後、跡地には現在、琉球ゴルフ場が建設され、基地経済からの脱却がはかられている。」P282

この琉球ゴルフ場は、著名なゴルフ場であり、毎年3月には、女子プロ開幕戦が行われている。なお、この敷地は周辺集落の人々の所有となっている。その敷地内にも、遺跡や拝所がある。

予定敷地の道路を隔てた場所にあるのが、旧沖縄厚生年金休暇センター(ウエルサンピア沖縄)、現ウエルネスリゾート沖縄休暇センター(ユインチホテル)であり、猿人の湯「さしきの」もある。琉球民政府跡の記念碑も、この敷地内にある。

自然・歴史・文化を味わうには絶好の条件に立地しているので、敷地を起点にした「自然・文化・歴史の道」といったトレイル(遊歩道)を設定するのも考えられるだろう。すでに敷地に隣接して東西に走る自転車道が存在している。それを活用して発展させるのもありうるだろう。すでに尚巴志マラソンなどで活用さ

れているが、森の中を歩くなど、より自然に接する形でつくりあげると、人気をよびそうだ。

もしコース設定するとしたら、次のようなものがあるだろう。

東へ 自転車道、つきしろを経てニライカナイ橋方向

西へ 高齢者施設・上稲福遺跡を経て、大里グスク方向

南へ グスクロード周辺へ 直接喜良原集落を通るか親慶原三叉路を経て、島尻消防あたりに向かう道と、親慶原三叉路から垣花を経ていく道とがある。

北へ 新里ビラから中城湾周辺へ 小谷の山道を経由することもできるかもしれない。

10. 南城での文化にかかわる諸取り組み 「手作り南城」

私は、南城市発足間もないころの「町づくりシンポジウム」で、「手作り南城」という提案を行った。南城におけるこの10年余りの文化にかかわる取り組みは、まさに「手作り」型だったように思う。それらは、南城市発足以前の旧4町村時代からのもの、さらには戦前からの長い歴史的蓄積を持つものも多い。それらを並べてみよう。

尚巴志マスタープランにもとづく取り組み 読み聞かせ・語り部 グスクコンサートなど

オープン・ガーデン

半島芸術祭・クラフトフェア

尚巴志マラソン ウォーク・アンド・ライド

シュガーホール・ニューイヤーコンサート、ミュージカル、オペラ

青年芸能祭、シマごとの諸行事 ハーリー

健康関連行事 ハーブ・フェスティバル

海洋レジャー 諸企画、ダンスフェスティバル

福祉にかかわる諸行事、子ども祭り 学童・保育園の諸行事 例 小羊保育園と字喜良原との合同夏祭り

学校行事 運動会、市内学校の合同企画

南城祭 南城文化祭

成人式・敬老会・フリーマーケットなども加えてもよいだろう。

他にもたくさんある。これらのほとんどに、私は参加して楽しんだ。

では、これらに共通する特徴をみていこう。

一つ目に、これらが、大量生産大量消費方式ではなく、取り組み特性・参加者特性に合わせて、一つずつ作るまさに「手作り」であることである。世界的流れとして、大量生産大量消費方式は、1950年代から1980年代まで、経済の世界を凌駕してきたが、それが徐々に多品種少量生産へと移っていく。幸か不幸か、沖縄では大量生産方式は弱いものであったが、大量消費の世界では県外での大量生産のあおりを受けた。観光でも、1970年代以降、大規模ホテル大規模航空機が高いシェアをもったが、これまた幸か不幸か南城市への影響は薄いものだった。

だが、今や「手作り」的なものが貴重で価値あるものとして尊重される時代になりつつある。

生活や観光において、その「手作り」の軸に座るのは、自然とじかにつながり、人々とじかにつながると

ということだ。たとえば、オープン・ガーデンでは、自然をもとに持ち主が「手作り」で作った庭を、訪問者がじかに味わい、造り主と語り合う。工芸品も、半島芸術祭なら工房で、クラフトフェアなら展示場で、作り手と語り合いながら、作品を味わい購入する。

1.1. (続) 南城での文化にかかわる諸取り組み 「手作り南城」

二つ目の特徴は、これらの取り組みの基本は、大規模ショーというよりも、作り手が自ら企画運営するものがほとんどであることにある。訪問者・参加者も、それを体験型参加型で楽しむという点にある。どこかのスポンサーが大金を出して企画運営するのではなく、多様な作り手・参加者が寄り集まって協同することで、大きな豊かさを作りだすものになっている。

そして、それらの多くが、長い年月をかけた作り手や参加者の生活と文化の蓄積として生まれている。そして、これらは市民自身のために、そしてそれにとどまらず、県内外からの来訪者との出会い・協同のなかで作り出されていくものである。それが結果として観光になる。それは「手作り」感あふれるぜいたくで一つ一つ個性のあるもので、同一物の大量生産による安っぽいものとは異なる。

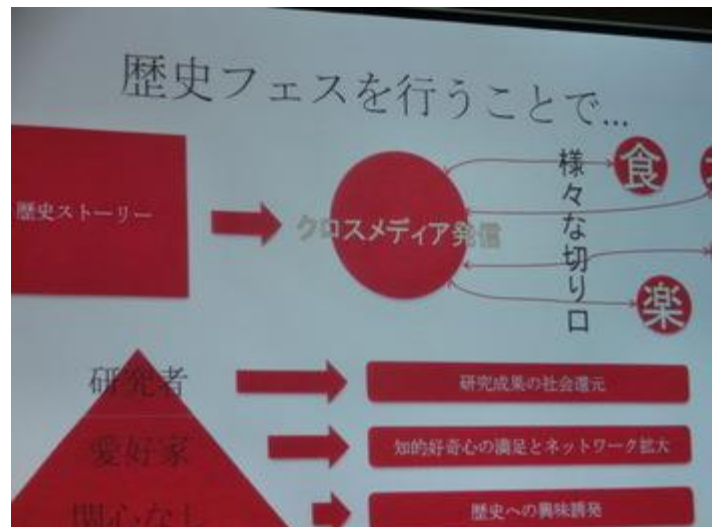
三つ目の特徴は、日常の取り組みと、それをベースにしたイベントとしての取り組みとの双方のからみで実現していることにある。民俗学用語を使えば、ハレとケとのからみで展開しているということである。イベントで芽生えたきっかけをもとに、それを日常に生かしていくということでもある。逆に、日常の積み重ねをイベントに結実させるということでもある。

訪問者・観光客は、イベントを目当てにくることも多いが、訪問したら、イベントにたまたま出会ったという例もある。それにしても、イベントがない時に訪問した人でも、その「さわり」を楽しめるような日常的な企画を用意しておけば、楽しむことができよう。

その意味では、イベントへの過剰依存を卒業しなくてはならない。だから、非日常的企画（イベント）と日常的企画とを並置して、両者をつなげていくことが必要だろう。

こうしたありようは、「南城型」観光を作り出しつつあるとってよいかもかもしれない。それは、観光のありようの近年の大きな変化と響きあうだろう。それについては次回述べてよう。

右写真は、市民ワークショップ風景



1.2. 観光の変容と南城型観光の追求へ

観光が大きく変わりつつある。たとえば、大型バスを連ねての団体パックツアーは激減している。レンタカーを使つての個人旅行が圧倒している。決められたコースではなく、自分なりの判断で各地を巡ったり、

体験滞在型で旅をエンjoyしたりしている。

実態が大きく変化しているのだ。それを、先に紹介した書籍では次のように述べている。

「これまでの時代は「量を増やす」こと、「More is better」が世の中の主要な行動規範であった。しかしこれからの時代は、「量」より「質」、「壊す」より「使い続ける」、「大量消費」より「個性化・本物志向」を重視しなければならない。(中略)

このような状況を認識し、経済効率一辺倒の尺度ではなく、地域環境や景観保全・形成を「住民資産」と位置づけ、多様な主体との協働による新しい公共の構築や地域資源に着目した、景観まちづくりの在り方を解き明かすことが重要となる。

本書のテーマは、地域構造・地域資源・地域ブランドを再検証し、地域資源に磨きをかけ、「まちのかたち」を創出し、継承・発展させて見える化を図り、「人を呼び込むまちづくり」の技法を導くことである。地域には、活用されていない資源が多く眠っている。それを見出し、磨き上げ、地域の内外に発信することにより、地域住民の誇りと愛着心が醸成され、住み続けたいと思う郷土愛が育つ。住み続けたい人々が様々な活動を展開し、地域を魅力的にしていくことが、地域の優位性・固有性を輝かせ、地域価値を高める。その活動加入を引き付け、新住民や企業、来街者を呼び込む誘発力となる。」井上正良・長瀬光市共著「人を呼び込むまちづくり」(ぎょうせい2013年) p 98

「バブル期に観光地で共通していたのは、マスツーリズムを主体に大量消費を前提とした、大型集客施設、秘宝館や地域性に縁の薄い博物館・美術館、目玉の観光資源以外は殺風景でも観光客が動員される街並みであった。

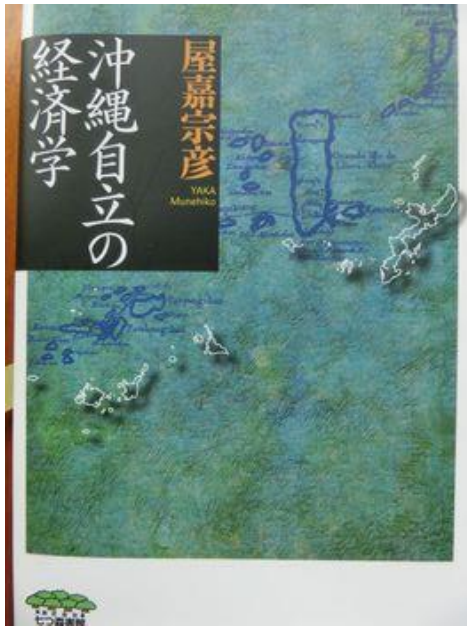
しかし近年、消費者嗜好の多様性・個別化、集団から個人・グループへの旅行形態の変化、何度も訪れて地域の魅力を再発見できる持続可能性が求められるようになってきた。」同前 p 124

また、同書には、尚巴志マスタープランで提起され、現在検討中のコア施設でも焦点となっているエコミュージアムについて、参考になる次のような記述もある。

「島再生の旗印を「島ぐるみ博物館」と掲げ、島民全体集会で「江の島まちづくり憲章」(1988年4月制定)を決議した。10余年の歳月をかけて地域資源を発掘・検証した。

地域価値を高め、緑の江の島を保全するための土地利用規制・高さ規制・斜面緑地保全等をルール化した。安心して暮らし、また来街者が心地よい空間に触れるため、表参道整備・簡易ガス事業・消防送水管等を整備した。歴史文化的遺産の利活用を図るため、島ぐるみ野外博物館の中核施設を整備した。島民が所有する歴史文化的遺産を活用した、ミニ博物館のネットワークをつくった。江島神社の門前町にふさわしい街並み修景整備と、街並み景観形成をルール化した。地産地酒の商品開発で本格志向のおもてなしを始めた。」同前 p 102

こうした観光変容に響きあって、南城の観光も進展してきている。そして、その変容はさらに進展していくだろうから、さらに響きあいつつ、というか、それを先導しうるような南城型観光を追求していかななくてはならないだろう。



13. (続) 観光の変容と南城型観光の追求へ

最新刊の屋嘉宗彦「沖縄自立の経済学」(七つ森書房 2016年)は、観光にも焦点をあてているが、以下のよう
に示唆的な記述がある。

「経済自立化という目標から見ると、考慮されなければならないのは、地元・沖縄住民がどのようなかたちでこの観光・リゾートの運営に関わることができるかということである。住民が単に雇用労働力の提供者、物産の供給者にとどまることなく、観光・リゾート業の主体となり、外来の客との交流の主導者となりホスト役となるには、住民が主導し経営するリゾート施設の整備が必要だと考えられる」 p100

「沖縄が観光・リゾート産業を地域活性化ひいては自立化と結びつけて振興しようとするのであれば、住民・自治体をあげて取り組むべきは、入域観光客の量的拡大もさることながら、その受け皿となる諸施設のうち特に重要な、低廉かつ快適な宿泊施設の整備を展開し、そのサービス、アメニティの水準を高度化させることでなければならない。そのうえでこれらの施設をネットワーク化し、観光客をそこに誘導する機構を作り上げる必要がある。こうした受け皿の整備なしでの量的拡大は、住民のための地域活性化にはつながりにくい。経営主体となる人材の育成や経営ノウハウについて、観光産業は他産業より蓄積があり、これを活用することができるであろう。」 p146

そして、「アジア諸国の海外旅行客を取り込もうというとき」、「安い宿泊施設という選択肢を準備しておくことが大切である。」指摘し、「国際的水準」の名に恥じない一定水準のアメニティをもっと宿泊施設整備」を強調する。その例として、「イギリスのB&Bに見られるような一定の規格が必要であろう。」と述べ、「沖縄では、地元小規模資本による開発という手法と国際的観光・リゾート地形成という2つの要請を結合した観光の基盤づくりのために、既存の民宿、ゲストハウス、ドミトリー等について自治体独自の条例と援助・指導・組織化の体制が必要である。」 p134-5と書く。

以上の提起は重要なポイントをついていると思う。私自身、35年前に「イギリスのB&B」をはしごする2週間ほどの旅をしたことがあるが、通常のリゾートホテルをはるかに超えたアメニティに驚きつつ、おおいに楽しんだ記憶がある。南城市には、その水準のペンション・民宿がすでにいくつかあるが、もっと増えることを望みたい。だが、それをオーナーたちの努力だけに頼るのではなく、多様なバックアップが必要だろう。

また、自治体の工夫例として、恩納村の例を紹介している。

「恩納村役場」は、「村民参加型リゾート」を企画した。それは、「村の物産をホテルで販売するという事業」と「宿泊客をホテルから村内に誘導する事業」だ。 p144-145

こうしたものに刺激を受けつつ、すでにでき始めている「南城型」のありようを、さらに深めていくことが望まれる。

次回から、これまでの1～13を踏まえて、私なりのまとめの提案へ移っていこう。

14. 市民の交流・たまり場に来訪者（観光客）も参加する ユンタク場・市民カフェ

以上の学習ノートを踏まえて、まとめに入っていこう。すでに開かれた、「南城市観光コア施設」に向けての市民ワークショップで出たアイデアなども参照しよう。このワークショップには、私自身も参加したが、大変充実して楽しいものであった。

まず、視野に入りたい新施設の機能をいくつかに分けて、その機能を具体化するためのアイデア例を含めて書いていこう。

まず、

◎ **生活感溢れる、人々の交流の場（たまり場）。それを参観しつつ参加していく来訪者・観光客**ということだ。

市役所に隣接するから、まずもって市民がたくさん出入りするところになるだろう。市外からくる来訪者・観光客は、「特別なこと」がない限り来ようとするところにはならない場所である。

その「特別なこと」を、いかに作り出すかが焦点のひとつになろう。その一つは、市民が交流したまる場に、来訪者・観光客も参観参加することに興味を見いだせることだ。南城市民の出会い・交流に関わることが面白いと思われるような出会い・交流の場をつくることだ。

それは、南城の文化・生活・人々の豊かさを感じとれるものにするということでもある。

市民のたまり場には、成人・子ども・青年・高齢者といった多様な世代が男女ともに混じり合う場であることと、世代ごとに、あるいは男女ごとに、あるいは目的ごとに似通った人々が集う場という双方を想定する必要がある。

それは、「よそいき」の場ということではなく気楽なもので、「市役所に来たついでに立ち寄った」ということでもよいだろう。

こうしたたまり場的なものを促進する施設として考えられるアイデアを並べていこう。それらには、№4、№5で書いたように、他地域における複合施設の例が参考にもなろう。

まず屋内施設について。

1) ユンタク場・市民カフェ 「お茶」してもいいし、しなくてもよい。要するにユンタク場になればよい。それには、高齢者向け、成人向け、若者・子ども向けというように、多様な世代が好むものに対応したいろいろな雰囲気をもつものにしたい。

「お茶」などの無料サービスコーナー、有料ドリンクを注文できるコーナーを一角に設置したい。無論、ドリンクを注文しないで持ち込みもOKだろう。

レストラン・コーナーをつくってもよいし、つくらなくてもよい。少なくとも、持ち込みの弁当・おにぎりやパン・クッキーを食べられるようにする必要があるだろう。

都市の街角や大型スーパーにある、フードコーナーよりもゆったりと落ち着いたところにしたい。騒音がこもらない開放的な落ち着いた場にしたい。高級カフェにまでする必要はないが、そうした嗜好を持つ人の希望も満たせるものにできれば、なお良いだろう。

15. 「道の駅」 医療 子ども空間 ギャラリー

2) 「道の駅」のようなイメージの販売所。

コンビニやミニスーパーのような日用品も販売するが、その小規模のものをイメージしたい。加えて、南城にかかわるお土産品・日用品・記念品を、観光客だけでなく市民も購入するようなものにしたい。地産地消で、農家の直販、つまりファーマーズ・マーケットがあってもよい。水産物にも当然対応したい。

第六次産業的な地域循環をつくりだす産品を重視したい。

既設の物産館やいまいゆ市場（奥武島）などとの関係も考慮する。

3) 医療（検診なども含め） №4で紹介した哲西の事例参照

健康相談コーナー（保健師やメディカル・ソーシャル・ワーカーが常駐する。常駐が難しければ定期的な相談日を設ける）

健診会場にすることも考えられる。

市役所へも含めて、高齢者・子ども・観光客などの訪問者が多く、緊急対応が求められることが多いことを勘案して、学校の保健室のようなイメージで、看護師・保健師が常駐する形も考えられる。

4) 子どもの空間

- ・市民・来訪者が預けられる一時学童保育・保育園を置く（時間単位の低額で預かる）。
- ・子どもの遊び場（グスクロード公園との関連も視野に入れる） 屋外施設との関連も視野に入れる。
- ・親の子育て交流コーナー、子育て相談コーナーを設置する。ファミリー・サポート・センター機能も併設する。

5) 南城ギャラリー（常設展と企画展）

南城全域に広がるエコミュージアムの「コア施設」のイメージ ミニサイズのミュージアム
観光客などの訪問者だけでなく、園児児童生徒の社会見学や、子どもの自由研究に役立つようにする

参考 竹富島のゆがふ館

- ・大型案内図 南城ガイド・南城ウォークのスタート説明になるように
- ・常設展示（南城入門になるような）と企画展示の双方を併設する。
- ・企画展示

約一か月単位で模様替えをして、常時、なにかの企画展示があるようにする。

例 南城のグスク 南城の拝所 絶景 暮らし・衣食住 農業 モノづくり

芸能 文化協会の部門ごとの展示（絵画・写真・盆栽など） 工芸 人々（高齢者 子ども）

南城と世界 地質・気候 植物 動物 近世の南城 戦跡 ガマ

展示だけでなく、実演やワークショップ企画なども考えられる

これらを推進・管理するために学芸員・説明員の常駐が求められる。

16. 大学キャンパス 職員・ボランティア

6) 大学の南城キャンパス

これは私のオリジナルなことと思われるかもしれないが、現実を見ると、市内在住の研究者、研究目的で訪問する研究者が増加し、市域内で大学授業をする例も出てきたり、市域を対象にした研究も増えたりしているなかで、当然対応が必要な課題といえよう。

そこで、大学（単独で、あるいはコンソーシアム（連合）で）の南城ミニ・キャンパスをコア施設内外に設置する。

南城学、地域農業、地域保健、地域史、地域経済などの地域活動・地域研究の拠点になる。

大学の活動にも触発されつつ、南城の過去・現在・将来を研究的に考えることが不可欠というだけでなく、必要性が増大していこう。そうしたことに対応する調整・促進機能、あるいはセンター的機能をつくる必要も生まれている。

これらに対応する施設として、次のものを置く。

研究室 30～40人収容のセミナールーム 会議室 事務室

学会などのコンベンションの市域での開催も増えてこよう。そのなかで、南城にかかわる分科会・シンポなどが置かれることもあろう。なかには、市民公開企画・市民参加を含む地域調査企画もでてこよう。

そうしたなかで、大学派遣のスタッフだけでなく、それに対応する市のスタッフを置くことも検討していこう。

7) 職員・ボランティア

次のような職員・ボランティアなどの配置が必要だろう。

- ・施設全体を管理運営する職員
- ・受付・案内
- ・学芸員
- ・コンシェルジュ（約10～20名）

多様な分野にまたがって、南城について説明・案内できるだけでなく、8) で述べるイベントの企画・実施を担う

- ・ガイド（約100名） 特定テーマ・地域・ポイントについてガイド
屋久島のガイドツアーを参照
- ・大学職員 6) に関わる
- ・関連組織職員

※南城を拠点とする地域起こし・地域観光・地域福祉などに関わる企業・NPO・組織の事務所を置くことの要請への対応の必要も生まれてこよう。

- ・警備要員

17. 沢山の日常的なイベント 屋外とつながる、市内諸施設とつながる

8) イベント

a) 200人以上集まる大きなイベントを年数回以上開く

例 子ども祭り 高齢者の集い 南城歴史フェスティバル オープンガーデンや半島芸術祭の中心拠点。尚巴志マラソンなど、すでにあるものに加えて、新たに生まれそうなスポーツ企画もあろう。

b) 10～30人ぐらいのミニイベントを年に100回近く開き、「日常的イベント」を作り出す。

例 モアシビ体験 グスクを語る会 星空会 自転車を楽しむ会 危険生物対処法講習会 消滅集落を歩く会 希少生物観察会 ムーチー会 竹細工ワークショップ 大里城址へのウォークと史跡探索 健康走ろう会 ペタンク入門 高齢者の生きがい語る会

c) ミニコンサートを定期的に開くようにする。

例 木曜三線コンサート 火曜昼休みクラシックコンサート

◎ 屋外とつながるコア施設

屋内施設を取り囲むように、屋外施設・広場を配置し、それがさらに施設外へとつながっていく。隣接する広大な敷地や森なども視野に入れて

1) 広場

祭りのイベント

子どもたちの日常的遊び場 (グスクロード公園のようなもの)

エイサーの練習場にもなる

2) 外に出かけるための準備・まとめの場

屋外のユンタク場 「あずまや」などをいくつかつくる。

ロッカー シャワールーム

マラソンなどの準備・整理体操の場

マッサージ・整体などのサービスができる場

3) 生活感あるミニ動物との触れ合いの場があってもよい

4) トレイル

5) 市民農園

◎ 市内諸施設とのつながり

市内各所に多くの小規模施設があることは、大変有益なこと

字公民館 農村公園 諸体育施設・図書館・福祉センター

それらをつなぐ場としての、中規模施設もある

旧市庁舎(玉城・大里) 大里農業改善センター・中央公民館・シュガーホール・物産館・がんじゅう駅など

コア施設をそれらとのつながりの中で構想する。

18. 多様なニーズに開かれた複合的なコア施設

◎ 利用者の多様性拡大に対応した多様なニーズに開かれた複合的なコア施設

1) 高齢者の増加、高齢者施設の増加のなかで、高齢者対応を考える。訪問者・観光者にも高齢者が増える。

2) 障害や病気を持つ人の訪問・滞在も増加する。

たとえば透析者などの旅行も増えているが、ユニバーサル・デザインをはじめとして、それらに対応する施設。

3) 外国からの訪問者の増大への対応

多様な言語・文化・生活習慣に対応。 違いを豊かさに転換する

ガイド 標識 展示

市内在住の外国出身者の活躍 国際カップルや工芸家

これらを、市内の国際交流・グローバル化促進・多文化協同の発展と噛み合わせる。

以上に対応できる、観光施設・滞在施設・交流施設の発展を促進する機能を備えていく。

※ 観光者・訪問滞在者にも、経済的格差問題の表面化が進行しそうだ。南城訪問者には、高級リゾート地滞在型といった富裕層もいようが、それよりは、価格的には手ごろ感があり、手作りの体験的なものを得る要求をもつ層が圧倒的に多いだろう。それらに対応するありようの一層の進展が必要。

※日本を含めた先進国に共通する問題として、人口減少問題がある。人口過密な沖縄本島にあって、比較的人口密度が低い南城市だが、全国平均と比べれば、かなり高い。

「人口減少・高齢社会になっても暮らしやすい南城へ」という方向性と結び合った観光・訪問者・移住者が増えてくる見通しの中で、「発見・出会いが豊かな南城へ」と進む。価格的には手ごろな、「癒し」感を得られる南城を育んでいく。

◎ 防災・避難機能としての検討も不可欠。

市民だけでなく、災害地・困難地からの避難者や難民を受け入れられることが要請されよう。安心と豊かな暮らしと市民との交流・共同の場として。

19. 市民参加を軸にした、進め方と完成後の運営

◎ コア施設の構想作成について、さらには完成後の運営について

今回の進め方は、市民ワークショップ、そして、役所内のクロスファンクション会議などで、市民参加型である点に大きな特質がある。そこでの議論は、この連載学習ノートの知恵の出所の中心の一つになっている。

また、連載4.5で見たように、他の複合施設においても、市民参加による運営が多い点特徴的である。この点では、連載2で紹介した井上正良・長瀬光市共著「人を呼び込むまちづくり」(ぎょうせい2013年)は、興味深い提起を行っている。

「住民を主体とした「ナナメ」ベクトルの仕組みをつくる

小さな組織体の活動を大きく育てていくためには、「タテ・ヨコ」ベクトルから「ナナメ」ベクトルへ移行

させる仕組みをつくる必要がある。(中略)生活の主体である住民の意思を尊重したまちづくりを進めるために、従来型の行政と専門家の計画づくりのやり取りを住民に報告する「タテ・ヨコ」ベクトルから、住民の主体的な活動に対する行政の直接的・間接的支援を専門家が支援する「ナナメ」ベクトルへ移行しなければならない。住民が専門家の技術や知恵・ノウハウを借りて進める活動に行政が支援する、トライアングルの関係を生みだしていく。」 p 80

「まちづくりチームをつくる

行政のまちづくりに関係する組織は、都市計画・景観・経済振興・観光振興・商業振興など縦割り組織となっている。これからの行政、住民の主体的活動を協働関係で直接的・間接的に支援するために、地域住民の課題提起に応じて、縦割りの組織から、事案ごとに横断的なまちづくり戦略本部となる数人のチームを編成し、専門家の支援を得る仕組みを生み出さなければならない。」 p 81

こうした志向性を、今後ますます強めて構想を作成し、完成後の運営にも反映させなくてはならない。この学習ノートに書いたものも、ほとんどが大量の市民参加が前提になっている。

運営形態の論議についてはまだ先のことだろうが、そうした志向性を大切にして、今後の展開に期待したい。

次の二つは、「つけたり」である。

◎ 命名

新施設に隣接する「市役所」は宣伝する必要がないが、この施設は宣伝が必要。「市役所」以上に有名なものになることが期待される。その点では、「シュガーホール」は、素晴らしい先例を作った。

なお、近年では「セルラー・スタジアム」のように、命名権を企業に売買するようありようが見られるが、それには強い慎重さが求められよう。

◎ 交通アクセス

現在の流れで行くと、過剰な自家用車・レンタカー依存状態が続きそうだ。高齢者をはじめとする交通弱者の増加傾向の中、公共交通機関をはじめとする多様な移動手段を維持発展し、さらに創造していくことが求められる。

また、自転車・車いす・電動車いす・盲導犬などを視野に入れていく必要がある。

また、道路網拡充の流れの中で、景観問題が登場する可能性がある。ニライカナイ橋の先例を参考にしつつ、それ以上に、自然と人々の暮らしと調和したありよう、スピリチュアリティや癒しなどにも対応できるものにしたい。

20. スポーツ施設機能1

以上述べてきたことに加えて、スポーツ施設としての機能を含ませるアイデアがある。

その理由には、市内の屋内スポーツ施設に老朽化しているものがあることも一つにはあろう。それだけでなく、人気スポーツの試合を誘致するためかなりの人数の観客を収容できる施設をつくってはどうかとの声もある。加えて、近年増えているプロアマのスポーツ団体を誘致して合宿練習場として活用してはどうか、というアイデアもある。それらは、観光客・訪問者を増やすという観光的視点を含んでいる。プロ野球の春季キャンプがその典型例だ。

無論、市民の日常のスポーツ場として、また、市内のスポーツ大会の開催場として活用できないか、との声もある。

前回まで述べてきた市民が集い交流し、訪問者・観光客が参加するための機能と並存して、スポーツを含む多機能のものを作り上げるためにはどうすればよいか。そのことを検討していこう。

まずは、スポーツ施設に限定して考えてみよう。その後、これまで述べてきた市民の集い交流、観光客・訪問者のための機能との関係について述べることにしよう

1) 既存のスポーツ施設

市内には、いくつものスポーツ施設がある。小中学校の体育館や運動場を含めれば、数十にもなる。それらのなかで、市営の体育館は、玉城総合体育館、知念体育館、さしきスポレクセンター、大里勤労者体育センターの四つである。その設立経緯は多様なようだが、さしきスポレクセンターを除くと、1980年代前半の建設で、30年余りが経過し、老朽化の指摘が出始めている。

他に、字公民館機能と共用している体育館もいくつかある。

新施設がスポーツ機能をもつとすると、これらの体育館などとの使い分け・連携関係をどうするかを検討が欠かせない。

2) 多人数観客を収容できるスポーツ観戦施設・イベント開催

既存施設の中で、多人数観客を収容できるのは、玉城体育館と知念体育館だが、1000人規模となると難しい。無論、スポーツではなく、フロアを利用した行事であれば、1000人を超すイベントも可能だろう。すでにクラフトフェア、ハープフェスティバル、文化祭などに使用されている。

こうした機能が、新施設ではどう可能であるのか、その検討が必要だろう。それには、稼働率、冷房機能を含む維持経費がどうなるか、という検討が欠かせない。余談だが、ある冷房設備付の体育館で、競技をする時、冷房使用にすると、選手一人当たり1000円前後もかかるので、使用しない例を耳にした。多数の観客が集まる時はいいが、競技選手だけの時は、使用されないことがかなりあるのだ。

また、スポーツキャンプ地として活用するには、宿泊施設が必要だが、まずは隣接するユインチホテルの活用という考えがある。

2.1. スポーツ施設機能2

3) 市民のスポーツの場とスポーツジャンル

字対抗試合など、市内のスポーツ大会開催だけでなく、稼働率をあげるためには、練習の場としても機能させていく必要がある。

その際、スポーツジャンルについての検討も必要である。ごくありふれた体育施設なら、屋内球技系が対象となろう。だが、それらが観光誘致をするような設備設計をするとすると、新たな検討事項が出てくる。

たとえば、バスケットやフットサルなどの大規模大会や、プロ団体の合宿練習に対応するとすると、通常の施設とはレベルが異なるものを作らなくてはならない。市外の他施設との競合のなかでは、特定ジャンルに特化した、ないしはそれに近いものを作り、それで魅力を出すことが有効であろう。だが、そのことでかえって、多ジャンルのスポーツ併用が難しくなる可能性がある。誘致のために、特定ジャンルの専用施設として魅力を高めることは、他ジャンルのスポーツがしにくくなることを伴う。

さらに、バスケット、バレーボール、バドミントン、卓球などの屋内球技系の他に、空手をはじめとする武道系や体操系などとして併用するためには、異なる施設作りが求められる。それらには、近年人気が高まっている、ヨガ・太極拳・ボクササイズといったものを視野に入れることが、市民参加、観光客誘致という視点から有効かもしれない。

さらには、ますます高まっていく生涯スポーツへの関わりの中かで、テニポン・ペタンク・ミニバレーなどといった、室内のニュースポーツ系にも視野を広げることが求められる。こうしたものを視野に入れた施設をつくるなら、個性的な体育施設として注目を浴び、稼働率や集客という視点からも、有効性を持ちうるかもしれない。

だから、特定ジャンルに焦点化するか、多ジャンル併用か、決断がせまられる問題になるかもしれない。

4) スポーツ・体育施設設置の物理的財政的条件

前回述べた、多数の観客席をつくって、プロアマの人気チームの試合を誘致できるような施設をつくるとすると、前提として、建築面積の検討が必要だ。アリーナとなると、規定によると、かなりの面積が必要で、予定面積では過少すぎて困難だという調査が報告されている。アリーナというよりは、床面積3000㎡以上とされる市区町村域施設としての体育施設が妥当な広さだということだ。

このあたりが、大きな隘路となる。

また、建築経費なども問題になってくるが、その点は専門的行政的検討に期待するしかない。

大きな問題は、完成後の維持管理にある。たとえば、前回述べたように、冷房施設を装備するとしたら、大きな問題が浮かび上がる。

とくに大きいのは、稼働率である。それらの点では、市場調査（マーケットリサーチ）が求められるだろう。その際、10年、20年、30年というスパンでの調査が必要だろう。その際には、人口、高齢者増の人口構成を視野に入れる必要があるだろう。その点では、生涯スポーツの視点が欠かせない。

作られた施設の稼働率が低くて、自治体の重荷になっている話をしばしば耳にするから、このあたりへの対応は不可欠の課題だ。

2.2. スポーツ施設機能3

5) 屋外スポーツへの対応

スポーツは屋内だけでなく、野外でも行われる。サッカー、ラグビーなどの球技系には、特別に設定されたグラウンドが必要なので難しいが、そうでないサイクリング、ランニング、ウォーキング、ウォークラリー、トレッキングなどのスタート・ゴール地点として活用などは、すでに行われてきているものだ。他には、ゲートボールやグランドゴルフなどの可能性もあろう。

これらのための準備運動の場、マッサージやトレーニング場、また用具貸出やコース案内、シャワー・更衣室の施設があれば、おおいに喜ばれるだろう。

次に、連載19回までに述べてきた市民の交流・集いと観光客・訪問者との交流といった機能とスポーツ機能との関わりについてである。市民交流・集いには、子ども・高齢者・障害者のための福祉機能を含む。さらに、多様な組織の事務所（大学コンソーシアムを含む）、建物管理運営部門の事務室などの機能を視野に入れる必要がある。

6) これまでのヒアリング・ワークショップなどで寄せられた声

その前に、各団体・組織などに行われたヒアリングで出された希望についての資料を見ておこう。

その一つに、ヒアリングで出された機能の件数一覧がある。

多い順に並べると、観光拠点19、市民活動14、劇場・会館10、交通拠点9、体育施設3、博物館3、図書館1となっている。

観光拠点や市民活動は、連載19までに詳しくのべてきたことだ。博物館については、エコミュージアムとして述べてきた。交通拠点については、直接の言及は少ないが、視野に入れていることだ。

意外に思われそうなのは、劇場・会館の多さだ。すでにシュガーホールがありつつも、なお芸能・演劇ができる施設への声が大きいのには、こうした分野で南城市のウリをつくろうという期待が根強いのかもれない。そうだとすれば、シュガーホールとは異なるタイプのものをいかにつくるかという課題が登場する。

以上と比して、体育施設が少ないのには、留意が必要だ。だからもし設定するとしたら、従来型のイメージとは異なる斬新なものを提起する必要があるということだろうか。そして、もしつくるとしたら、それだけに、市民や関係者への十分な説明が求められるということだろうか。

7) 多人数の儀式・集会との多目的併用

敬老会・成人式など、500人収容のシュガーホールでは対応しきれない儀式・集会が開催できる施設づくりを期待する声もある。それには、尚巴志マラソンなどの前日行事や開会式なども含まれるだろう。

すると、そうした儀式・集会の開催のためのステージをどうするかの問題が浮上する。6)で述べた芸能・演劇などを行うとすれば、さらなる工夫が必要だろう。その際、固定式のものを設置するか、行事・儀式ごとに設営するタイプのものを用意するか、という検討課題もある。

2.3. 個性的魅力が溢れる多目的の複合施設

以上見てきたことから導かれることとして、観光コア施設は、〈多目的の複合施設〉構想として追求していったらどうかということがある。単一目的としての追求がありえないわけではないが、そうすると、余りにも多くのことが抜け落ちてしまう。

その際、本施設だけでなく、南城市域の諸施設との連携も視野に入れる必要があるだろう。特に、設計中段階にある市役所内の市民利用ができる共用・多目的箇所との連携を見落としてはならないだろう。

また、屋外スペース、さらには隣接地域との関連を考えることも不可欠のことである。

以上のことを視野に入れる時、一つの大きな施設を作り、多目的に使用するというイメージが一つにはあろう。それには、使用機能によるメリット・デメリットが出てくる。たとえば、ステージ設計・ステージ位置などは、機能によるメリット・デメリットがしやすい。また、機能による使い勝手の差が大きくなり、全体としての稼働率の低下を生みやすい。それは、A機能では年間数十回使用されるが、B・C機能では年間数回の使用にとどまるといったことである。

それとは違って、いくつかの施設を併存させるイメージがある。それらをつなげ、大小ならびに形状が様々な使用形態を模索追求するという柔軟な(フレキシブル)な設計をするイメージが存在する。

さらに、閉じられた空間の建物をつくるというよりも、オープンな建物というアイデアも有力であろう。

建物には、事務室・研修室・会議室・福祉関連室など閉じられた空間を設けることが必要だが、それに連なって屋根付きのオープンな空間をつくるというアイデアがある。閉じられた空間—開かれた空間—屋外という連なりで考えようという訳である。そこに、1000人規模の集会儀式・観客席付スポーツ試合ができる機能をつくるというアイデアである。

加えて、オープンな空間には、フレキシビリティを容易にする多様なパーティション（可動な間仕切り）を用意してはどうか、そのことによって大規模集会への対応、多様な小規模の出会いの場への対応の双方を実現しようというアイデアがある。そこでは、市民・訪問者・観光客へのミュージアム・ギャラリー展示を行えるようにする。

こうしたことを踏まえると、しばしば目にするような体育館や大集会場といったハコモノというよりは、多機能使用に対応する個性的な魅力をもつ施設を追求したくなる。このアイデアの大きな問題点は、設計建築にあるだろう。多彩な使用というソフトを生み出すハードをつくろうというわけだから。

こうした設計は、建築家にとって、かなりチャレンジングなものとなるだろうが、それだけに実力が問われるといえそうだ。それは、奇抜はデザインをつくるというよりも、多機能の併存を可能にするという点での豊かな力量が求められるというべきであろう。といっても、それに類するものはすでに存在しているようなので、関係者に期待したい。

アジアからの個人観光者が、このあたりでも増えた

2015年7月9日

先日、近隣の夕方散策をしていると、アジアから観光者から道を聞かれた。多分台湾か大陸かわからないが、中国から来られた方だろう。夫婦と子ども一人でレンタカーで移動しておられる。スマホをもって、「浜辺の茶屋」への行き方を聞かれた。英語での対応になった。

一か月ほど前には、我が家近くで、カップルにバス停を聞かれた。同じように、中国からの方たちで、英語で対応した。

しばし前には、近隣の方が、自動車トラブルにあった韓国からの旅行者を助けてあげたら、後で、立派な贈り物が届いた、という話を聞いた。

このごろ、アジアからの観光旅行者で、個人でレンタカーなどで来られるケースが増えている。私が住むあたりにくるのは、相当に調べてくる人たちだろう。もしかすると、ガイドブックにも記載されるようになったのかもしれない。

しばし前までは、団体旅行が多かったが、それに加えて個人旅行が増えたのが、今年に入っての特徴だ。中国語やハングル語ができない私には、英語でのやり取りしかできないが、相手も、旅行英語には慣れているのかもしれない。もっとも、私のような高齢者が英語で対応するのに、驚かれたようだった。

そういえば、数年前に台湾旅行した時も、若者に道を尋ねたり、レストラン・メニューでは英語が使えた。観光旅行には、英語が手っ取り早いようだ。

しかし、観光客の増加が激しいこのあたりの案内標識の整備はゆっくりだ。外国語のものは皆無に等しい。

また名所旧跡や景観を楽しむことにとどまり、人々との交流は極めて少ない。このあたりの工夫が求められているだろう。

南城市はリピーター好みの観光地か

2011年4月2日

南城市に立地するホテル二つのうちの一つサンライズ知念が休止したという。その近くにあるコンビニも休止になったという。ちょっと寂しい感じもする。

新原ビーチ近くの海岸には、超高級ホテルが建築中だ。津波問題が懸念されるが。

ペンションや民宿には、なかなか趣があるものが多いが、軒数は多くない。

南城市にくる観光客は民泊を除くと、圧倒的多数は那覇周辺のホテルに泊まる。5年ぐらい前までは、観光タクシー利用者が多かったが、いまでは、レンタカー利用者が多い。我が家の南側の道路は、昼間は半分近くがレンタカーだ。

観光バスで訪問する客は、アブチラガマと玉泉洞が中心だ。斎場御嶽、新原ビーチに少しはくるが。

だから、このあたりは昼間の観光地だ。夜はほとんどいない。夜の331号線は、超がらがらだ。

そんなところだから、このあたりに来る人はリピーターというか、「クロウト」に近い人が多い。そんな方々が滞在体験型観光できるような条件整備をもっとすすめてはどうか。がんじゅう駅などは、そうした色彩を持つ拠点になっているが。

体験農園とか、工芸・音楽など文化的な体験を継続的にできるとかを考えてよい。中高校生だけでなく大人が2日以上滞在するような場になるといいと思う。

3. 尚巴志マスタープラン

2013年3月に立ち上がった尚巴志活用マスタープラン委員会の委員（座長）になり、それにかかわって考えたこと、そしてその具体化事業にかかわる記事を収録した。

尚巴志マスタープラン事業『ゆうゆう風吹く音楽会～文化遺産めぐりコンサート～』

2015年11月20日



17～20日と市内四カ所で開かれるが、私たちの日程の都合で、2日目の知念久手堅



で開かれた会に出かける。月がでる夜空を仰ぎながら、とっても楽しいコンサートだった。

軽妙な司会、穏やかで味わい深く、心に響く東風の演奏。笛とギターやコッタンのハーモニーなど、多彩な世界が出てくる。

私たちの知人たちが子どもたちともに表現した「あたらしいふく」は、ほのぼのと楽しいものだ。幻想の世界を子どもたちと遊ぶ感じだ。

最後は、激しい太鼓。かぶりつきで聴いていた私の鼓膜を外側からだけでなく内側からも揺さぶる。

大満足だ。最終日の20日は、玉城の運動場前（もとふみあがりの墓近く）である。お薦めしたい。

尚巴志マスタープラン作成には、私も深くかかわったが、こんな風楽しい味わいある企画が積み重ねられて行くことを期待する。





糸敷城址でグ スクめぐりコ ンサート

2014年11月20日

18日から4日連続で、グスクめぐりコンサートをしている。私もかかわった尚巴志マスタープランにもとづく諸企画が進行しているが、その一環だ。

グスクでの企画は画期的だ。雰囲気が抜群にいい。私は、授業とか県民体育大会卓球練習などがあって、日程が取りにくかったが、19日に参加し、卓球練習は遅刻にした。



暗くてよく分からないが、100人余りの人がきている。昼間の城址とは異なって、真っ暗なグスク前の広場の大木の下がコンサート会場だ。11月にしては寒い夜になった。糸



敷は寒いところだが、一層冷えて、神秘的な雰囲気を作りだしていた。

進行役によるコント、劇団「賞味期限」による劇、そして津軽三味線・三線・太鼓などによるコンサート。私は、最前列のかぶりつきで見た。

とてもいいコンサートだ。ぜひ多くの人に味わってもらいたいものだ。20日は佐敷城址、21日は知念城址だ。夜7時15分からで、無料だ。





尚巴志紙芝居

大里南小学校

2014年9月27日

出来上がった尚巴志活用マスタープランをもとに、具体的な取り組みが始まっている。その一つは、尚巴志紙芝居を市内全小学校で見せることだ。



24日行われた大里南小学校でのものを、私も見た。

当初予定の4年生だけでなく、6年生も加わり、300名の大人数相手に、絵・語り・音楽で展開。数十人以下の少人数相手にまさに紙芝居風にやる予定だったのが、大人数なので読み手も緊張気味。

それでも、感動的に進む。作者も語りも、日ごろ小学校で読み聞かせをしている保護者たちだ。音楽は、琉球音楽の若手演奏家たち。制作演出は、教育委員会文化課職員たち。

これを基盤にして、取り組みはさらに拡大深化していきそうな気配だ。

話とはぶが、校長さんが、35年前に合宿形式の私の授業の受講生であったことを話される。恐縮だが、私の記憶から思い起こすことができなかった。なにせ、受講生は総計で1万人近くになるのだから。



最近、各地の学校に出かけると、こんな出会いがしばしばある。そして、現在の授業では、かつての受講生のお子さんが一人以上受講生におられるのが、ごく普通になってきた。

時代の移り変わりを感じる。

尚巴志のまちづくりコンサート&シンポジウム

2014年7月14日

13日に行われたが、2百名近い熱心な方々が集まり盛り上がった。

コンサートでは、これまでのシュガーホール企画で作られた曲のオンパレードだ。ピアノに三線・胡弓・太鼓・笛に合わせた合唱で表現される。懐かしさを感じる曲が続く。シュガーホールが展開してきた音楽活動の厚みを感じさせるものだった。



シンポでは、中村透さん、波多野想さん、古謝市長と並んで、私も問題提起をした。これまでの南城市の多様な取り組みを踏まえて、エコミュージアムを軸に、新たに大きな活動展開の構想を語り合う場であった。会場には、南城各地の多様な活動を担ってきた方々が熱心に聞き入るだけでなく、フロア発言をなさった。

終了後開かれた「打ちあげ会」には市長に多くの文化課メンバー、シュガーホールスタッフもくわわって、大いに盛り上がった。これからの十数年の展開が楽しみだ。40年近く前の教え子と姻戚関係になられたかたとの出会いの会話も楽しかった。皆さんの、とくに若い方々の思い入れと蘊蓄をたくさん聴くことができた。満腹状態の私だった。

尚巴志のまちづくりコンサート&シンポジウム(南城市)での私の提案

2014年7月2～11日

「尚巴志のまちづくりコンサート&シンポジウム」が、シュガーホールで13日午後開かれる。私も、1年余り、「尚巴志活用マスタープラン検討委員会座長」として深くかかわり、このブログでも発信してきた。加えて、この1年あまりは、シュガーホール第二期計画作成にも深くかかわってきた。ということなどあって、このシンポには、パネリストとしてかかわることになった。

そのレジメを作成したので、事前であるが紹介したい。ご感想ご意見などをいただければ、当日、さらに膨らませ提案できるので、歓迎したい。

タイトルは、次のようにした。

「エコミュージアムに向けてのたくさんの市民参加型ミニ企画の実施と人材掘り起し育成への提案」

南城市には、エコミュージアムの対象になりそうなものがいっぱいある。しかし、エコミュージアムというのが耳慣れない言葉なので、「何をやるの」という反応が多い。

そこで、こんなイメージで、だれにも親しめるものであるけど、やれば新発見が多くてやってみたくなる、という体験をもってもらおうというのだ。と同時に、市民の多くが、個人としても団体としても企画できるというイメージをもってもらうことも願っている。無論、市外の方でもOKだ。

エコミュージアムというと、自然とか歴史とか文化などをイメージしやすいが、それらだけでなく、人間が営んできたこと、現に営んでいることすべてにわたることまで対象にしたい。

そこで、まずは、私の提案で書いた企画事例を紹介しよう。

ミニ企画事例

※ 文化、観光、福祉、産業、教育といった縦割りを超えて

史跡探訪	佐敷イーグシク	石獅子	糸数壕	食栄森	民政府物語	軽便物語	
地域発見	小谷マーイ	南城を歩いて発見4キロコース	ショートコース東御廻り	新築アパート訪問	旧集落発見	昔の道発見	琉歌ゆかりの地訪問
動植物発見	食べられる野草	ハマジンチョウ	野鳥	ガーデンづくり	捨て犬猫の行方	ハブ対策研	

究
 自然 アメダス観測（糸数）訪問 南城の地質発見 津波跡発見 天の川・さそり座発見
 産業現場見学 豆腐づくり 漁船体験 スーパーの裏方探訪 琉球王国玉泉洞繁盛記
 「猿人の湯」発見 繁盛するカフェの秘訣 さやいんげん物語 住宅史
 文化 シュガーホールの楽器体験 胡蝶舞体験 陶芸窯探訪 図書館活用法 景観発見
 スケッチ大会
 教育・子育て現場訪問 保育園訪問 クラブ活動訪問 学童保育指導員体験
 健康癒し 健康長寿者訪問 ハーブ育て パワースポット訪問 南城癒しスポットめぐり
 その他 シマクトウバの世界へ 移民体験を聴く 戦争体験を聴く 外国出身者との交流
 南城流飲み会の実践的研究会 ガーデンハーブティーパーティ

上に紹介した企画事例の前段箇所を紹介しよう。

エコミュージアム企画の考え方と取り組み方について次のように書いた。

- 1) 尚巴志の時代 多様な人々が入りし出会い協働して新たな社会を創造した。象徴としての尚巴志。現代の南城も、同様にたくさんの人が活躍して創造する時代。
- 2) 南城市には、エコミュージアムにつながる無数の「お宝」とその可能性が、身近に埋もれている。
- 3) 「お宝発見」としてのエコミュージアム。
 そして、「お宝創造」としてのエコミュージアム。
- 4) 「お宝発見」を楽しみながら、お友達を増やす。コミュニティをつくり育てる
 ※ 2種類のコミュニティを活用する。字として、個人が自発的に参加するものとして。
- 5) 市民のだれもが企画できるミニ企画。
 ミニ企画を通して、エコミュージアムのイメージづくりと人材掘り起し育成
- 6) ミニ企画実施要領
 - ・曜日時間設定は多様 おおよそ2～3時間ほど
 - ・参加者5～30名。参加費無料または、必要実費代。対象南城市民、他市町村民、観光滞在者
 - ・現場体験・観察とコンタクで構成
 ※ シュガーホール企画でも、開始2時間前から60分ほどのコンタク会（企画解説会）があってもいいかも
 - ・月に3つ以上企画 年に50（100?!）企画を目標とする
 - ・予算 1企画運営費として5000円または1万円、またはそれ以上。資料作成代、ガイド謝礼など
 - ・企画ニュース。ブログ形式（またはフェイスブック形式）（週ごとに更新）と紙（月ごとに発行）
 - ・広報 上記企画ニュース、南城たより、ポスター（観光施設・カフェなど）、口コミ
 - ・企画者（コーディネイター）は、南城市民ならだれでもなれる。市外からも歓迎。事務局に登録する。登録料無料。一回以上、企画実施することが義務。エコミュージアム研究会などへの出席が権利

企画者（コーディネイター）は、個人だけでなく、字などの団体もなれる。

例 市民大学の卒論課題として

青年会・老人会・女性会・JA・「老人ホーム」の「社会見学」企画として

市の〇〇課企画として

企業の社会貢献企画として

観光協会、総合地域スポーツクラブ、健康増進組織、文化協会などの企画として

学校（中学高校大学）の部活・クラブ・サークル企画として

学校の社会見学・遠足に市民参加

ボランティア組織として

・企画申請は、原則2か月以上前とするが、直前でもOK（思いついたら即実施型）

・終了したら、報告を出す（A4一枚）。そのままニュース記事になるように。

報告項目 企画名 企画者（主催団体）名 参加者数 場所 企画概要 発見したこと

エコミュージアムへの提案 写真1～4枚

7) ミニ企画推進組織と人材育成

- ・事務局（センター）を置く。常勤を一人以上置く。ミニ企画を促進する。ニュース発行。
- ・サポート会議（運営委員会）を置き、企画実施促進と様々な調整協議を行う。
- ・年1～2回、コーディネイター経験交流会「南城エコミュージアム学会」を開催。
- ・エコミュージアム研究会（学習会、ユンタク会） 年6回 自由参加。
- ・企画経験をすること、上記交流会研究会を通して、人材養成

8) は、記事前半で紹介した企画事例だ。

9) 1～2年間取り組む。ベスト企画10を選定 次の取り組みに活かしていく。

10) ミニ企画を継承発展しつつ、マスタープランを具体化をさらに進める。

最近しばしば出会う「市民参加型」そのものだ。行政が企画し、それに市民が参加するというよりも、市民自身が企画し、市民が参加する。行政はそれをサポートするのだ。「行政にやらせる」「行政にやってもらう」から卒業するということでもある。

こんな企画が沢山出てくれば、エコミュージアム素材の発見、市民人材の発見、今後のエコミュージアム展開の予想にもつながる、と考えるのだ。

以上紹介してきた私の提案はたんなる一例だ。当日を含めて、今後多様で豊かな提案と実践が噴出し、エコミュージアムへのうねりが生まれてくるだろう。この提案はその「呼び水」にでもなれば、という願いを

もって出したものだ。

当日を楽しみにしたい。



尚巴志活用マスタープラン報告書と尚巴志

まちづくりシンポ 2014年5月25日

1年余りかけて作成されたプランの報告書が完成し、その「普及版」とともに、担当職員が我が家にお持ちいただいた。私は、進行を少しサポートしただけだが、立派な報告書を見てうれしい限りだ。

その計画は、ハード整備よりもソフト充実にかかり、文化のまちづくりとしての壮大なものだ。プランのメドは、三山統一600周年の2029年につけられている。そのころ、どんな風に展開しているだろうか。その時、私は83歳。元気で見つめたいと思う。

「普及版」を広げると、「尚巴志すごろく 南城市と現代の尚巴志物語」（右写真）となっており、楽しめるものだ。

この報告書とこれまた完成した「シュガーホールの活性化計画」とをもとに、7月13日午後、シュガーホールで、コンサート&シンポジウムが開かれる。双方にかかわった私もパネリストの一人になっている。

並行して、シュガーホール20周年記念行事がいくつも進行している。

南城市は今後も、楽しみな文化創造・まちづくりの場であり続けようとしている。多くの方々のますますの参加を期待したい。



尚巴志円卓会議

2014年3月3日

1日午後の尚巴志活用マスタープランの円卓会議。たくさんの方が集まった。関心の高さを反映しているのだろう。進行役のとてもテンポがよく、掛け合いがうまい進め方で、会場は集中し盛り上がっていく。南城は、これまで以上に「何かをやる」という雰囲気が出てきた感じだ。



聴衆も三人組を作って提言を考えたが、我がチームには、目島興作さんという尚巴志への取り組みの長いキャリアを持つ方がおられた。かれは「もう逃げられないぞ」と話す。13年前に当時の佐敷町時代にも、取組プランを作ったが、合併でその多くが沙汰やみになってしまったが、「今度こそは」というわけだ。会場全体の話題にもなった。

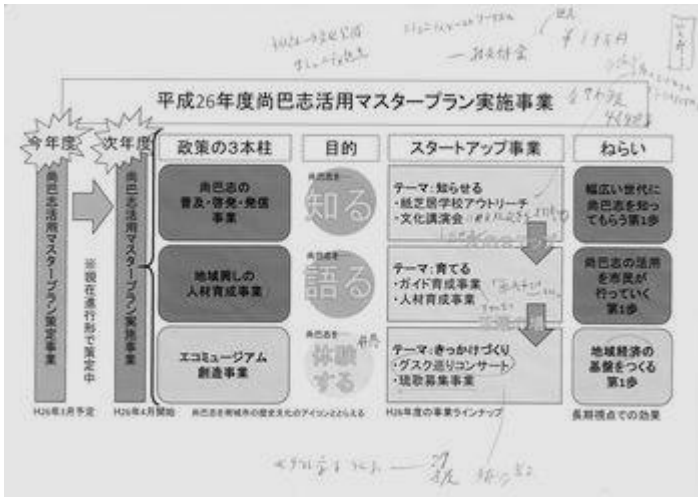
26年度からは、いよいよプラン実施へと踏み出す。期待していきたい。

南城市尚巴志活用マスタープラン作

成大詰め

2014年2月22日

20日午後、最終の作成委員会が開かれた。多様な委員の全員が出席し、またまた盛り上がった。この会議の座長は私だが、何かを決める会議の司会風ではなく、ワークショップのコーディネーター風に進行してきた。メンバーの豊かな発想がどんどん出てくることを大切にしたいのだ。



お陰さまで、たくさんの注目点・提案アイデアが次から次へと飛び出してきた。また、事務局を務める南

城市文化課、業務受託した国建地域計画部の素晴らしい仕事ぶりが、豊かな発想提案を受け止める以上のものを作りだした。

最後の委員会でも、さらに沢山のアイデアが飛び出した。

・国際的に活躍した尚巴志が、韓国で話題になっている李藝との交流があり、それをこのプランでも生かしたらどうか。

・市内にある歴史的

なものを多様な形で復元し、その地区に住む人たちが、歴史の豊かさを実感しガイドまでするようにもっていったらどうか。

・このプランでは、地域の公民館・集落が、いかに活躍するかが鍵だ。

図表は、順に

26年度の実施事業

三山統一600年の2029年までの「ロードマップ」 15年にわたる遠大なマップだ。

尚巴志のまちづくりを考える円卓会議 チラシ 御関心をお持ちの方、どうぞご参加下さい

委員会終了後、我が家で懇親会を開いた。委員メンバー、国建メンバー、文化課職員、総計20名近くが集まって、盛り上がった。



南城のたくさんの取り組みの新しいステージ

2013年11月23日

20日開かれた尚巴志活用マスタープラン委員会で、私は次のような発言をした。

8年近く前、南城市成立前から、私たちは「玉城ユンタク会」というのをもって、いろいろとユンタクしてきた。そのころ、町村合併の話題がいろいろとあり、紆余曲折を経て、現在の南城市に至った。市発足の頃は、旧4町村の相互関係も慣れていなかったけれども、南城づくりへの市民のいろいろな声を上げていく動きも強力に存在した。私自身は、「玉城ユンタク」が「南城ユンタク」に広がるなかで、いろいろな方たちと出会った。そんなころ、琉球新報移動編集局ということで開かれた南城の町づくりシンポにパネリストとして参加し、「手作り南城」のいろいろのアイデアを提案した。

そのころ、知念在住のベテランの方々の音頭取りで半島芸術祭 in 南城がスタートしたし、シュガーホールでは、市民ミュージカルの「太陽の門」が上演された。さらには、商工会や観光協会もいろいろな取り組みをし、オープン・ガーデンが始まった。

そんな多様な取り組みが、あちこちで行われるにつれて、市外からの南城市の動きへの注目度が高まり、「最近の南城市はすごいね」と声をかけられた市民が逆にとまどうことさえある。超満員状態の斎場御嶽がその象徴かもしれない。そうしたなかで、旧4町村間のつながりも増し、「境界」意識も薄くなっていく。シンボル「なんじい」の人气がその印（しるし）かもしれない。

そんな中で、新たな公民館（ムラヤー）づくりへの挑戦なども始まる。「小谷（うくく）マーイ」などは、その例かもしれない。また、半島芸術祭 in 南城も、当事者である工芸作家たち自身の運営へとバージョンアップする。

こんなことを見ていくと、南城は、たくさんの取り組みで満ちているといえるかもしれない。この11月下旬の「ハーブサミット」「半島芸術祭 in 南城」「オープン・ガーデン」といった企画ラッシュがそれを示しているようだ。それらに加えて、尚巴志活用のエコミュージアム構想は、新たな展開を示すものになりそうだ。

こうして、南城市は、合併当初とは異なった「新しいステージ」に立っているのではなかろうか。シュガーホールも、まもなく第二次計画をまとめる。ほかにも、これまでの企画をバージョンアップする動き、さらにいくつもの新たな構想が芽生えてきている。

こんな南城市のにぎわいとも言うべき状態には、これからの沖縄の地域創造の一つの大切な事例といえそうな気配を感じる。そのなかで、こうした南城における百花斉放とも言うべき状態を意味づけ、その今後を展望する知的整理作業が必要になっているようにも思われる。それには、産業的視野、文化的視野をからめることが求められよう。そうしたなかで、教育や福祉などの問題をどう位置付けていくかも不可欠のこととなるだろう。

南城市を盛り上げるいくつもの物語を育む尚巴志活用マスタープラン作成作業

2013年8月16日

13日、「南城市尚巴志活用マスタープラン」検討委員会が開かれた。座長を務める私も、充実した論議に

参加できた。年初から今回までは、プラン作成に市民・市役所職員が参加し、ワークショップなどのなかで、たくさんの物語を創りだしてきた。

と同時に、他府県の類似課題を追求する事例検討もすすめられている。今回は、隠岐の海士町例が示されたが、大変興味深い。高齢者が多い島に多くの魅力的な人たちが集まってきている。海士ワーキングホリデー事業などは、南城市が掲げる滞在体験型観光をさらに一歩進めるものだろう。視察に行ってみたくなった。

こんな風にして、市民からたくさんのアイデア・物語を集め、視野をうんと広げる中で、「これは面白い」と言うものが目白押し状態になってきたので、それらを今後どういうふう集約進化させるかが焦点になる。

その際に、こうしたプランが取りがちな総合型と言うか総花的というか、そういうものを作成することにこだわる必要はないように感じる。今並行して他部局主導で、二つのプラン作成が進んでいるが、それらとダブらない意味でも、ハード（ハコモノ）づくり型ではなくソフト型中心の本プランでは、いくつも実施プラン・物語を提示して、多様な創造活動をあちこちに生み出すようなプラン作成が好ましい印象だ。

そうした創造活動が、「動く南城市」イメージを増幅させるし、そのなかで、さらに新しい南城市イメージが追加されていきそうに思う。それらは、尚巴志がもつ「多様な世界を創造的に結びつけていくチャレンジャー」というイメージにふさわしいだろう。

そうしたなかで、長い歴史の中で、時代ごとに特徴的な遺跡を持つ南城において、それらをエコ・ミュージアムと言う形で構成していったらどうかという案もある。

そして、何世代もにわたって生活してきた人々と、ここ10～20年ぐらいの間に南城市に住み始めた人、さらには、住み始めたばかりの人、観光に来て滞在したいな、と思う人々との新しいハーモニー溢れる物語が次々と生まれるのを促進するようなプランになっていきたいものだ。

『尚巴志活用プラン』作成のための第二回市民ワークショップ 2013年7月15日

1 1日夜、シュガーホールで開かれ、私も参加した。台風接近という事もあって、参加者数は少なかったが、3グループに分かれて、三つの物語を作った。

これがなかなか面白い。正味1時間足らずでの作成なので、途中経過報告的なもので終わったが、興味深い。紹介しよう。

1) 字の伝統行事の綱引きに、おばあさんと娘は参加するが、地域行事を快く感じていない孫は、仕事が忙しいことを口実に参加しない。綱が切れそうになるなかで、おばあさんと娘が必死になって頑張るシーンを孫が目撃して、地域行事への積極的参加を決意する。

2) 南城市出身の若者が、北海道の会社に就職するが、『九州の知念です』と自己紹介する。会社を立ち上げた社長が、実は、南城市での出会いのなかで商品開発をしたことを話す中で、若者は、郷土を大切にしたいと決意していく。

3) 南城市女性が、伊平屋島旅行中に、本土出身男性とつながり、彼を連れて南城市に戻る。戻った時、馬天港から見る緑の景観に感動し、エイサー行事に出会う中で、南城市で頑張ることを決意する。初めは、男性に冷たい視線を送っていた地域と、男性は上手く関係を結べなかった。しかし、南城市でいろいろと奮闘する中で、地域に認められ、伊平屋から来た尚巴志の再来ではないか、という評判まで広がる。こうして、カップルは南城市でますます活躍していく。



ちょっとしたエピソードの類いだろうが、ありそうな話ではある。現代の尚巴志物語だ。いずれも、上手くいかなかった人間関係が、組みかえられていく物語で、そこに尚巴志をかかわらせるというストーリーだ。

こんな物語が、現代風に広がり深まっていくことが期待される。私も、3) グループでの共同作成に参加したが、私個人としても、物語執筆への意欲がそそられた。

写真は会場案内ポスター

ワクワクの「南城市尚巴志活用マスタープラン」検討委員会スタート 尚巴志

の時代と現代 多様な豊かさを南城おこしへとつなげる 2013年3月23～25日

21日、第一回委員会が開かれた。なぜか、私が「座長」ということになってしまった。委員は、すごい面々だ。地域おこし、環境教育、琉球史、観光などの経験とやる気にあふれた方たちで、とっても頼もしい。私なりに発見したこと考えたことを、並べていこう。

1) 南城市の地域おこしに尚巴志を活用してはどうかという市民の声が出発点にあって、市が積極的に取り組むことになったこと。

市民ワークショップを開いて、多様なアイデア・提案を集積し始めていること。南城市民大学に関わる人も大いに活躍しているようだ。

要するに、市民参加型なのだ。6, 7年前にも、そうしたうねりが南城市のスタートに活気をもたらした。そのあたりは、私の「南城物語 5 南城を盛り上げる」ファイルにも反映している。

※このホームページ「浅野誠・浅野恵美子の世界」に掲載

2) 南城市のなかの担当部局は教育委員会文化課と言う点も、ユニークだ。多くの市町村では、産業振興と

か街づくりの部門が担当するのとは異なるのだ。文化課は、文化財保護とか市町村史などを扱うことも多いので、尚巴志という歴史上の人物だからというので、文化課になったのだろうと推察する。

でも、教育委員会が担当することで、逆に、教育のなかに地域おこし、地域おこしの人材を育てるという発想を高めるという強みが出てくる。私流にいうと「沖縄おこし・人生おこしの教育」の地域版になりうるのだ。

3) 文化課だけがかわるのではなく、部課の枠をこえて有志職員が多数集まって、クロスファンクショナル(CF)会議というのを、すでに2回も開催して、この企画のアイデアを出し合っている。なかなかのアイデアが続出と言う感じだ。地域づくりにかわるいろいろな本を読んでいて気づくことだが、市町村職員が燃えるということは、地域づくりの要件の一つだろう。

4) この事業は、「国建」というもともとは設計業務に携わる企業が受託している。委員の就任依頼も、市長とか教育長とかではなく、同社の社長名で出されている。初体験だ。

だが、この事業は、よく問題にされる「丸投げ」とは正反対で、市民ワークショップ、クロスファンクショナル会議、私がかかわる検討委員会などでの協議を重ねていくことで進行する点で注目されよう。

5) 新しいことづくめだが、それだけに、今後どういう展開になり、最後にどういう形になるのかさえも、未知であり、今後の展開が創造していくものとなっている。

行政機関の諸委員会によくある諮問一答申というスタイルとはかなり異なるのだ。

右写真は、委員会が開かれた南城市役所大里庁舎。高い所は展望台で、見晴らしがいい。



6) 尚巴志については、配布資料には「三山統一と琉球の国造り」「施政体系の整備」「農業の重視(産業の振興)」「卓越した国際感覚」「リーダーとしての人柄」「親思い」「武芸堪能」とある。とはいっても、彼についての史料が少なく断片的である。それだけに、14世紀～15世紀前半の時代動向のなかで、とくに当時の動向のなかで、かつ南城市域だけでなく、沖縄全体、つながる海外諸地域とのかかわりのなかで、時代構図を読み取り、そのなかでシンボリックなものとして尚巴志像を理解「創造」していくことが求められる。

それは、4町村合併で始まった新たな南城市の街づくりと、アナロジー(類推、対比)で語る事が可能であるともいえよう。

7) 支配体制が強固に出来上がっていた近世のなかでの人物とは異なり、流動性が極めて高い14—15世紀の状況、さらに、小さい地域が世界とつながっているという状況の中で、尚巴志を捉えていくことに強みがあるといえよう。

8) 尚巴志時代のシマ(集落)人口は、数十人～数百人規模であり、佐敷、知念、玉城、大里の各々の総計も数千人には届かなかっただろう。農業、軍事、交易、物づくり(グスク構築、鉄製農具制作など)、祈りといったもののなかのいくつかを兼ねて人々は仕事をしていただろう。そうした人々をまとめていくリーダーとしての按司がおり、その代表的位置に尚巴志がいただろう。シマ起こしを住民皆が担い、それをリードした一人が尚巴志なのだろう。かつ傑出した力量をもっていたのだろう。

9) 住民には、何代も前から住んでいる人、2, 3世代前に、奄美・九州などから移住してきた人、移住してきたばかりの人、中国・朝鮮・九州から交易の仕事で来て一時滞在している人など、人々の出入りが豊かで大変開放的な、当時の南城市域だった。そうした多様な人々の交流共同を可能にした文化の懐の広さ、言葉や取引などを含めた、高度な交流を可能にする人材の存在が推理できよう。

10) 自然が豊かであるとともに、まだ始まってそれほどたたない稲作農業を、地域の自然実情に合ったものとして維持発展させる工夫を支える知恵があったことだろう。尚巴志が配った鉄製農具はその象徴だろう。

11) 尚巴志を育てた佐敷だけでなく、大里、玉城、知念とともに、14—15世紀の歴史の重要な物語が展開し、この四地域は相互の対立もありながら、交流だけでなく連携協同の動きも存在していただろう。これらを明らかにしていくことが必要となるが、現代でそれをいかに創造していくかがより重要だろう。

12) こうした14—15世紀の動向を、現代の南城に引きつけて言うと、1) 多様な人々の共同 2) 文化・歴史を基盤にした町おこし産業おこし 3) 南城以外の沖縄各地・世界各地に開かれ、かつ世界各地から招き入れ共同していく 4) これらの基盤になる人材おこし といった、壮大な物語の第一章として、今回の取り組みが位置づくであろう。序章は、南城市誕生前後から最近までの物語だ。

13) と同時に合併以前も含めてこれまでから行われてきた「助走」「基盤」としての豊かな取り組み実績があることを再確認しておきたい。シュガーホールの町民・市民ミュージカル、半島芸術祭 in 南城、カフェなど多様な「手作り型」観光施設、多様でユニークなものを生みだしている第一次産業とそれを加工する第二次産業、販売する第三次産業、つまりは第六次産業……実に多彩だ。

14) それらは、すでに南城市に存在しているとてつもなく豊かなものを発見し、それを基盤に世界からくる豊かなものとを結び合わせ、さらに豊かなものを作り出すという性格をもっている。

15) そのためには、四万人市民の壮大な気概を育むことが求められよう。

※ 尚巴志のよりどころとなった、佐敷上グスクが国指定史跡になる見通しだとのことだ。

今後の進行について

1) 市民参加型をより広げて、市民からの多様なアイデア・提案をさらに集めていくこと。

2) 山形県朝日村や秋田県田沢湖などのエコミュージアム事例など、各地の先進事例の資料収集が提示されたが、さらに海外事例を集めることも必要だろう。たとえば、ハワイやアジア・ヨーロッパの事例も集めたい。

3) 「水平思考」で、事例やアイデアを広く集めていく作業が進行しているわけだが、いずれそれらの事例やアイデアをいくつかに焦点化し、マスタープランの柱立てをし、その上に壮大な構図を作り上げる作業に取り掛かる必要がある。

4) CF 会議という優れた会議をさらに発展させるとともに、部課だけでなく役所をこえて多様な組織・個人を、南城づくりの担い手にしていく、人材発掘・人材づくりをも視野に入れていく必要がある。

5) この取り組みもそうだが、「一括交付金」を活用して、歴史上の著名人を活用する企画が、他市町村にも見られる。そうした動向も視野に入れて、企画をより優れたものにしていって必要があろう。

6) 尚巴志に代表され、グスク時代の人物や動向への関心が高まり、書籍なども多く刊行され、ブームめいたものが見られる。そうした歴史や文化を、現代創造にいかにかかしていか。そのことにかかわる創造作業が求められる。「二番煎じ」「ものまね」「回顧趣味」「英雄待望」などを越えるものが作りだせるようにしたい。そして、多様な取り組みを担うのは、英雄ではなく、人々＝庶民＝市民であることをきちんと踏まえることが求められる。

4. シュガーホール

私のシュガーホールとのつきあいは、1990年代の町民ミュージカルの時にさかのぼる。2009～2013年については、「音楽芸能・美術工芸」に関連記事が掲載されているので、参照してほしい。

シュガーホール「とら・とろ・ぴあコンサート」

2015年11月14日

11月は、毎年、なぜか魅力的な企画がいろいろとあって困るほどだ。

今年の最初の参加は、12日午前のシュガーホール「とら・とろ・ぴあコンサート」だ。トランペット・トロンボーン・ピアノ・パーカッションの楽しいコンサートだ。会場の集会室をあふれさせた200人ほどの聴衆は、三つの保育園の幼児たち、そして乳幼児を連れた親子連れが圧倒的多数だ。そのエネルギーを引き出す演奏、それにこたえる子どもたち・お母さんたち、そのハーモニーの中で進行。クラシック演奏もあるが、子どもたち向きに、とても親しみやすい曲目が続く。それを絶妙なコミカルな語りと、クイズ、体験演奏が織り交ぜられる。



興奮に包まれる一時間だった。

クラシックを身近なものにしてくれた。

そして、これは、シュガーホールが今展開している「シュガーホール企画塾」の企画運営によるものだ。推進の中心には、平田美智子さんという素晴らしい方がいる。

次の企画も楽しみだ。

シュガーホール 市民のための企画・運営講座／受講生の募集 2015年07月20日

シュガーホールが、下に掲載する講座の受講生を募集し始めた。

シュガーホールは、実に多彩な企画をしている点で全国的に注目を浴びている。そして今、これまで以上に、市民のためのものにしていくために、その推進役を養成する講座をスタートさせる。

関心のある多くの方が応募されることを期待する。

沖縄では、舞台上で活躍できる実演家（クラシック・歌三線・芝居・パフォーマンスなど）がとても多い。しかし、そうした実演を公開する企画を推進実施する人があまりにも少ない。宝のもちぐされ状態を作り出

しているとでもいえるだろうか。このことが、沖縄全体でいわれている。その状態を脱皮するための講座でもある。

.....

シュガーホール 市民のための企画・運営講座／受講生の募集

このまちに生まれ、生きることに誇りがある
このまちでこそ、子どもを育てたい
このまちでは、心の満ちたりた時間を送れる

シュガーホールでは、市民の方々のアイデアと協働による文化事業の企画学び生を募集します。いくつかのテーマに沿ってアイデアを出し合い、企画を実現に向けて練り、運営の実際もふくめて平成28年度からの試行をめざしています。

つぎのようなテーマを想定しています。

高齢者のためのピアノ教室

レッスン付き生オケ伴奏の歌合戦

市民参加の舞台創造・ミュージカル

野外ステージ（つきしろ広場）の楽しいイベント

ホールロビーの意外な利用

今年度はワークショップ形式で講座をすすめ、来年1月をメドに実現可能な企画にまとめあげます。ワークショップのファシリテーター（支援）は、芸術監督、新旧ホールスタッフ、経験の豊富な方々がつとめます。

募集人員：約20名（年齢を問いません）

応募資格：南城市居住または通勤の方で、シュガーホールの事業に関心のある方

募集期間：7月20日～8月15日

講座日時：平成27年8月～平成28年3月

第3土曜日 10時～12時

第1回講座：8月15日（土）1

0時～

会場：南城市文化センター 集会室

参加費：1,500円（教材費）

申し込み先：南城市文化センター

写真は、佐敷の丘から見るシュガーホール



シュガーホール新人演奏会

2015年5月26日

第21回の新入演奏会が、24日開かれた。演奏会と、その後の祝賀会に参加した。私の参加は、数回を越えたはずだ。

リピーター演奏の方もおられ、思い出すこともあった。グランプリを取らない限り、再挑戦ができるのだ。チャレンジし甲斐のあるオーディションになっているようだ。音楽素人の私にはわからないが、それだけ水準があがっているのだろう。

事前舞台練習の機会も用意されていて、何度も重ねた方もおられたようだ。若いだけあって、舞台での緊張感がこちらにも伝わってくる人が多い。また、聴衆とのやり取りを豊かに膨らます演奏者もいて、緊張を逆手に取って、演奏を豊かにする人もいる。

若手だけに、曲目に私の知らない新しいものが多い。

マリンバが参加できるオーディションが少ないなかで、参加できる喜びを語った奏者がいた。数年前からマリンバ奏者が多いことに気づいたのだが、そういうことだったのか、と教えられる。



レセプションでは、演者との直接の会話が多くの、有意義だ。若き音楽家たちの挑戦、そして今後の成長・夢などを聞くのも結構楽しい。それを応援する審査員たちベテラン音楽家の話も面白い。

こんな世界を、素人音楽愛好家たちが、より一層身近に感じられるような工夫も、クラシック音楽の底辺を広げる意味では重要だろう。最近のシュガーホールは、出前コンサートなどそうした機会を多く設定している。また、沖縄県内出身者たちが、地元での演奏機会を増やす意味でも、そうした企画をより一層展開されたい。

ところで、初めて補聴器をつけての鑑賞となったが、その効果を感じる機会ともなった。

写真は、あいさつするグランプリの藤原秀章さん

南城市文化センター・シュガーホール運営審議会

2015年3月13日

11日新しい審議会が開かれた。南城市誕生後、今回の審議会が4期目になるだろう。私は、2期目から務めている。会長職を続けることになった。

委員メンバーは、県内の主な文化施設の中心になる方々、作家・研究者、市内の音楽芸能関係者、そして若手有名実演家など、音楽芸能を牽引する方たちだ。お話を聴いているだけで、耳学問になることが溢れる。

第3期審議会時に作成した「第二期活性化計画」にもとづく盛りだくさんの20周年記念事業も、最終盤を迎えている。次年度事業は、新人演奏会やJAZZ in Nanjoや地域出前事業をはじめとする歴史的に蓄積された「伝統事業」に加えて、「創作オペラ」なども予定されている。

私も、これらの企画すべて出かけたのだが、実は半数もいけないでいる。それでも、年に数回以上ある。

また、「シュガーホール市民参加企画運営講座」がスタートし、市民参加企画の比重を高めていけるように、そうした力を育成する企画もスタートする。市民ミュージカルや地域芸能をつくりだしてきたこれまでの実績をさらに発展させる人たちをたくさん養成していこうというわけだ。

シュガーホールの創造性・先進性がますます高まりそうだ。

さらに多くの方々がシュガーホールの企画に是非参加されることを願っている。

今、全国的にこうした施設の指定管理者制度が広がっており、シュガーホールもその波にどうするかが話題になっている。他の施設が陥りがちなたんなる貸館化にならず、これまでの自主事業の蓄積を継承するだけでなく、さらに発展させるための知恵が求められている。この委員会が指定管理者制度計画を作成するわけではないが、強い関心をもってかかわっていくことになるだろう。

シュガーホール開館20周年記念国際

音楽祭式典・コンサート 2014年6月9日

8日午後開催。

開演前、ロビーで芸術監督中村透さんを撮る。開館以来のかれの活躍は絶大。彼と私との付き合いは、40年近くなる。背景は、シュガーホール20年の年表の大型版。

「かぎやで風」から始まり、最後は「黒島口説」まで、シュガーホールオーケストラと、おきたんによる歌三線・舞踊。クラシックと沖縄の歌三線・踊りのハーモニー。これは相当に挑戦的な企画で、難度が極めて高そうだ。だが、「黒島口説」は、見事に創造されていた。作曲編曲の中村透を含めて、演奏者・踊り手には大いなる絶賛の拍手を送りたい。

祝典でどなたかがおっしゃっておられたが、これまでの20年がすさまじいばかりの歴史をつくったが、

今後の20年、注目度が高いだけに、チャレンジなものになりそうだ。今年の20周年記念の企画も盛りだくさんで、見逃せないものが目白押しだ。

新人賞受賞者の活躍もすごい。今回も受賞者の演奏が聴けた。なかでも、4年前のグランプリ受賞者で、百名出身の重島清香さんは、その後ドイツでプロとして活躍。今回の歌唱はまさにプロだ。

左写真は、入口付近で、なんじいとともに、新崎誠実・洋美姉妹（新人賞グランプリ。優秀賞受賞者、8月17



日にデュエットコンサート))の記念撮影。

たくさんの方々に出会った。演奏者も馴染みの方が増えてきた。地元つながりと全沖縄的つながりとが結び合う場でもある。

シュガーホール新人演奏会

2014年5月27日

25日、第20回おきてんシュガーホール新人演奏会と祝賀会に参加。ここ数年、ほぼ連続して参加しているが、年々レベルアップしている印象。

エネルギッシュな若さで、曲にチャレンジしながら、自分なりの音を創造している印象。私は圧倒される。「熟」好みになっている私には、刺激が強すぎるほど。

天性のもの努力によるものの双方が折り混ざっていそうだが、演奏者によって、前面に出るものが異なる。グランプリの藤原晶世さんのバイオリンは、超素敵な音が響いてくる。ソプラノの金城理沙子さんの声もすばらしい。

素晴らしい音には、心洗われる感じ。3人のピアノは、全身全霊を注ぎ込んでの印象。激しく訴えてくる。



2人のマリンバ

は、とても心地よい響き。幸せ感を覚える。そのうちのお一人は、佐敷出身で、小さいころからシュガーホールに馴染んできた中村勇輝さん。彼の同級生



で、一緒にピアノを学んできたという、昨年の看護大学の受講生にばったり出会う。地元のいろいろなつながりが増えてきた。

上写真は、祝賀会で勢揃いした受賞者たち。

演奏中の緊張と激しい集中とはうって変わって、リラックスし喜びを表現している雰囲気。

何人かの表情をつたえよう。平良史子さん（宮古出身）、新崎洋美さん（宜野湾出身）、与那嶺万里さん（沖縄市出身）、そしてグランプリの藤原晶世さん。



おきでんシュガーホール新人演奏会オーディション

2014年3月25日

22～23日と二日間にわたって開かれた。その最後の、結果発表とレセプションに参加した。入選・優秀賞・グランプリが発表された。

審査員の声を聴くと、演奏水準が高くなっており、10年前とは比べ物にならないほどのようだ。だから、「選ぶ」審査員の作業も大変だったようだ。

レセプションでは、審査員全員の講評があり、その後、演奏者が審査員の批評を個別に聴く機会がもたれた。各審査員の前に列をなして聴く姿が、レセプション終了時点でも、まだ続いていた。

審査員講評では、多くの方が、技術は言うまでもないが、演奏の合間に観客に見せる姿の重要さ、曲の背景を深く知り、作曲者の意図を知り抜き、曲と一体となること、自分なりに曲を選びぬくこと、幅広い教養を獲得すること、……といった声が続いた。

まだ20歳前後の若い演奏家には、それらを獲得することは、今後の長い音楽人生にとって、極めて重要である点で、私も共感した。かなり音楽「一途に」歩んできたかれらにとって、そうしたものを獲得しつつ演奏に豊かさを作り出す課題にぶつかっているという訳だ。

この演奏会に繰り返し挑戦する人が増えてきたことが目立つのも、今年の特徴だった。南城市出身者もお一人入選された。

南城市の音楽をはじめとする文化水準の高まり、音楽愛好者の広がりにも、大きく貢献する演奏会だ。

受賞者による演奏会である「おきでんシュガーホール新人演奏会」は、5月25日（日曜日）に開かれる



うらやましいシュガーホール・ジュ

ニアコーラス 定期演奏会

2014年

3月17日

16日鑑賞した。結成20周年を迎えるコーラスが毎年開く演奏会。初めて聴く。

「音痴」の私には、きちんとした評価はできないが、かなりレベルが高いだろう。小学生から高校生までの約30名が、たくさんの曲を歌う。

今年は、東京から指導者を招き、ア・カペラを

8曲も歌う。東京に打って出るといいうわさ？も聴く。

うらやましい限りだ。年齢幅・歴史蓄積が大きいこと、指導者・サポーターの数が多く、いろいろな発表機会が多いことなどが、質的なアップを作り出しているようだ。といっても、本人たちの緊張のなかでも明るい笑顔をはらんだ歌いっぷりが何よりの宝だ。

演奏の中間にあたる第二部では、劇団「賞味期限」を中心とした音楽劇「どこにいるの 桃太郎？」も上演。リズムカルにすすむ楽しい劇。地域劇団「賞味期限」の実力もなかなかだ。

シュガーホールには、このほかに二つの合唱団を持っている。音楽芸能層を分厚くする強みといえるだろう。

シュガーホール活性化計画答申を市長に提出

2014年3月6日

5日午前、市長室にて提出。1年かけて、委員、市民などからの多様で豊かな意見をいただいて作成した。これまでの実績がありすぎる?!シュガーホールを、さらに活性化させようとするというのだから、すごいことだ。

音楽を中心とする文化から地域おこしに貢献し、また、クラシックにとどまらず、民俗芸能をはじめとする多様な音楽芸能ジャンルを協同的に発展させるという、大きな構想を持っている。

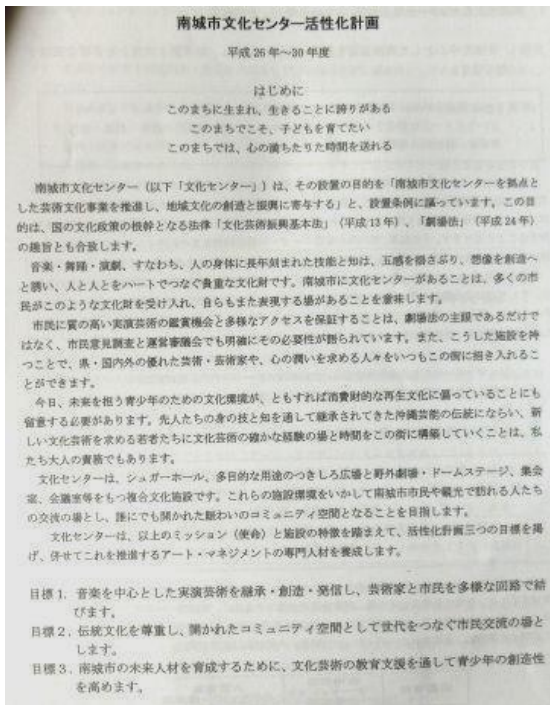
加えて、市民ミュージカルをはじめとする蓄積を踏まえ、これまでよりも一段と高いレベルでの市民参加を展開する。公募企画というのでも始める。20周年を迎える新しいステージにふさわしい展開になれば、と願っている。

「音痴」の私が、作成主体である運営審議会の会長を務めてこられたのも、たくさんの実力専門家、そしてシュガー

ホールに通う市内外のみなさんのおかげだ。なかでも、畏友中村透さんの存在が大きいことは誰もが認めることだろう。

まもなく、新人演奏会・オーディションの季節だ。

写真は、答申の「ヤマ」の箇所だ。行政文書でありながら、「芸術」風を出している。



5. 集落(シマ)

私は、沖縄で田舎暮らしをしている。ということは、シマと呼ばれる沖縄の集落との深いつながりで生活しているということでもある。加えて、2015年から南城市史「民俗」編の調査委員にもなった。ということで、沖縄の集落(シマ)について、ブログで書くことが増えてきた。以下はそれらを収録したものだ。

シマ(集落)の歴史的变化と多様性

2017年8月14日

10日夜の南城市史「民俗編」調査委員の勉強会は、とても充実していて、刺激的な中身を詰め込んだ頭がパンクしそうになった。多様な分野の方々に構成されているので、発言がダブらずに多様な角度から深められるのだ。その中味について、私の発言も含めて、私なりにメモってみよう。

1) シマ(集落)のなかの諸組織。それには、組(与) 班 ハラ(門中) 家・世帯 年齢別組織 サークル など多様である。

それには、シマごとの違いも大きいし、歴史的变化が激しい。ユイマールを行う際の組織の違いもあるようだ。「構」というのが見られるシマがあるようだ。

近年の際立った特徴は、サークルめいたものが増えていることだ。広くとらえると、模合にもシマ内サークルの性格をもつものがある。サークルは、地縁組織であるコミュニティに、アソシエーション的なものを結びつけるという、時代変化のなかで重要性を増してきている役割を果たしつつある。

2) シマ内の拝み所の変化 戦前、シマ内の拝み所を統合して「神社」を作ることが上からの施策で押し進められたが、戦後、統合した神社で拝みがなされるのか、それ以前のいくつかの場所でなされるのが復活したのか、などと多様性が生まれているということだ。

3) 道 かつて存在した道が無くなっている例が多い。それを復活した例も語られる。人が生活の必要のために、歩行専用の道がとくにそうだ。通学バスに乗り遅れた生徒が歩いて行ける道。近世期の重要な道が、いまでは施設になっていて通行できなくなっている話

4) シマ(集落)の歴史的变化 これは私が提起したことだ。近代以降のシマの変化の区切りにはいくつかある。

1900年ごろ 土地整理が行われ、金銭経済が浸透してくる。多様な芸能がシマのなかで受容創作される。

1945年 戦争

1960年代 離農が進み、被雇用者として生きることが一般化する。

1980年代 子育てが学校中心となり、学校で好成績を収めることを支援することが家庭の役割となり、競争序列秩序が一般化する。その過程で、「シマの子ども」から「親の子ども」へと移行していく。

これは、当日発言ではなくて、私の補足だが、現在の2010年代に大きな変化が進行しているようだ。高

齢化が大きくからむだろうし、貧困格差への対処を含めて、福祉問題がシマの大きなテーマとなりつつある。なかには、存立危機が生じているシマが、沖縄のなかにも見られるようになってきた。

5) 新興団地でも、スタート年代による差異が激しい。とくに住民の相互関係の濃淡、住民自治組織への参加程度の際は激しい。1970年代までにスタートしたところは、住民自治組織を、それ以前の体験をもとにして築く例が多い。同じ団地の中であって、スタートが遅い地区には、住民自治組織とは無縁な所が見られる。

6) シマの家々などの配置・景観

よく典型的な沖縄のシマ配置として語られる、元家から傾斜に沿って親族が家を作っていくスタイルは、南城にもみられる。碁盤目も含めて、そうした集落を見る時に、仲松弥秀が指摘したクサテ森や蔡温の風水などの影響に有無なども検討点になろう。

7) 綱引きの微妙な違い 多くのシマで行っている綱引きだが、同じように見えて、微妙な違いが多い。

このほかに、いろいろと興味深い発言が続出の勉強会だった。何度も繰り返しながら、質の高いものを作り上げていきたいものだ。

南城市史インタビュー 「シマの子ども」 公民館幼稚園など 2017年1月17日

南城市史「民俗」編の集落の暮らしについてのインタビューを続けている。4つの集落を担当しているが、今年度は二つに焦点化し、次年度に次の2つを焦点化するつもりだ。

このところ、1960年代と70年代についてのインタビューが多い。この後、80年代、90年代の話聞く予定だ。事柄の性格上、年長世代が多くなるのは当然だが、できるだけ多様な世代、多様な方々にお聞きしている。

子育てについての話を聞くことが続いたので、ちょっと感想めいたことを書こう。

1960年代までの農村では、「シマの子ども」という性格が色濃い。親たちが農作業などに出かける間、4、5歳の子どもたちは、シマの公民館におかれた幼稚園に通う。区が一人の保育者を雇い、30人ほどの子どもの世話をする。保育者は、海岸や森など自然のなかで遊ぶ「先頭に立つ」といった感じだ。

保育者の口が楽器の役割を果たし、歌う。黒板にアイウエオを書いて、竹の棒で指して、読み方や単語を教える、といったこともする。

配布された脱脂粉乳をお湯で溶かしたミルクが途中で配られる。それを近くのおばあさんたちが手伝う。

保育者は、高卒の若い地元女性が担う。幼児教育の専門知識があるわけではない。戦争直後の小学校もこんな感じだったようだ。

昼頃には、母親が帰宅して昼食の準備を始める。昼食ができたころ、父親も子どもも帰る。公民館幼稚園は昼で終わりなのだ。

こんな公民館幼稚園が、70年代前半の村立幼稚園設置に伴い閉鎖になる。これが、沖縄県が全国で断トツの幼稚園就学率になった一つの背景である。

そのころ子どもは、「家族の子ども」であると同時に「シマの子ども」だった。そして、小学生頃になると、放課後は、地域遊び集団を形成するとともに、農業を中心とする家業の重要な担い手でもあった。そして、学習意欲盛んな子どもに、奨学金をシマが出して進学を支援するといったことが行われた。学事奨励会とか教育隣組とかが活動していた時代だ。

1970年代に入ると、事情が変化し始める。とくに1990年代に入ると、著しく事態が変わってくる。家業手伝いの激減。子ども会・子どもスポーツ組織の拡大。おけいこ事塾・学習塾の増加。

都市地域が先行するが、農村地域でも90年代に入ると、変化が鮮明になる。「シマの子ども」の比重が低下し、「家族の子ども」になってくる。家族における教育は、親が教えるというのではなく、学校・塾・スポーツ組織などの補佐役・応援役として親が活躍するという形になる。

この変化は、劇的だ。南城市は農村地域であるが、今では、1960年代的な雰囲気を探し出すのは困難だ。

こんな話を聞いていると、実に感慨深い。無論、以上の話は、何人もの話をつなぎ合わせたものだ。この大変化のなかで、シマはどうなっていくのだろうか。シマの地盤沈下とでもいえそうな事態の進行の中で、有効な対応策が打てずに、ジリ貧状態にあるシマ、「シマ起こし」の多様な取り組みを展開するシマ、これまた多様だ。

そんな多様な歴史を見ながら、将来を見通せるようなものが出来上がることを期待している。

興味深い南城市民俗調査活動

2016年1月23日

11月に、今年度の授業が終わって以降、書斎派生活が中心だが、「南城の民俗」の調査活動が本格化し、その作業にも、ある程度の時間を振り向けている。

これが発見の連続で結構充実している。

私は4つの集落を担当しているが、タイプが異なるので、それが一層興味深くさせている。

沖縄で集落と言うと、「シマ」を思い起こし、佐喜眞興英「シマの話」のような、100年以上前のシマの民俗をイメージしやすいが、それが大きく変化している。都市地域では、そうした集落を見つけるはかなり難しいが、そうしたものが残っていると思う人が多い南城市でも、それらは様変わりしている。むしろ、その様変わりぶりを調査するといった感じなのだ。長くつづいた集落祭祀を例にあげれば、その祭祀を担うカミンチュがかつてと同じように残っている集落を探すのは難しい。そうしたものが維持されていそうに思われる久高島にしても、中心行事のイザイホーは長く行われていない。

だから、今回の調査は、そうした変化と、その変化のなかで何をつくりだそうとしてきたのか、を探ることになる。

また、新興団地、アパート・マンションの多い集落では、新たな課題に直面するなかで、新しい形での創造が行われてきている。だから、集落ごとに大きな違いがあるが、新たなシマ起こしをどうしていくのか、というテーマにむかって、探求しているところが多い。

そうした多様な総計71の集落を、一冊の本に一举に掲載するという大胆な挑戦が、今回の作業だ。専門委員20人と事務局とが、多様なアプローチを駆使して挑んでいる。

これらの方々は、世代も住所もキャリアも関心事も実に多様だ。それだけに、豊かさを創る方向へと作業をよりあわせていくと面白いと思う。

作業は、住民の方々への聞き取りが中心になるが、この聞き取りが結構興味津々な様相をみせる。日程打合せの時から、どんどん話し始めて止まらないお年寄りがいるし、「恥ずかしい」といって引っ込み思案の雰囲気を見せていた人が、ペースにのって語り始める例もある。

話題は、民俗、つまりは人々の暮らしにかかわること全部だから幅広いし、自らの生活体験を語ることだから、話は尽きなくなる。1時間余り聴いていると、私の頭が情報過多だといって、悲鳴をあげる。

こうした調査についての私の体験は、卒業論文のころに山間地での地域変貌と教育について、そして1970～80年代に沖縄教育史について何度かある。

70年代に、大宜味のおばあさんに明治時代の学校の話聞いたことを思い出す。ある時は大田堯先生と一緒にだった。ウチナーグチで話すおばあの話を、私の卒論生の「通訳」で聴いた。そのころを懐かしく思い出す。

今回は、こういう聞き取りを、これから何年かかけて蓄積していったうえで、原稿執筆に至る、という壮大な作業なのだ。

これらの中で、人々自身の、そして各集落の、さらに沖縄全体の物語が語られるが、それが新たな物語創りになりそうな感じがする。

新原の「ハチウビ健康ウォーキング大会」参加

2016年1月5日

新原の「ハチウビ健康ウォーキング大会」に、昨年からはまった「南城の民俗」の調査執筆の取り組みの一環として、関係者が私も含めて4名参加した。

新年行事として、新原のなかの拝所を10カ所以上めぐる企画だ。



気づいたことをいくつかメモしよう。

1) 多数の子どもたちを含めて、数十人参加の大規模なもの。子どもたちが、こうした行事に参加する点が注目される。

2) 拝所は、いくつかのカテゴリーに分かれる。

A 字に住み始めた三つの家 森山 真栄城 小波津

B カー カラウカハなど

C 丘の上 イリーハンタなど

D 著名な拝所 受水走水 ヤハラヅカサ 濱川御嶽 潮花御嶽 など

多様さと多さが注目される

字の歴史が200年ほどと短いにもかかわらず、多くの拝所を持っている点が注目される。

3) この行事は、数年前まで、新春マラソン大会であったそう。多くの字が衰退傾向にある字行事を、ここではシマ起こしと結びつけた形で、継承発展させている点で注目したい。

一万歩を越える長さだった、いろいろな拝所巡りとユンタクしながらのウォーキングで充実した時間だった。

沖縄の集落（シマ、字、地域自治組織、コミュニティ）についてのミニメモ

2015年12月13日～2016年5月9日

1. 考えるきっかけ

これから10回余りの連載で、沖縄の集落（シマ、字、地域自治組織、コミュニティ）についてのスケッチのようなものを書いていきたい。

はじめに、私が考えるようになったきっかけについて、個人的な経験から書き始めよう。

この6月から、南城市史のなかの「南城の民俗」編の調査員になり、その委員長になったことが直接のきっかけだ。「南城の民俗」は、市内71の字ごとに記述することが大きな特徴だ。このアプローチはとても貴重だと思う。

私の集落との付き合いは長いが、改めて考えてみるということは少なかった。そこで、今回の民俗調査をきっかけにして考えをまとめてみようと思うようになった。

まずは、私の集落との付き合いを並べてみよう。

～1972年 岐阜・愛知・東京生活。子ども・青年時代で、集落との付き合いを意識する機会はゼロに近かった。

1972～1974年 那覇市松川の郵便共同住宅に住む。できたばかりの200世帯ぐらいある大きな集合住宅の7階での生活だ。団地自治会もできて、会合に出て、いろいろな方々との付き合いがあったはずだが、記憶は薄い。

1974～1976年 南風原の新川の集落中央部の貸家生活。それまでアパートや集合住宅生活が続き、

2階とか7階とかばかりであったが、子どもが生まれたので、平屋に住むことにした。当時の新川は、今は大違いの数十世帯の小さな集落だった。

近隣の方々との付き合いもかなりあり、正月には、老人会中心の囲碁大会に一日じゅう付き合ったりもした。家の前の畑で作業をしていると、近所のおじいさんがアドバイスしてくれた。子どもは、近所の保育園に預けていた。

シマとの初出会いだが、残念ながら、2年で引っ越したこともあり、記憶は多くない。字代表で、村の卓球大会に出場し、さらに島尻郡大会、県民大会にも出たことは記憶に残っている。

1976～1990年 西原の小波津団地。できて間もない大規模団地だった。若い人が多く、団地自治会活動も活発に展開していった。近所との関係も、いろいろとでき、いまでも付き合いが継続している人もいる。沖縄各地から集まってきた人々であり、シマというよりも、新しいコミュニティづくりに燃える人達だった。私も多くはないが、いろいろと参加した。共同作業、祭り、スポーツ……

1990～2004年 愛知生活。ほとんどが日進市赤池だ。近隣500メートル以内の住宅は数軒にも満たないこともあるが、隣近所との付き合いを少な目にする傾向が強いところでもあり、少々寂しい思いをした。

2004年 現在の中山生活 これまでのなかでは、もっとも「シマらしい」生活

こうしてみると、1) 近隣とのつながりの薄い地域・集合住宅、2) 新興住宅地で、コミュニティづくりに熱心な地域、3) シマとしての長い歴史をもつ集落という3種類を経験したわけだ。現在の71の南城市の集落も、この三つに区分けできるかもしれない。

このいずれかを標準化（モデル化）するわけにはいかないだろう。おのおのが、それなりの歴史的経緯をもって成立し、それぞれの課題と今後をもっているからだ。

2. 集落スタートはいつか

集落は、人口規模、地理、産業、人間関係などいろいろな要素によって、様々な違いを見せる。今回は、集落スタートの歴史の違いをみていこう。

古く遡ると、考古学研究成果にもとづいて考えなくてはならない。港川遺跡やサキタリ遺跡まで遡るとなると、興味深いのが、今ここに書くことは、私の力に余り過ぎる。また、百名貝塚など貝塚時代の世界になると、もう少しわかってくるが、まだ、私には書けない。

さらに下って、グスク時代になると、稲福遺跡などがいろいろと示唆を与えてくれるし、糸数グスクなどのグスクが示唆するものも多いし、それらが各字（シマ）の伝承となって残っているところもある。なお、その時代の研究については、仲松弥秀の優れた問題提起的な研究が先駆的なものとして残されている。そして、古い集落として、史料に名前が記されているシマもある。

なお、グスク時代をめぐっては、ここ20～30年間に劇的といえるほどの研究進展があり、従来の定説が変わる例も多くなっているため、それらも視野に入れなくてはならない。たとえば、それらの集落の生業において、農業や交易などがどういう位置を占めるのか、あるいは集落住民が、長くその地に住んでいる在来の人々なのか、あるいは沖縄内外のどこかから移住してきたのか。そんなことの検討も必要になっている。

それにしても、歴史的激動を経て、15世紀後半の第二尚王朝時代になると、現在、長い歴史を持っているといわれる集落の原型が固まってきたようだ。

現在の字で、17世紀半ばごろの史料にも出てくる、たとえば南城市内の現在名で書くと、佐敷、手登根、屋比久、知念、久手堅、知名、久高、志喜屋、玉城、當山、百名、船越、糸数、目取真、大城、稲福、南風原、島袋、真境名、古堅、平川、小谷、津波古などは、それ以前にすでに成立していた集落だろう。近世になるころには、それらは、農業を中心とする集落になっていただろう。

近世は、農業生産が拡大する時期であるが、王府の施策もあって、字の分立移動なども行われたようで、前川のように、現在地でのスタートを近世期に求められる集落も、かなりありそうだ。元の集落は古島（フルジマ）と呼ばれたりする。

また、近世末から明治期にかけて、富祖崎、喜良原、吉富、福原のように、首里などから移住してくる旧士族がつくる「屋取」集落もできてくる。

戦争は、集落にも大きな変化をもたらした。住民収容所生活、そして基地のため、従来の集落を分立したり移動したりした集落も出てくる。また、大里から与那原地区が分離する。

農業中心であった集落でも、軍雇用員を含めて雇用者が激増する集落もでてきて、集落の変貌が激しいところが増える。底川（スクグラー）のように、消滅する集落もある。

1970年代に入ると新興住宅団地や大型集合住宅が激増し、その後行政区を構成するところが、大里グリーンタウン、新開、百名団地、知念県営住宅など十指に余りになる。

さらに、農業を中心とする集落が激減し、雇用者が多数を占める集落のほうが、普通になってくる。そして、旧来の字のなかにもアパート・マンション住民が激増するが、地区組織や行事に参加しない人びともかなりの数になり、新しい課題を感じさせるようになる。

こうした歴史的変化のなかで、グスク時代（ないしはそれ以前）、近世、戦前戦後、「復帰」後などのいずれの時期にスタートし、時代変化の中で、どのような変化を遂げたのかが、集落の特性を作りだしている。

3. 集落の地理的条件

前回は集落スタートの多様性を時代別でみたが、集落のなかには、スタートに強いこだわり持つところがある。たとえば、第一尚氏の流れをひいているとか、首里士族の系譜をひいているとか、である。なかには、アマミキヨから系譜があると語る人もいる。

字誌などでは、こうしたルーツを特段に重視して記述してある集落もある。ただ、文献史料がほとんどないなかで、かなりの労苦をとまなう記述作業であろう。したがって、口伝えに頼らざるをえなくなり、語り手により微妙な違いがでるとい難しさがある。また、同じ集落内にあっても門中による違いが生まれる場合がある。それにしても、口伝えなりの意味があることだろう。

集落の多様性を、今回は、所在地の地理的条件で見てみよう。

わかりやすいのは、海岸近くか、丘の上か、中腹かといった点だ。最近では、津波対策としての標高の標識があちこちに設置されている。歴史的に見ても、津波災害の経験から、低地から標高の高い所へ移住した例がある。宮古島や八重山の事例がよく知られているが、南城市域では、あまり聞かない。

それよりは、交易などとの関係で、船つけができる港がある海岸河岸があるかどうかがある。そして、農業を営むうえで、畑や田がつくりやすいかどうかがある。もう一つ、グスク時代以前では、軍事的要素もあるだろう。

大きいのは、水の便、つまりカーの有無である。また、カーとの位置関係だ。それは、時に水争いを生む。集落間だけでなく、志喜屋と基地との水をめぐっての緊張は大きな対立に至った。

近世においては、王府が稲作を奨励（強制）したこともあって、田をつくることが重要事項となった。そのため、水利条件がよく田を作りやすいところへ集落を移動する例が多い。ただし、田を優先させるので、田になるようなところに家を建てるわけにいかない。

また、薩摩一王府の施策をもとに、シマ立て、シマ分けがすすめられた。近世は、そうした集落移動や集落変化が多い時代だ。

また、首里から「下り」てきた士族たちの集落は、それまでの他の集落のようにまとまった形とは異なって、散村として形成された点も注目される。現在でもその名残を見ることができるところがある。

以上述べてきた農村的性格に著しい変化が起きるのは、戦後である。まずは、米軍統治との関係がある。米軍が立ち入り禁止にしたために、元の集落に入れずに、その近くに集落をつくった例がある。長毛の人たちが近くに住み、堀川を作ったのはその例だろう。加えて、戦後復興とからだ石切作業との関係もある。

現在のゴルフ場、かつてのCIA基地のあたりには、戦前の玉城、仲村渠、垣花などの集落の一部があったが、基地になり、復活することができずに、分散したり、あるいは近辺に新集落を作ったりした。親慶原などは、そうした歴史をもっている。嘉手納・北谷の多くの字、浦添市小湾などは、そうした事例が多いというよりは、むしろ、そうした苦難の中で、新たな集落づくりの歴史であったといえよう。

また、田畑にかかわっては、地質が大きな意味をもつ。作物に適切かどうかということである。耕作への移動とのかかわりで、田畑と集落の位置関係も重要だ。

さらに、1970~1980年代に各地で行われた土地改良事業も、集落に大きな影響を与える。

4. 人口 土地用途 家屋配置など

集落による違いをいくつかの点で見よう。

200人以下の小さい集落から、一万人に近い集落まで様々だ。戦前までは、一部の山間地や島を除くと、二百~数百人ぐらいで、似通った数だったが、戦後差異が広がり始めた。とくに都市化の進行で、人口が劇的に増加したところが、いくつも出てきた。集落というと、農村的イメージが付きまといやすいが、「町」というイメージになっているところが増えたのだ。

商業地域を含みこんでいるのか、農地が多くあり専業にしる兼業にしる農業を営む世帯が多いのか、住宅地になっているのが多いのか、による違いは大きい。

それは、一戸建てと集合住宅との比率の違いにも結び付く。一戸建てにしても、80坪以上の広さがあって、何本もの庭木、アタイグラー（家庭菜園）や庭を持っているかどうか大きな違いを生む。それらは、景観の違いも生む。緑が多いかどうか分かりやすい違いだろう。

1970年頃から目立つのは、当時、新興団地と呼ばれたところである、40年ほどたった今では新興団地とはいえないが、都市地区への通勤者が多いところで、夜間人口と昼間人口に大きな違いがあるところだ。最近では、平均年齢が高くなって、新しい様相を示している。

50戸以上あって、そこだけで一つの自治単位を構成するような団地の新規造成は減っている。しかし、最近では、既存集落のなかのところどころに、5～10戸ほどの宅地分譲や建売住宅ができるのが目立つ。加えて、分譲にしろ賃貸にしろアパート・マンションが大変多い。田舎といわれるところにも増えて、中南部ではアパートマンションがない集落を探すのが難しいほどだ。

集落内の家屋配置の違いも大きい。碁盤目状の集落、森や坪所から下りつつ住宅配置がある集落。いくつかのかたまりはあるが、集落内のあちこちに住宅が分散しているところもある。かつての屋取集落によく見られる。

集落内に森や原野がある場合、家々の位置に特徴が出てくる。同じように、海岸や河川がある場合に、それらと家々の位置に特徴が出てくる。防風林や風水でいう抱護林などが長い歴史のなかで作られ継承されてきたところもある。

集落内道路、隣の集落とを結ぶ道路、幹線道路（国道・県道）のありようも大きい。集落によっては、かつての馬場跡が、幅が広い道路や広場になっているところもある。

集落の全体面積の広狭も集落の雰囲気の違いを生む。住宅地・農地・商業地・森林原野という土地用途の差異も大きい。そうした用途指定の行政施策も強い影響をもたらす。

余談 私が集落に興味を持った理由

私が集落に関心を持つに至った体験がいくつかあるが、その一つは、集落の違いを手がかりにして子どもたちを分析した体験にある。1990年代、全国の学校を頻繁に訪問し、先生たちと共同研究する機会が多かった。その際、事前に校区巡りをできるだけした。通学区域がどんな雰囲気なのか、それで、子どもたちの特徴をつかもうとした。

たとえば、公営共同住宅、賃貸アパート・マンション、一戸建て住宅、代々その地域にある住宅、という混合で校区が構成されていると、それらの違いが、子どもたちの文化・人間関係、さらには発達特性に強い影響を与える。学級参観をしてみると、学級の子どもたちがいくつかのグループに分かれて、それらの居住地の違いが反映していることに気付くことが多いのだ。

たとえば、ある地域からきたグループは、生活リズムが早く、テレビの影響が強く、思春期的様相をみせはじめている。別の地域からきたグループは教室内ではゆったりとした行動だが、休み時間になると、運動場でかけまわり、少年期真最中だ。というように、違いが分かる。この二つのグループは、つかずはなれずの関係をもっているというように、グループ間関係にも特徴を示したりする。

そこで、私は、この二つのグループをより一層からみあわせて、相互の持ち味を生かすような活動を展開してはどうかなどと言う提案を頻繁にしたのだ。

※ 浅野誠「学級を変える 学校を変える」（青木書店1996年）参照

5. 集落の地図上の形 人口構成 人口増減

集落の地図上の形も興味深い。住宅がある所だけでなく、畑・森林・原野・商業地・工業地・海岸なども

含めて考えてみよう。

たとえば、私が住んでいる玉城字中山は、現在の琉球ゴルフ場の一部から、海岸あたりまで細長い。南北に直線距離にして3～4キロはありそうだ。だから、字の草刈共同作業は、丘の上から海岸までと大変長い区域をするので、大変だ。こうした細長い集落は、知念、玉城、具志頭の海沿いなど、近辺に結構ある。沖縄全体をみても、結構ありそうだ。

私の推測だが、海の幸、山の幸を確保できることが重要だろう。かつて杣山といわれたところでは、薪などを確保するうえで、重要な場であったろう。

集落は、細長く傾斜しているところのなかの、海側から山に上り始めるところあたりにある所が多い。最近、津波対策もあって、各地に海拔〇〇メートルという表示があるが、危険度に応じて、赤・黄・緑の色が塗られている。その緑になりかけた所あたりに集落の住宅地がある所が多い。なかには、黄色、ところによっては赤色のところに集落があるところもある。心配だろう。

細長い形以外にも、いろいろある。特に都市化が進行するなかで、新たにできた所は、かなり状況が異なるようだ。また、200～100年前に新たに作られた集落も、少々異なるようだ。

次に人口について見てみよう。

総人数は分かりやすい違いだが、それだけでなく、いろいろな要素による違いがある。男女比、年齢構成、平均年齢、世帯数、一世帯当たりの平均人数などが目につく。それらの歴史変化も目につく。

ある集落が、突然高齢者を中心にして人口増を示すことがある。高齢者施設設置の影響だ。男女比も、探っていくと、集落の特徴が分かることがある。沖縄ではないが、私が生まれ育った村は、1950年代1960年代に、女性人口が村人口の6～7割を占めたことがある。大型紡績工場に働く10～20代女性が全国から集まってきたためだ。

沖縄では、80歳代における男女差が目につく例が多い。平均寿命の差だけでなく、戦争の影響があるからだろう。また、年齢構成は、都市地区と田舎では、大きな差異がある。それには、主として、自然減と自然増ではなくて社会減と社会増がかかわる。全国的に言うと、1950年代後半以降に大量に出てきた事態、農村から都市への社会移動である。「集団就職」が象徴的事例である。私の生まれた村は、農村でありながら、紡績工場が集団就職という社会増を作り出したのだ。集団でなくても、個人としての就職も、そして大学進学も、農村から都市への社会移動をもたらした。それは、第一次産業から第二次・第三次産業への職業移動でもあった。

それらの蓄積の結果、全国的には「消滅集落」を大量に生みだしつつある。沖縄でも島や山間地の一部にそれが現れ始めている。それでも表面化しているのが少ないのは、他府県と比べて出生率の高さによる自然増が比較的あるからだろう。その沖縄でも、自然減を見せ始めたところが増加し、多数になりつつある。それは、集落の平均年齢を上げていく。自然減と自然増がつりあっていれば、平均年齢があがらず、多様な世代がバランスがとれる状態が継続する。

沖縄でも社会移動は激しい。都市地域のなかでも、インナーシティと言われるところでは社会減を見せているが、対照的に都市近郊では、社会増が社会減よりも多く、人口増になっている。南城市は農村地域であったが、都市近郊的様相を示し始め、アパート・マンションの増加のなかで、社会増が社会減を上回り人口増になってきている。

6. 坂本磐雄「沖縄の集落景観」を読む

『集落』という分野は、私にとっては未踏査に近い。そこで、いろいろな学習が必要だ。図書館で、坂本磐雄「沖縄の集落景観」九州大学出版会1989年という本を見つけた。建築専門の方の著作で、私には初めて出会うことばかりだし、理解不能の箇所も多い。そのなかで、多少は理解でき、示唆をうけたところをいくつか紹介しよう。

『序』の冒頭に、次のように書かれている。

「集落形態は住居の分布状態により、散在・散居・集居・密居に四分される。この中では、集居が日本全国平均では50%台で最も多いが、沖縄ではその割合が80%台で特に多い。このこと自体が沖縄の集落の特徴でもある。」

これは全く知らなかった。集居以外で気付くのは屋取集落の散居ないしは散在だろう。その集居について、沖縄各地の調査に基づいて、つぎのようにまとめられている。

- 「1) 現状における沖縄全域の集居集落で、規則的宅地割形態をとっているものは五割を占める。
- 2) 規則的宅地割の中では、横一列型がほとんどを占める。
- 3) 横一列型の中では、画地数が2~4までが多数であり、5以上は少ない。
- 4) 横一列型宅地割の計画的発生時期、および、格子状の道路配列と規則的宅地割の両者が同時に行われ始める時期は、ともに1737年と考えられる。
- 5) 規則的宅地割は、横一列型と田の字型の二系列が、各二段階の変化を経て、最終の横一列型二区画の形態に至っている。
- 6) 宅地形状の変容過程も、ほぼ規則的宅地割の形態変化と対応する。正方形に始まり、次に横長と縦長の混在を経て、最終の横長に至っている。」 p 114

図示しないと、わかりにくいですが、それは直接本書を見てほしい。具体的事例が数多く並べられているが、南城市でいうと大里稲嶺と佐敷小谷が詳しく書かれている。

稲嶺は、「宅地割は横一列型と田の字型の混合であり、前者の方が多数を占める。」

小谷は、「宅地割は横一列型を主とし、これに縦一列型が加わる。このような構成は、集落の地形と関係する。」 p 120-1

という文から始まって、地図とともに詳しい分析がなされている。

私が住む中山では、1班と2班が横一列型にあたりそうだ。3班と4班は、新しくできた道路沿いに作られたところが多いので、不規則型に近いといえそうだが、一部古いところでは横一列型の形跡が読み取れそうだ。

これらの規則型のスタートが1737年という、いわゆる蔡温治世期であることも注目される。

近年の宅地造成では、集落全体の景観という視点が弱く、集落全体の中では不規則な形と位置をつくり、集落景観としてのまとまりに弱めている。さらにアパートなどの集合住宅があると、集落の不揃い観を作り出していることは否めない。

集落全体の景観をどうするかという視点が欠落する状況が加速している感じだ。

今後の集落歩きの時はこうしたことに興味を持って、眺めていきたいと思う。

7. 社会増・Uターン・Iターンと集落づくり

前々回書き始めた社会増を見る時、近年注目されるのは、Uターン、Iターンである。それは県内の都市地域からだけでなく、県外からの人々を指す。どちらかといえば、県外からの人のことを指すことが多いかもしれない。

そのUターン・Iターンの人々の年齢は、就職・結婚による20代（30代）の人々、転職あるいは、退職して仕事探し中の50代（40代）の人々、退職した60代の人々といったように様々だ。

そこで焦点になってくる一つは、単身なのか、配偶者や子どもなどの家族と一緒になのかどうか、ということである。とくに学齢期ないしは乳幼児がいるかどうかは、集落とのつながりを作るうえでは、大きな違いをつくる。

もう一つの焦点は、仕事である。農業など自営に従事する人は、集落とのつながりが大きくなるだろう。仕事先がすでにある人は、それが近隣地域であるかどうかで、集落とのつながりを作るうえでの違いは大きい。仕事探しをする人にとっては、地域の仕事起こしの動向が深くかかわる。

10代20代が著しく減少し、青年会などが閉鎖に追い込まれるようなところでは、Uターン・Iターンの人々向けの仕事起こしの課題に直面しているともいえる。

リタイアをして、収入を得ることが主目的とはならない人たちにあっては、仕事に就く希望、あるいはボランティアを含めた社会的活動の希望をもつかどうかは、集落にとっての違いは大きい。そうした人々が集落活動に参加して、集落が活性化している事例は多い。なかには、趣味・休養に力点を置いて、地域活動には消極的な人もいよう。

もう一つの焦点は、住宅である。一つは、実家に戻ることである。その場合は、集落への着地は容易だろう。もう一つは、新規に住宅を建てる例である。その場合、集落のなか、あるいは隣接地に建てるか、離れた所にたてるかどうかの違いが大きくなる。集落の他住民とのつながりの多さ少なさに直接的にかかわる。近年、Iターンで、集落から離れて住む人が目立つが、その動機に、自然と景観にひきつけられる例が多い。だが、人々、とくに集落の人々とのつながり、というか、そのことの魅力についてはどうなのであろうか。ところによっては、Iターンの人々だけでつながりをつくり、既存の集落とはかかわらない例もある。そのことが、新しい問題を生むことさえ聞く。

新たな焦点的問題としてもっとも大きい問題は、アパート・マンションである。それにも購入と賃貸の違いがある。田舎と呼ばれるような農村地域にあっては、購入例は少なく、賃貸がほとんどである。というのは、購入するとすれば、マンションなどの集合住宅ではなく、一戸建てになることが多いからだ。

賃貸アパート・マンションの場合は、居住期間が短くなりやすい。そのため、その集落での住民意識は薄い。集落組織の構成員にならないでいる人も、かなり見られる。そのため、「市町村たより」など行政からの文書の配布をどうするのか、集落の清掃などの協同作業参加をどうするかなどの問題が生じる。

なかには、集落内ないしは近隣集落に実家があり、地元感覚が強く、集落組織にも参加する例もある。実家の集落と、アパートのある集落の双方に関わる人もいる。

こうした事例の中で、県営住宅、市町村営住宅のように、かなり大きな規模になると、それだけで、行政上の集落を構成する例も見られる。

8. アパート・マンション・新興住宅地

数十世帯以上が入居する公営集合住宅や新興住宅地の場合、敷地内に集会所を設置することが通例だ。そして、その団地だけで、行政上の集落に相当する自治会などをおく。

だが、集会所などを準備しても自治会が構成されない場合、どうするか。あるいは、それより規模が小さく、単独で自治会などを構成できない場合、集落所属をどうするか。10世帯をそれほど超えないような民間アパート・マンションの場合も同様である。

それらの場合は、その地域の集落組織に属する以外にない。といっても、それが形式化して、事実上、無所属になる世帯もあろう。なかには、区費などを安価にして、既存世帯とは区別するところもあろう。

いろいろな工夫があろうが、結果的に無所属世帯がかなりの比率になる集落は多いようだ。都市的などころほど、そうなる。那覇などでは、参加世帯が50%に満たないところもあるようだ。

住民の自発的参加、既存集落組織の積極的活動、住宅設置者の働きかけなどがでてこようが、このコミュニティの成立を誰が責任をとって考えるのか、そのあたりはかなりあいまいな状況のようだ。

こうした問題は、那覇・浦添・沖縄市などでは、早くから浮上していただろうが、西原などの都市近郊でも、1970年代半ばころから浮上してきた。私は、西原のできたての小波津団地に70年代半ばに入居したが、各地から集まって住民たちが、自発的に自治会をつくった。

南城市あたりでも、大里グリーンタウンなどが、1980年前後からつくられ、自治会組織なども形成されたようだ。

だが、1980年ごろから急増した賃貸公営住宅にあっては、自治組織ができた所と、名ばかりに近い状態にとどまるどころがあるようだ。民間アパート・マンションでは、なおのこと難しい。単身世帯が多いところでは、より一層難しそうだ。

こうした住宅では、居住者の構成が似てくる特徴をもちやすい。入居当初は、子どもたちが地域に溢れるほどで、子どもたち向けの行事などの取り組みも盛んだ。しかし、子どもたちが成人し、家から出ていくと、残るのは、50代以上の親世代になる。つまり、毎年平均年齢が一歳ずつあがっていく傾向が見られる。

すると、70年代にスタートした分譲一戸建ての住宅団地でいうと、2020年ごろには、70歳以上の高齢者が、かなりの比率になる。そのなかで、介護問題など高齢社会問題が如実に表れてくる。その対応について模索している所は多い。

そうした問題が、より直接的にあらわれるのは、高齢者施設と集落との関係である。そうした高齢者を施設のなかだけで対応するという発想を越えて、集落とのかかわりをもちつつ対応するという発想を持つ時に、新たな視点と課題が浮上するだろう。また、ミニデイサービスのように、集落との関わりを持ちつつ展開されるものには、参加者の増加のなかで、新しい創造的課題が浮上してきていよう。

9. 集落の激変

集落（シマ）は、当然なことだが、長く変わらないままであった、というものでは決してない。おそらく、1000年ほど前の人口の大量移入、そして農業生産の開始、国家統制の展開、さらには18世紀の島分けなどによる変化は、集落（シマ）のありようを激変させただろうが、そこまでは、ここでは遡らない。

ここでは、100年余り前の明治期の土地整理にともなう激変から振り返ろう。土地整理は、土地を個人所有にし、集落における、個々の家が占める比重をぐんと高くし始めた。例外をあげるとすると、久高島は土地共有制の形をいまでも残しているので、事情が異なる。といっても、士族が移住して形成した屋取は、創設当初から、個々の家の比重が高かった。

土地整理は、職業・移動の自由を並行させ、集落の固定的な姿の崩壊のスタートとなった。そのあたりの直前の姿をえがいたものとして、佐喜眞興英「シマの話」があるが、それ以降の民俗学的研究の大勢は、土地整理以前の姿を調査し「回顧」するということを長く続けたようだ。

この激変は、それだけに集落（シマ）のありようへの関心を逆に高めたかもしれない。激変への集落ごとの対応を組織したというべきかもしれない。集落に伝わる村芸能にはそれ以前のものもあるが、この時期に移入・創作されたものが多い。だが、この時期に成立したシマ芸能を長く続いた伝統のように愛顧する人々は今なお多い。

また、「お上」からの指示もあって、青年会・婦人会が組織され、集落の重要な担い手としての役割を果たし始める。それは従来のシマ内の組織を再編するものだった。また、金銭商品経済の浸透への対応と言うべきか、防衛というべきか、共同売店が作られ始める。

これらは、集落の持つ協同機能を、集落を襲う激変への対応として発揮したというべきだろうか。また、移民・出稼ぎなどにも、集落としての対応も見られる。

いずれにしても、そのことで集落（シマ）は流動化しはじめ、変容と維持とが相まって渦巻いていく。

次の大きな変化は、沖縄戦と戦後復興の過程に生じる。戦争は、集落を存続の危機に陥れる。そして、収容所生活、および、基地化による従来の集落からの追い出しが、集落の消滅・移転を作りだし、都市地域を中心に新たな集落を作り出す。

それらは、社会全体のありようの変容と並行するが、集落にも戦前とは異なる大きな変容をもたらす。特に都市を構成する集落の場合そうだった。そこでは、人々は、被雇用者となり、職住分離が進む。そして、集落（シマ）以外の勤務先などにもとづくつながりで、人間関係が新たにつくられ、その比重を高めていく。

その多数が同一シマ内で行われた従来の結婚が、シマ外に広がり、家族親族形成も大きな変容を迎える。

そのなかで、第一次産業から第三次産業へと産業が比重を移していくことが、それまで生産と生活の中心単位であったシマの役割を低めていく。

そうした中で、社会全体をおおいだした金銭商品経済が、シマにもおよび、シマのありようの決定的変容が、1970~1980年代に出現してくる。それが今日のシマのありようの前提にさえなっている。

10. 集落の激変 生産・生活の共同性の変容と弱まり

都市を中心に展開した集落変化は、農村においても進行していく。特に、1970年代80年代において

は、それが鮮明になってくる。

その変化をいくつか絞って述べよう。

第一に、農業を中心にした第一次産業に従事する世帯の激減である。それまでの集落は、住民の生活の協同だけでなく生産における協同にもとづいていた。その生産はほとんどが農業であった。ほかには漁業林業鉱業などがある。その他は例外的なものだ。大企業が立地するところでは、社宅など大企業勤務者によって構成される集落があるが、沖縄にはそうした集落は見当たらない。官舎と呼ばれならわされている公務員宿舎などが例外的存在であるが、生産に結びついた秩序が貫いているわけではない。

農業世帯激減に伴い、アブシバレー（畦払い 虫よけ行事）などといった農業生産暦にもとづいた集落行事や共同作業などが弱まっていく。仮に残っていたとしても、農業に従事していない住民にとって「意味不明」状態になっていく。

農業従事者にしても、集落における共同よりも、農協など生産組織を媒介にした共同の比重が高まっていく。

第二に、商品・金銭経済の比重の高まりのなかで、生産だけでなく生活における集落の共同性が低下していく。生活における自給自足的要素が低下し、生活における商品購入の占める比重が高くなっていく。それでもしばらく前までは、集落内に商店があつて、そこで購入することで、店主と客との関係、客相互（集落メンバー相互）の関係があつた。

しかし今では、自家用車を使用した集落外のスーパーなどでの購入に圧倒され、集落内商店は壊滅的状况に陥り、自動車をもたない人は、「買物難民」状態になる事例が出てきている。

それを集落内で相互に支えることもあるが、自治体が安価な交通手段を用意する事例も広がっている。こうした変化に対応するために、100年前に編み出された共同売店も、近年では徐々に縮小し、希少価値のような存在になりつつある。また、近年では、生協などでの共同購入の動きもそうした対応の一例だろう。

こうしたなかで、生産面だけでなく、生活面でも集落内での共同性が弱まってきている。

第三に 様々な集落の共同性の変容と弱まり

以上述べた変容がありつつも、なお集落の共同機能が失われたというわけではない。多様な形で、維持再生がはかられてきている。

50代以上の人々の記憶に残るものをあげてみよう。まず、集落により設置管理されてきた簡易水道。1970~80年代に全県的な上水道システムが整備された後、使用されなくなったところが多いが、取水場であったカー（泉 井）近くに設置されたタンクが、今でも残っているところがある。

1950年代から60年代にかけて広がりを見せた字保育園。字公民館などに開設された。字が経営し、字が保育士の手当てを出していた。これが、沖縄における幼稚園就学率の高さの基盤になったといってもよいだろう。70年代になると、字保育園は、公立幼稚園や公立あるいは認可・無認可保育園に引き継がれていった。

そして、旧盆行事を中心にした集落行事で活躍し、いまなお盛んな集落も多い芸能。1970年代に縮小していった例も多いが、最近になって、復活再生させようとする動きも根強い。現在の集落は、こうした行事と共同作業を軸にして「まわっている」ところが多い。

集落の共同作業は、現在まで継続しているところごく普通である。集落の共同財産、拝所、集落内道路、

海岸、林（杣山・入会地）などの維持管理に欠かせない。加えて、美化機能もあり、集落で花いっぱい運動をしている例も多い。

といっても、これらも、1970年代以降、大きな変容を余儀なくされているところが多い。

11. (続) 集落の激変 生活の共同性の弱まりと孤立的家族の増加 塀の高さ

前回記事で、集落の激変の第三として、様々な集落の共同性の変容と弱まりについて書いた。

それを象徴する一つは、冠婚葬祭の変容だ。私の個人的体験でいうと、70年代半ば南風原の新川に住んでいたころ、字民の結婚披露宴があって、字民総出で参加し、私も出席した。私の場合、住み始めて間もないので、新郎新婦との面識は薄かった。当時は50戸ほどの小さい集落だったこともあって、そんなありようだった。

こんな風に、結婚は集落にとって重要な行事だったのだが、こうした例は激減していく。近年ではホテルでのものが多くなり、さらには、披露宴をしない比率も高くなっている。

披露宴と比べると、葬祭を個人宅で行い、字が支え、字民の多くが参加する形は、残っているところが多い。といっても、葬祭業者が用意するセレモニーホールとする例が増加している。

また、集落内でごたごたがあった際に、かつてなら集落内で解決することが通常だったろうが、今では法的行政的解決になることが普通だ。

こうして、金銭・商品中心の動きが広まり深まる中で、住民の共同活動が減少し、社会資本・人間関係の希薄化がいわれるようになってきた。

ここで余談を一つ。集落内の住宅の間の塀の高さについて。

長く続いた集落を見ると、家間の塀として岩石を積み上げることが多く見られた。いまでも田舎に行くときそうした例が多い。また、道路と住宅の間に、福木などの樹木を植える例がある。その場合は、防風林の役目もあっただろう。

石積みの塀の場合、高さは1メートル以下で、塀の上から隣家を見ることができたし、物を手渡すことや会話をすることもできた。高い塀がある家は裕福なところに限られていた。

ところが、1960年代からだろうか、1970年代からだろうか、高さ2メートルぐらいのブロック塀が増え、隣家の様子を見ることができないことが通常になっている。樹木を植えるにしても、密植し視界を遮る。隣家と交流しようとする、正面入口に回ることが必要になった。

一戸一戸が閉じた空間になり、門や入口を通してしか入ることが出来なくなる。家相互の境界がはっきりしてくるのだ。そのため、子どもが大人の許可なしに自由に他家に入って遊ぶということがなくなってくる。そのなかで、家間の人間関係も薄くなり、「子どもはシマ（集落）の子どもだ」という性格を薄めていく。集落の大人が、どの家の子どもであろうとも、注意したり叱ったりすることも減ってくる。

一戸建てではなく、アパート・マンションになると、より一層区切りが鮮明になる。

私は1970年代末から80年代に、沖縄各地で家庭教育に関わる講演をしばしばしたが、こうした事態の問題性、つまり、塀が高くなれば、子育てをめぐる問題性が増すということについて注意喚起の話をよくしたものだ。その際、窃盗犯の告白として、塀が高い家ほど、見つかりにくく窃盗しやすいという警察情報も話した。

このように、家々が、隣家そして集落そのものから距離を置いていく事態が進行する。さらには集落組織に加入しない家も出現してくる。今では、加入世帯が半数に満たない集落さえ生まれている。

12. (続) 集落の激変 住宅の変化

集落の激変について書いてきたが、今回は集落の中の住宅について書こう。

まず、住宅とその敷地が、売買の対象になってきたことがある。かつて存在した、集落組織の許可なしに土地を売買することを禁ずる規則は、今や稀な存在になっている。そのため、集落とのつながりが全くない人が、集落に住み始めることは、ごくありふれたことになってきた。あるいは、集落に住んでいない人が、土地や建物の所有者になる例も多い。

売買対象になることで、宅地価格が高騰する例もあり、宅地確保に難問が出てくることさえある。あるいは、都市計画によって住宅建設が規制されることがある。

こうして、集落住民が、代々継続して住み続けるというイメージが崩れてきている。

こうした事例は、18世紀のシマ分けとか強制的なシマ創設という事例以来のものといつていいかもしれない。あるいは、大津波によるシマの移住以来、近世後半から明治期にかけて、主として首里士族が農村に移住してつくった屋取以来、戦後の基地建設で追い出された人々のシマづくり以来といつていいかもしれない。

そして、現代のシマ創設としての新興住宅地づくりが始まる。その場合、既存のシマとは全くかわりなしに作られることも多い。また、先祖代々住み続けてきた人と新たに住み始めた人達の混住が進むところも増えている。

次に、先に述べた生産と生活の激変のなかで、住宅における生産・生活機能の消滅あるいは大幅な減少が見られることである。数十年前までは、都市地域を除けば、どこの家にもあったアタイグラー・ワーフル・家畜小屋・石垣・防風林などがなくなってきた。生活のなかの中心を占める食生活でいうと、自宅内、あるいは集落内で食材を調達することが激減し、集落外のスーパーなどで購入するのが、ごく普通になった。

それは、住宅と、その集合体であるシマがもっていた総合的機能が低下ないしは消滅したということである。

そのことと並行して、一戸一戸の敷地面積が狭くなってきた。かつては珍しくもなかった100坪以上ある家は、いまでは豪邸の類になりつつある。30坪以下の家さえ珍しくない。その終点は、集合住宅であり、住宅専用面積20～30坪がごく普通である。なかには、10坪に満たないワンルーム・マンションさえ登場している。

住宅そのものの変化はいうまでもない。木造茅葺→スレート瓦→赤瓦→コンクリート陸屋根といった変化は、集落の景観を激変させた。

かつての集落は、各住宅が集合して、調和のとれた景観をつくっていた。今では、高層ビルのマンションと平屋建てが混ざり、多様な建築様式や屋根が混じる。それらが調和され美しさをつくることがないでもないが、多くは、一戸一戸の美観は考えられるが、集落全体との調和を視野に入れる例は多くはない。

そんな状況を憂えてか、景観条例をつくる所も出てきた。また、竹富島のように伝統的な景観を保護する特別な取り組みをしているところもある。

かつてのように、集落の聖地の配置、元家との関係、集落内の道と関わっての住宅の配置ということは、忘れられたかのようだ。

そんななか、集落内の住宅の配置、住宅のありようについての議論はほとんど聞かない。建て主に任されているのが多勢のようだ。

といっても、自然には逆らえないことが多いので、土砂崩れの危険性・津波の危険性・水路との関係などを懸念することも多い。また、道路との関係、住宅からの見晴らしの良さなどに強い関心を持つ人も多い。

こうして、集落における住宅のありようにも大きな変化が進行しているが、今後、どのように落ち着していくのだろうか。

13. シマ（集落）起こしへ 1 全員加入組織と任意加入組織

以上述べてきたように、シマ（集落）は、この100年余り、とくにここ40年余りで激変してきた。百年余りの前までのシマ（集落）のイメージは、シマの全戸が農業に従事し、貢納として出すもの以外で、生活を共同して維持する半ば自給自足の生活であった。人間関係もシマのなかに閉じがちで、隣のシマの間には強い境界が存在した。他シマから嫁を迎えるなら、その見返りの物を相手側のシマに与える必要があったほどだ。

そして、シマ内では共通の信仰を持ち、年中行事や冠婚葬祭なども共同で執り行った。シマ内の秩序もシマ自身によって担われた。だから、人々はまずは〇〇シマの人であった。シマの諸活動は、シマ住民の全員参加が自明の前提であった。ユイと呼ばれる共同労働も、そうした類のものであった。

こうした秩序から脱け出すことは許されなかった、というよりは、イメージさえできなかった。職業移動の自由、居住地の自由などは存在しなかったのだ。

こうしたありようには、シマ自身によって支えられるとともに、首里王府と薩摩・明治政府によって統制されていた。

しかし、前回までに述べてきたように、こうしたシマ秩序が激変する。生産共同体、生活共同体としての要素が低下する。シマが共同で行う集落祭祀や諸行事が衰えていく。それらに伴い、人間関係のなかでシマ単位のものが占める比重が低下していく。

職業の自由、居住地・移動の自由のなかで、シマから出る人、外からシマに入ってくる人が増えていく。婚姻もシマの境界を越えて行うことが増え、一般化していく。

人々が参加する組織は、家族親族とシマ以外にはなかったそれまでとは異なって、多様なものに複数所属することが一般化し、その一つとしてシマが位置づいていく。

そうしたものとして、まず学校がある。学校はいくつものシマから通学するものが一緒に集まって組織される。そして、市町村といった地方自治組織が、シマの上に組織され、それがもつ比重が高まり、シマはその下部組織的性格を強めていく。それらに伴う組織が、多様に生まれてくる。農業生産組織、女性組織、青年組織、軍事組織など。

さらに、農業以外の職業へ移動するものは、会社などの任意参加組織に加入し、被雇用者となるが多くなる。さらに、文化娯楽などの組織も多様に生まれてくる。社会運動にかかわる組織も広がっていく。こうした動きは、都市が先行するが、農村部でも広がっていく。

このような変化のなかで、シマは全員加入の共同体というよりも、その地域に居住している人々の地縁組織としての性格を強めていく。

従来のシマは、本人の意思にかかわらず所属するものであり、ある意味で宿命的なもので、それに縛りを感じる人が出てきて、そこからの脱出する人も増えてくる。そして、多様な組織に参加している中の一つとして、シマが位置づくようになる。なかには、その地域に住んでいながら、地縁組織に参加しない人も出てくるだけでなく増加し、都市地域では参加者が半数に満たない例も出てくる。

新たに登場した組織は、結成解散・加入退会の自由がある任意参加を原則としている。それをアソシエーションと呼ぶことが出来る。そうしたアソシエーションが沢山集まってできる社会のことを市民社会と呼ぶことができよう。

そこで、従来のシマがもっていたコミュニティ的性格と、新たに出てきたアソシエーション組織とのからみをどうするか、という問題が登場してくる。

そのなかで、シマ自体が、コミュニティ要素だけでなく、アソシエーション的要素を持たせるような動きも出てくる。

14. シマ（集落）起こしへ 2. アソシエーションにかかわる

任意加入組織（アソシエーション）を結成し解散し、加入し退会するという営みは、この100年間以上繰り返されてきたが、戦後になって本格化し、とくにここ30～40年間で、ごく普通のこととなり、全員加入組織（コミュニティ）よりも、身近なものになったとさえいえよう。

人々は、会社・NPO・ボランティア組織・サークルなどを結成し解散するという営みを、日常的に見聞するだけでなく、自らがすることが普通になったのだ。沖縄県における企業の開業率閉業率が全国一であることがそれをよく示している。と同時に、そうした組織のいくつもに同時加入していることも、ごく普通になっている。ある会社に勤務し、アルバイトで別の会社にもかかわり、何かのイベントを盛り立てる組織にかかわり、趣味の芸能サークルに入って、練習し発表するといったことが日常風景なのだ。

しかし、そうした組織に慣れない人が多いため、組織によっては、旧来のコミュニティ型組織の要素を多分に持ち込むものもある。家族的経営とか日本的経営と呼ばれるものは、その例だろう。必要なことに絞って加入するというのではなく、全人格的に面倒をみる、ないしは縛るというのはよくみられることだ。適度な距離を保ちつつ、いくつかの組織をうまく付き合っていくというよりは、オール・オア・ナッシングということで、一つの組織だけと深くつきあうが、そこから離れると、もう一切付き合わない、それどころか、その組織と対立的関係になるというのは、その例だろう。

とはいっても、そうした組織に慣れないために、関わることでわずらわしい事が増えると感じ、加入することに消極的になり、避けがちになる人もいる。その点で、金銭関係や商品売買関係なら、わずらわしさが少ないということで、人間同士の直接の関係ではなく金銭関係や商品関係に過剰に頼る人達が登場する。そ

のことが、結果的に孤立的なタイプの人を増やす。それは、学術用語を使っていうと、社会資本（人間関係資本）の減少を招く。沖縄はこれらが高いので、たとえ所得が低くてもそのことでカバーできると長年いわれてきたが、沖縄でもその低下が著しいことが指摘されている。長寿に象徴される医療関係でよく指摘されるし、最近では教育でもいわれることだ。

この任意加入組織とのかかわりかたは、ほっといても上手くなるものでなく、くりかえし体験し、そのなかで力量を高めていかななくてはならない。

その点では、家族・集落・学校などに見られるコミュニティ的組織の中で、そこでの出会いをもとに、任意加入組織にかかわる力量を高めていくのは、一つの重要なきっかけになる。たとえば、クラスとか近所とかいうコミュニティのなかで友達関係を深めていくのは、多くの人が行っていることだろう。

ちなみにいうと、結婚に至るカップル探しも、近年、血縁地縁などのコミュニティ関係のなかででなく、アソシエーション関係のなかで作ることが一般的だが、そのきっかけとして、クラス会とか、兄弟姉妹の知人とかというように、コミュニティから派生したアソシエーション関係のなかでつくる事例が多い。

今から50年近く前までは、同じシマ内部同士の人で結婚する例がとて多かつたが、こうした変化を背景に、1960年代ごろから職場・サークルなどのアソシエーションとかかわる出会いのなかで、シマ外の人と結婚する例が農村部でも増えてきた。

15. シマ（集落）起こしへ 3

集落・シマというコミュニティ組織にあっても、近年ではアソシエーション的要素の比重が高くなってきている点に注目する必要がある。

集落内に居住しているが、集落組織に属することを望まない人が増えているのはその例だろう。そうした人が、集落に留まれるようなことが求められる。また、集落外から移住してきた人が、集落組織にも属したくなるような組織をつくる必要がある。かつてのように、「集落内に住んでいるから、集落組織に属することは義務だ」というだけでは、ラチがあかない事態がごく普通になっている。

その点では、1970年代以降生まれしてきた新興団地での模索創造が参考になる。そこでの集落組織には、コミュニティ組織でありながら、アソシエーション組織の性格を強く備える傾向が見られる。

そうしたありようの工夫としては、こんなものがある。全員加入の活動でも、親睦関係を深める努力はするが、強制はしない。いわば「つかず離れず」の関係をつくる。集落組織の内外に、趣味サークルなどの任意加入組織を多様につくる。

集落組織の役員にも、長く住んでいる人たちだけでなく、居住期間の短い人達、あるいはアパート・マンション住人など「新住民」からも出るような工夫をする。集落行事には、長年続いてきたものだけでなく、新たな住人の希望・趣向にあったものを加える。

それらは、集落組織が、住民全員を拘束するというよりは、集落という場を活用して、新たなつながり・活動を生み出すものだと考えるのだ。それは、前回述べた職場や学校での出会いをきっかけにして、つながりを築き深めるといったタイプと同じものだ。

今、集落活動には、多様な新しいものが必要となってきた。津波などの災害対策とか、高齢者福祉などがその典型だ。また、「文化村」というように、新たな文化でのつながりを追求する動きもある。それらは住民全員に必要なものも多いが、その中身は、個々の事情に応じた多様な姿のもの、多様なつながりを生み出すようなものでありたい。

その点では、集落の唯一の拠点ともいべき公民館にも、多様な姿が求められるだろう。あるいは、公民館以外にも、住民たちが自由に出入りできる場があってもよいだろう。たとえば、集落のなかに住民カフェとか現代版モアシビ場があってもよいだろう。

そうしたものには、集落住民だけでなく、他地区からの参加が歓迎されてよいだろう。観光客なども含めて、地区外の人々との交流を、市町村施設などの公共施設だけでなく、集落内の多様な場で開かれてもよいのだ。その点では、オープン・ガーデンと工房巡りなどの企画が、人々のつながりを生み出すものへと発展していくことがあってもよいだろう。

そうしたなかで、ここ50年間に、集落のなかから出ていった生産機能・生活機能が、集落内に戻ってくるのが期待される。それは、大量生産・大量消費的ありかたから、少量生産少量消費とか手作り生活といったものの回復であるとも言えよう。

そうしたものが、各地で問題となっている限界集落からの脱皮のきっかけとなろう。その点では、統廃合された学校など閉鎖された公共施設を別の機能でもよいから復活活用する動きが目立つ点が注目されよう。

スクガー（底川） マーイ

2015年11月23日

興味深い企画目白押しの南城のいろいろなところを回った一週間余りの区切りに出かけたのは、スクガースクガー（底川）マーイ。



スクガーは、ニライカナイ橋を上りきった知念の丘（上原ともいう）の、木創舎の裏手をおりたところにある。約400年前、首里から移動してきた土族が開いたもので、1966年に最後の家族が去ったあとは、自然に埋もれたままになっていた。



木創舎主人の城間光雄さんは、私が愛用する机を作

ってもらった木工職人（芸術家）だが、今、このスクガー掘



り起しにエネルギーを大發揮している。南城市商工会といっしょになって、スクガーマーイを春夏に企画実施し、ガイドをしている。

彼の案内で、ジャングルに近くなっているスクガーを回る。

誇り高き土族屋敷の雰囲気を



今でも感じさせる屋敷跡だ。左上写真は、ヒンプン。右上写真は、立派な豚小屋（ワーフル）兼トイレ屋敷地を大学の研究調査で発掘すると、石畳道がでてきたということだ。（中左写真）

中右写真は、集落のメインストリートで、子どもたちは、ここを知念小学校まで通ったとのこと。当事者も参加しておられた。

小谷マーイ

2015年11月22日

22日午前、南城市佐数字小谷をまわる小谷^{うくく}マーイに参加。3年目だそうだが、初めて参加した。すでに



歩いたことのあるコースだが、地元のガイドの方の話を聞きながら歩くと全くもって素晴らしい印象。

沢山の参加者があり、3, 4グループに分けて案内。私たちのガイドは知念さんと津波さん。地元の長老だ。途中での、ここは



戦争の時に自分も入ってガマだとか、土帝君の再建の時の苦労話とか、いろいろと体験をもとにした

話が興味深い。



写真

上左 上の井 上右 豚飼育場跡 フール

中左 戦争時の砲弾跡が残るヒンプン

中右 ジャンクベリ道 山を上ると、大里の稲福にでる。この道を通って、糸満まで竹製品を売りに行ったという話。

下左 小谷名産の竹製品制作実演

「これは買えないですか」と尋ねて、破格値で売っていただいた。

写真は製作者と購入したもの

普通に歩けば30分ぐらいのところだが、2時間余りかけて、楽しく歩いた。途中には、民謡演奏もあり、茶菓の接待まである至れり尽くせりだ。

300人ぐらいの小さな集落だが、中味がはちきれんばかりにつまった小谷だ。

南城の集落の暮らしの話聞く 聖地での服装 このごろの私 2015年10月22日

南城市史関連で、いくつかの集落の区長さんのお話を聞く機会が連続している。暇なはずの私が、結構忙しくなっている。私がかかわる集落は4つだが、その区長さんと最初の顔合わせをし、これからの進め方の相談を始めた。4つは、かなり異なるタイプなので、それぞれ新鮮味がある。

これを機に本格的な聞き取りなどを11月以降すすめていく予定だ。

そんな折、志喜屋のマッサージ「蘭」に出かけ、志喜屋の話などで盛り上がる。1時間の予定をはるかに超えて、ユンタク。マッサージのスペシャル・サービスになってしまった。「蘭」には10年間通い続けたが、私の健康法の中心柱の一つだ。

斎場御嶽の訪問者の服装について、観光者自身の声として、きちんとすることを求めているのだろうか、ということがあったようだ。思い起こすと、バリ島やカトマンズの聖地・寺院で、服装や靴を着替えるよう求められる人が多かった。たとえば、ヒンドゥー教寺院では、牛は聖なるものなので、革靴での入場は禁止なのだ。

観光者がほとんど来なかった時代の斎場御嶽の話など、たくさんのお話を聞く。

志喜屋でも、シマ起こしということで、村芝居として「伊江島ハンドゥー小」の久しぶりの上演への動きがでてきたようだ。実は、「伊江島ハンドゥー小」は、我が中山から習ったのだそうだ。

南城の多くの字では、こうした芸能がお宝になっているのだ。マッサージ師の具志堅さんは、かつて志喜屋のスーマチなどのまとめ役だったようだ。

具志堅さんは、もてもてのマッサージ師なので、那覇のマッサージ院に呼ばれていたが、ようやく後釜が見つかって、平日も自宅で療術ができることになったようだ。時間のゆとりができたので、志喜屋のシマ起こしにかかわろうということだ。具志堅さんの紹介で、志喜屋グスクを案内していただいた城間さんには、拙著を贈呈したが、書店で他の拙著を見つけて購入してくださったとのこと。ありがたい話だ。

こうした貴重な方々が、各シマに何人かおられるようだ。私の調査活動も、まずはこうした方々からの聞き取りから始めることになりそうだ。



各字に出かけて話し始めると、共通の知り合いが結構いる。そのことで、話がさらにはずむ。

21日には、西原で開かれた中部地区公民館研究大会に助言者として出席。ここでも、集落での活動の話題が中心の一つになる。これについては改めて書く。

写真は訪問した喜良原公民館（体育館付設）

「南城市の民俗」調査活動スタート

2015年10月1日

南城市史編纂作業の大きな流れの中の一つとして、「南城市の民俗」を編集する作業が、いよいよ本格化する。29日開かれた専門委員の全体会議で、調査の要項が決まり、これから長丁場の調査活動に入るのだ。

南城市の70余のすべての集落（シマ・字・自治会）ごとに、原稿を作成する。最近、他自治体でも、そういう企画が出てきているようだが、南城市でもそれに取り組む。人々の暮らし・つまり「民俗」を集落ごとに書くわけだ。

調査にあたる専門委員は20名。大学で教える研究者、ベテラン知識人、集落やシマについて詳しい若い世代の方々など、多様な人材が活躍する。平均すれば一人で3～4つを担当する。数年かけて繰り返し集落・シマを訪問し、その地域に詳しい人々からの聞き取りを中心に、実地に見て回ったうえで、原稿執筆にまで至る。

計画では、10年かけて書籍にすることだが、私個人としては、もう少し早めてほしいと思う。10年先ともなると、私のような年齢では、身体について確信めいた自信はもてないからだ。それはともかく、長丁場の仕事だけに、やりがいがある。

南城市の70余りの集落だが、外の眼からみると、「田舎」雰囲気が濃くて似たように見えるかもしれない。しかし、すごく個性的だ。集落のスタート自体が、沖縄の始まりに重なるようなところがあると思えば、まだスタート後20～30年になるかならないかの新しい団地がある。それにも、一戸建てが多いところと、大型集合住宅がある。

だから、代々、その地域に住み続けてきた人が多い集落と、平均居住年数が10年にならないようなところもありそうだ。最近のアパート増の中で、多様な暮らしが併存するのも珍しくなくなっている。歴史の長い集落という場合にも、スタートが古琉球時代からか、近世からか、近代へと移る時期からかで、様子が随分異なる。

綱引き・村芝居・エイサーなど地域芸能にしても、数百年という歴史をもつところと、戦後スタートしたところ、なかには、最近になって作りだしたところもある。

また、以前はほとんどが農業が中心の集落に、漁業が少し加わるぐらいだったのが、ここ100年で様子が大きく変化した。とくに戦後、さらには、ここ30～40年ほどで、第三次産業従事者が激増し、あるいは景観さえ変わるくらいほどの変化が押し寄せている地域もある。

そんな多様さを秘めた南城市の集落だ。だから、この集落という言葉についても、共通したものがないから難しい。シマといえば、どこでも通じるというわけにはいかななくなっている。かといって自治会という呼び方が通じるのはごく限られたところだ。

そんな多様さがある集落での人々の暮らしだから、当然多様だ。数十年前の民俗調査とは大きく様子を変えているのだ。そういう話なら「古老に聞くに限る」というわけにはいかない集落も多いのだ。

集落ごとのページ数は限られているので、しらみつぶしに調べて書くわけにはいかないの、どこかに焦点化しなくてはならない。それは、多分、集落自身が主張・表現しているものを、調査員なりに読み込んで

執筆するという、かなり責任の重い仕事になりそうだ。そして、かなりフロンティア的なものにもなりそうだ。

私も、四つの集落を担当する。10月からの私の生活の大きな柱になりそうだ。あわせて、専門委員会の委員長という役目を仰せつかっているので、まとめ役的なこともしていかななくてはならない。荷が重いがやりがいと楽しみが多い仕事だ。

約10年後の完成の日を楽しみに待ちたい。

写真は、事務局が作成した、数百年にわたる集落一覧表の一部。離合集散・新設がひんぱんに行われてきたことがわかる。



南城市史「南城市の民俗」専門委員会スタート

2015年6月10日

9日18時から開かれた第一回の委員会。教育長から委嘱状を渡された20名の委員に、事務局スタッフを合わせて、30名近くの出席のもとに開かれる。このメンバーで、「南城市の民俗」の作成に取り掛かる。10か年計画だ。

南城市の71字（あざ）・自治会への何度もの聞き取り調査を中心にして、71の集落すべての「民俗」を収録するという、実に巨大な計画だ。無論、南城市の概観を紹介する章、特論ともいえるべき章などもある。

一括交付金をもとに「なんじょう歴史文化保存継承事業」として展開する、すごい計画だ。これまでは事務局スタッフを中心に、かなりの準備作業が行われてきた。その一つが、調査執筆にあたる専門委員を依頼することだった。20代から60代（私の推理）までのまさに老若男女、そして多様なキャリアを持った方々が集まり、これまでにない民俗調査が展開しそうな気配だ。無論、他市町村ですでに調査経験のある方、あるいはアジア諸国での調査を継続中の、まさに専門家の方がおられる。大学教員の方も多し。

そんななかで、私は委員長役をすることになった。南城市の歴史的に豊かな宝を掘り出す委員の方々が、とても頼もしく感じた。

この夏は、調査計画をつめていく6名の検討グループの会議の連続だ。暇な私も忙しくなってきた。

秋から始まる各字の調査は、私自身とても興味深く、どの字も回りたいほどだ。私にとっての難題は、ウチナーグチ学習だ。まだ2割程度しかわからないので、うんとトレーニングを積まなければならないと思う。

偶然のことだが、昨年末からの南城の全地域散策が、こんな時に役立ちそうだ。全字を回ったし、いろいろと印象深い景観・光景がある。そして、地域の方々との会話があった。でも、集落を外側から見るのが中心だったので、今度はそれを深める時だ。

71字のなかには、団地がいくつもあるし、アパート人口が多い字もある。そんななかで、これまでの「民

俗調査」が示して来たようなものとは異なる新たな世界を作りだしている字も多い。そして、戦前一戦中一戦後を視野に入れる調査なので、新たな様子も見いだせるだろう。

成果は、10年後に刊行される予定で、少々遠い話だが、それが待ち遠しい。そして、沖縄研究、そして生き方・人生研究をすすめる私個人にとっても、もったいないくらいすごい経験になりそうだ。

委員の方は、ほとんどが初対面だと思っていたら、私の授業を受講したとか、講演を聞いたとか、私の本を読んだとか、いろいろな「再会」が多い出会いだった。なにか面白そうな物語が展開しそうな気配だ。

そして、とくに、実際の各字での調査での出会いには、これまたいろんなドラマが聞けそうな予感がする。

「人類史にみる百名玉城の物語」講演

2015年3月8日

6日、百名公民館で、文化人類学者後藤明さんの講演会があったので、聴きに行った。公民館で専門研究の講演があるのは珍しい。といっても、わかりやすく聴きやすいものなので、地元の方々中心に数十人の聴衆がおられた。

話は、多様なことがらにまたがっており、視野を大きく広げるものだ。この分野では仮説的なものが大変多いので、定説というよりも仮説的なものが多くなる。それでも、示された写真などが大変興味をそそる。いくつか記そう。

タマグスクの門は、夏至や冬至の時の日の出日の入りにかかわって注目されていることは、よく知られている。同様というか類似のことは、イギリスのストーンヘンジ、イスラエルとヨルダンの国境近くの遺跡（名前を思い出せない）、イースター島のモアイ像、ハワイ、マチュピチュなどいくつも存在するという。アフリカからスタートして世界に広がった新人たちの間に、通じ合う文化がありそうだという提起であろう。

その際に、太陽だけでなく、月や星にも同様に重要な意味をもたせる文化が見いだせそうだという示唆も注目される。

太平洋の島々の人々は、星などを頼りに移動移住していったことを強調するものでもあった。沖縄でも、かなり古い時代に、船による移動があったことを示唆する話も出された。

こうした話を聞きながら思ったこと。

宇宙創成神話をはじめ、歴史上、地域を問わずに、宇宙観・世界観・人類観などを理路整然と描くことがいろいろな形で行われてきた。仏教・キリスト教・儒教などもそうであろう。さらに近代科学もまたそうした志向を強くもっている。それら相互の間で排他的になる場合に、激しい戦いが起きる。

だが、なかには、それらの共存を受け入れる動向もあろう。あるいは、それらの間でのからみあいも起きることもあろう。それらをファジーにしていくことを好むこともあろう。あるいは、流動的にとらえる発想もあろう。

それらがどうなるかの一つのカギは、中央集権的な権力が、自己の支配原理に基づいた「思想統制」を行うかどうかにある。あるいは、人々の中に多様さを容認奨励するものが強いのかも関わりがあるだろう。

これまで、どちらかという、首尾一貫、理路整然としたものが注目され過ぎる傾向が強すぎたのではな

いだろうか。私という異質協同とまでいかななくても、異質共存的な捉え方から、歴史を見てみるとどうなるだろうか。多様な文化・人々がいきかい、交流する沖縄では、そうした視点で、歴史を見てみるのが重要ではなからうか。そして、現在・未来にわたって、そうした見方がますます重要になるのではなからうか。

須藤義人「久高オデッセイ」(晃洋書房 2011年)を読む

2011年10月16～25日

1

サブタイトルは「遙かな記録の旅」であり、映画「久高オデッセイ 第一部」「久高オデッセイ 第二部 生章」の記録作業を綴った本である。

本の帯で、梅原猛は、「この書は、比嘉康雄氏の遺志を受け継ぎ、神々に憑かれた大重潤一郎氏が神の島の映画を撮った感動的な記録である。」と書く。

著者須藤義人は、大重潤一郎監督のもとで本映画製作に助監督としてかかわってきた。文を読んでいくと、監督と一心同体ではないか、とさえ感じることもあるほどだ。また、沖縄大学教員でもあり、私も存じ上げる。いつか、久高に向かうフェリーで、偶然一緒になり、本映画のことを聞いた記憶がよみがえってきた。

久高をイザイホーに焦点化してとらえ、それが「日本の原型だ」といい、イザイホーが絶えて30年余りがたつ今、関心を薄める人がある。私はかねてから、イザイホーは、琉球王朝が作り上げ、支配と結びついたものだ、だから、支配と結びつかない世界こそが重要だ、と語ってきた。

その私の主張と重なるものが、本書に続出するのに驚いた。というより、私より先に、このことを課題とし、地道に取り組んでこられた方々が、久高内外におられることを知り、尊敬以上のものを感じた。

そんなことを書いた個所をいくつか紹介しよう。

本土から久高を訪問した若い女性と大重潤一郎の会話

「女は言い出した。

「イザイホーは復活しないんですか。移住して手伝うことがあれば……」 (中略)

「イサイホーは無くてもいいんだよ」

女は一瞬の沈黙の後で、「え、どうして？」と聞き返した。

「イザイホーはお金持ちの、琉球王朝の祭りなんだよ。人々の民衆の祭は今も根付いているんだ。それがあるから別にいいんだ」と、泡盛の入ったグラスを飲み干した。

その言葉は若い女にとって、もの凄く衝撃的な言葉であった。

久高島と言えば、イザイホーという祭り。

そのイメージで埋め尽くされた島の姿。艶やかな映像や写真を流す、マスコミが創造した幻想でもあった。しかし逆に、女は安堵したようであった。本当に日常生活の中で息づく、久高の原風景を掘り起こそうという、その男の眼差しを受け止めたのであった。

初老の男は、熱く語り始めた。(中略)

「僕の立場からすると、まず……。僕自身の映画を、ドキュメンタリーを、作るつもりで久高島にいるのだけど、ホンマはエネルギーの大半は、久高島を元気にするっ、ちゅうことに傾けている。(以下略)」P 2～3

強烈な印象を与える。

2.

ところで、大重潤一郎は、私と生年が同じだ。読んでみると、どこか共通する世界をふっと感じる時がある。

そんな個所として、首里王府との関わりでの祭祀と久高由来の祭祀とについての記述を紹介しよう。

「琉球弧の祭祀は、表面上は首里王府の影響を受けている。とくに久高島の場合は、その影響ははかり知れない。確かに、ノロが配置されたり、祭祀の形式は王府の影響を受けている。

しかし、その下にある中身を見ると神々や神観念、世界観や他界観は古来からのものであることに気づく。その古層に繋がるものの上に、首里王府の影響を受けて、形式化していくという段階があったのだ。

久高島ほどではないが、宮古島の狩俣も、首里王府の影響を受けている。人頭税などで搾取される対象であったから、致し方ないことではある。だが、それは表面上の話であって、その基層部分には古代が息づいているはずであった。」P 126～7

後者の久高由来のものは、人々の生活と結びついているということで、次のように書かれている。

「大重は、久高人たちに希望を託している。

「久高島というのは、自然がまだ残されている、やっぱり、あの自然の有り様、あれは全部聖地とか言ってるけど、結局、先祖がね、生活した場所だからね。

生活した場所というのは、遺跡じゃないんだよ。先祖の魂がおわします場所だった。

そういう意味で、あの自然に囲まれているということは、実は神に見守られていると解釈してもいい。そういうことを徹底して、本当に久高人たちは心の根の中に持っているから、安心だ。

日々太陽に拝み、夕方、夕日に感謝する。そういう行為は、宗教じゃない。日常の自然信仰なんだよ。

これは世界共通のことだ。自然信仰においては世界中すべて一緒だよ。

そういう意味で、自然信仰は不変であり、久高島の抱えているものも不変であると、希望を持っているよ」

P 50～1

「僕たちは、御嶽を貝塚とか、遺跡として考えてしまう。だが、島の人々は、そこに「祖先たちがいる」「魂がいる」と認識している。

そういう世界観が、祭祀を通して表現されるわけである。このような古層の精神性が、広い遠浅の海を背景に、かたちになって見える。それは、琉球弧全体にも言える。遠浅の海の広いところは必ず、古代集落があり、貝塚が発見されている。

比嘉さんは、「魚介類採集時代から首里王府の時代までの記憶は、久高島というひとつの空間に刻み込まれているのだった」と言いきる。」 P 1 2 8

私が住んでいる玉城海岸沿いにも、貝塚を始め人々の生活跡が多くあり、「史跡」とされているものも多い。そして、久高が、玉城と深い関係がある物語が、語り継がれている。それは、久高の「ムトゥヤ制」（元家制）ともかかわりがあるろう。

3.

「研究者たちは、久高島の神女組織がなくなった後、元々あった血縁中心の「ムトゥヤ制」（元家制）に回帰していこうとするのか……。あるいは別な道筋をたどっていくのか・・・と、動向を見守っている。

だが、僕たちは、あるがままの姿を記録するしかない。「イザイホー」が存続してほしいという気持ちは、意味のない希望にしか思えてならない。琉球王朝がすでに滅びているのに、それを支えた神女組織を維持する「ノロ制度」だけが残ることには、違和感がある。無理して「ノロ制度」を守っていく大義が、まったく見出せないのだ。

このような中で、「大里家」を守る真栄田ナエさんや、「イチャリグワァー」を守る糸数マサエさんは、毎日、ムトゥヤ（元家）へとお茶を捧げ、線香をあげ、祈りを欠かさない。

琉球王府ができる前から存在し、島の暮らしの基本となっていたのが、「ムトゥヤ制」であった。草分けの家であったムトゥヤ（元家）は、「大里家」と「イチャリグワァー」の二軒ある。その家筋を継ぎ、守る女性は、祭祀でも特別な存在であった。」 P 1 5 5

「イザイホーがはじまる琉球王府以前から、島の暮らしの基本となっていた「ムトゥヤ」（元家）を継ぐことで、〈新たな神女〉が出てきたのだった。五〇〇年つづいた「イザイホー」を中心とした「ノロ制度」から、根源的な「ムトゥヤ制」に回帰していこうとする流れかもしれなかった。

月明かりの下で、内間豊さんが僕に言った。

「もともと久高島には、琉球王朝の〈ノロ制度〉は無かったものですから。はい……。ユタ的な〈ハミー〉（守り神）と、ノロ的な〈ウマリングワァー〉（生まれ神）だけがあったという証拠です」

まさに自然の流れの中で、いのちを生んで育むという、「母性性」が再生する追加、新たに拓かれようとしていた。」 P 2 7 0～1

「ムトゥヤ制」が根源的なものかどうかは、私にはわからない。王府支配以前からあったことは確かだ。人々を支配する時、人々の「こころ」に強い影響を及ぼすものに、支配側が着目し、その支配管理を行ったことは、支配の歴史では、ごく普通のことである。近代以降では、信仰・宗教以上に教育が使われるようになってきた。

首里王府以前については、さらなる調査研究が必要だろう。そうしたものが、どういう形で、人々の生活・こころの底流に存在していたのか、研究の進展が待たれる。それにしても、そうしたものにも、時代の社会構造のなかで変化がある。支配、ないしは人々の人間関係のありようとの複雑な絡み合いのなかにある。よくいわれる「根源的」な形を解明しようとするよりも、変化のなかでとらえる方が、より正確であろう。

そうした意味では、ひるがえって、現代の人々の生活・人間関係・心の中にふさわしいものを、どう創り出すのか、という課題も存在する。

写真は、2枚とも奥武島龍宮

奥武島龍宮も、自然とかかわっての人々の信仰、とくにニライカナイとのかかわりがイメージしやすい場である。中右写真の手前には、朝、ウガンをした時の塩がそのままある。

4

女が神事（祭り事）、男が政事（政治）を担当するという分業があったということが、多くの書籍で言われている。しかし、それさえも、その時代・地域の支配的な発想ではなかったか、と疑う必要さえあるのではなかろうか。そのことで、女を政治から引き離し、男を祭りごとから引き離す意図があったのではないか、という推理さえあってよいだろう。

久高に関して、その分業に似た言い方が広く行われてきた。だが、本書では、男の祭祀について書かれている。注目したい。

「なかでも、一二年に一度行われてきたイザイホー儀礼は、多くの研究者の関心を集めた。これは、久高島に新たな神女を誕生させる儀式であった。これまで総じて、久高島の研究は、こうした女性を中心とした祭祀が注目されてきたように思われる。

しかし、年中行事を丹念に見ていくと、久高島の男の祭祀には逞しさがああり、海人（ウミンチュ）の息吹が感じられることに気づく。こうした海人に支えられた背景があって、女性の祭祀組織は年齢階梯に準じて機能していたのである。

久高島の外の世界で、漁撈や交易を研究している人たちも、たびたび島の調査に訪れている。この島の海人が、琉球弧の漁撈に与えた影響が、次第に明らかになりつつある。確かに、久高には、伝統漁法「アンテイキヤー」や、多くの優秀な海人を生み出すシステムが残っていた。

島人が、島外との交流をすることで、常に新たな世界観を生みだしてきた歴史は、久高島の未来に大きな可能性をもたらしている。（中略）

海人の歴史という時間軸をさかのぼると、久高島から糸満、与那国までの航跡が浮かび上がってくる。また、海人の足跡を追うことで空間軸を見つけ出し、久高人（クダカンチュ）はどこまで行ったか……というテーマを、映像化しなければならない。果たして、久高島の海人の交易圏はどこまで広がっていたのであろうか。」

p 16～17

「久高島の海人は、琉球王国時代以前から、「原日本人」



として南北に広い海域で活動した。北はトカラ列島の宝島や屋久島まで、南は先島地方から台湾の東海岸にいたるまで、漁撈や交易活動を行っていたのだった。

久高の海人は糸満漁民とともに、その名はひろく知れわたっていた。追い込み漁の「アンティキヤー」や「イラブー漁」などの漁法は、高い技術に裏打ちされたものであった。特に王朝時代の末期には、唐船や楫船、飛船の乗組員として活躍したことは、文献のみならず、今日にいたるまで、島人の中でも連綿と語り伝えられてきたのである。」 P 18

久高における現代の「島おこし」的なことが書かれている個所もある。

現代の島おこし、島人の生活とかかわった、島人の祭祀・こころの探求を追う本書ならびに映画は注目されよう。

6. 市史

南城市史の仕事にかかわったのは、前章で述べたように、「民俗」編の調査委員になったからだ。それ以外の市史の発刊済のもの、発刊準備中のものなどについての記事を本章の収めた。

『南城市のグスク』を読む

2017年8月1日

最近、南城市教育委員会から出された本だ。市販はまだだが、いずれ発刊されるだろう。これで、南城市史は2冊目だが、これから、戦争編、御嶽編と続々と発刊される予定だ。私がかかわっている民俗編は、それに次ぐものだが、7～8年先のことだ。市町村史には、息の長い仕事が多い。

さて、南城市内にグスクは36カ所もある。今回の編纂過程で新たにグスクとして確認されたのも多い。36カ所のうち、半数ほどを私自身は訪問したことがある。未訪問のところは、相当な装備をして出かけないと、素人ではよくわからないどころか、危険さえあるところだ。無論、近くまで行くことは出来る。その意味では、全部のグスクの近くまで行ったことはある。

それほどまでに、グスク時代の南城市域は興味深いところである。それらのグスクの当時の具体的な活用状況については、不明というのがほとんどだ。それでも、沖縄外からの大量の移住者を迎え、多様な地域との交流も盛んだったし、グスク間の対立抗争も激しかった、この時代のほとんどは、想像でイメージするしかないのが、現状だ。多少わかっているのは、考古学的な調査が行われた佐敷城跡、知念城跡、玉城城跡、糸数城跡、島添大里城跡、稲福城跡ぐらいだ。

作成作業には、多くの職員、調査員などが関わり、執筆には、グスク研究の第一人者當眞嗣一さんを始めとする専門家が当たっている。図表や写真が豊富なので、実際に（近くまで）出かけて見るうえでの参考になる。

本書の冒頭の論稿で、當間さんが、今回の調査で明らかになったこととして、「グスク築城のプロセスが分かる」「グスクと集落がセットの関係で捉えられる」「空間利用が確認できた」p 8-9 ことの三つをあげている。空間利用という事では、グスクの内側に集落だけでなく農耕地があるグスクもあると指摘されている。さらに、グスク内から発見された遺物を見ると、漁業に従事する人まで暗示しているという p 14。

大変、興味深い本である。





南城市域は、全域が戦争遺跡になるといってもよいほどだ。集落裏手のガマが住民の避難壕であっただけでなく、日本軍の陣地壕になったからだ。

また、戦後収容所や野天学校などの写真資料・映像資料も興味深いものだった。

これらの資料の大半は、市民の協力によって集められたし、市民の語りに基づくものも多い。

「南城市に残る戦争記録」 南城市

史文化展

2016年2月25日

22日、大里庁舎3階市民ギャラリーで始まったばかりのところを見学。

文書資料、物品資料、映像資料、写真資料が並ぶ。

私は、南城市域すべてを昨年散策したが、その時出会ったものも多い。その時は、事前予習無しで出会ったが、その出会いをもとに、今回資料説明を読むと、意味理解が深まる。写真の「前川避難壕」もその一つだ。



南城市のグスク展 志喜屋グスク

2015年1月23日

19日、南城市役所大里庁舎で開かれている第2回南城市史文化展「ぐすく」に出かける。40のグスクの写真と紹介文が並べられている。私が知っている、見たことのあるグスクは、10余りなので、知らないところばかりだ。

紹介されているもののなかで我が家近辺を並べると、次のようなグスクがある。

垣花グスク 何度も訪問した

ミントングスク 10年ほど前に訪問した



ウフグスク（百名） 初めて知る。教えられて、場所や遠景は分かるので、散策がてら訪問したい

ヒラマグスク（新原） すぐ傍の道路をしばしば通るから、その丘も頻繁に見ていたが、グスクとは知らなかった。次回は、よく見たい。しかし、説明によると「詳細は不明」とある。

タカラグスク（ゴルフ場内） タマグスクのすぐ向かいにあるので、いつも見ているが、グスクとは知らなかった。次回はしっかり見よう。

タマグスク もう数十回は訪問しているだろう。

タカラグスク（奥武島） これは知らなかった。今度は意識して見てみよう

仲栄真グスク ここも傍をよく通る。多少は知っていた。

安次富グスク 何度も通るが、グスクだとは知らなかったのので、今度確かめよう

大川グスク 何度も通り、一度、中まで入っていった。グスクとは知らなかった。

糸数グスク 10回以上は訪問しただろう。

奥武グスク 民家の敷地内で気づかなかった

根石グスク 先月、糸数散策の途中で出会って驚いた。このブログにも書いた。説明文を読んで多少わかった。

上間グスク 同じく、先月の糸数散策で、すぐ近くを通ったが、グスクとは知らなかった。

チンシグスク これは全く知らなかった。

玉城には、以上のほかに船越や前川などに3つある。南城全体の半数近くがあることになる。

月一回恒例のマッサージに志喜屋の「蘭」に出かけた折、志喜屋グスクのことを尋ねる。親切にも、近隣に住み詳しい城間正栄さんに電話して下さる。マッサージ終了後、城間さんに案内していただく。カメラを持参していなくて残念だった。グスクの中に入り、いろいろとご説明いただいた。合わせて、近くの重要な史跡・拝所をいくつか案内していただいた。ありがたいことだ。

志喜屋グスクの入り口の案内板には、16世～17世紀のもので、よろい・青磁などが出土したと書かれている。家に帰って「知念村の御嶽と殿と御願行事」を見る。城間さんは、この本制作の中心を担った方だった。その本には、「AD1200年ごろ」と書いてある。石積みは、野面積みで、かなり高く積まれ、いくつかの部分に分かれており、「砦」の雰囲気漂わせている。だが、詳しくは分からないようだ。

城間さんからは、ミントンやチキンタなどとの流れを汲む志喜屋の歴史などもうかがう。短時間だったが、貴重なご案内をいただいて恐縮してしまった。また、訪問してみたいと思う。

7. 学童保育

南城市学童保育連絡協議会が発足以来、顧問の役目が与えられてきた。役目をほとんど果たしていないのが実情だが、それでも関心をもって、いろいろの記事を書いてきた。

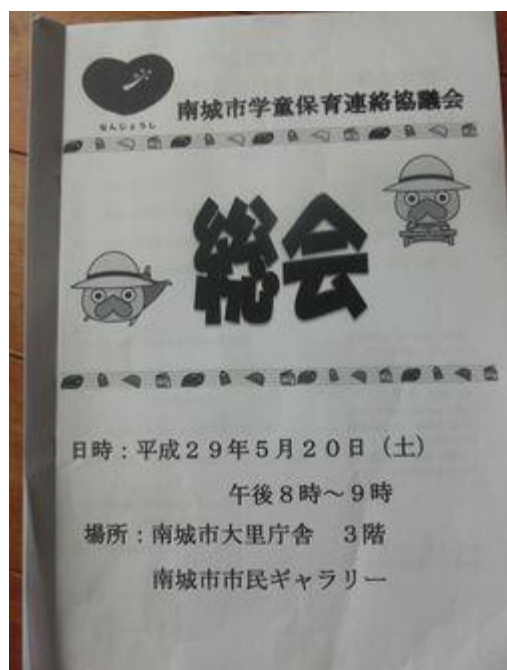
南城市学童保育連絡協議会総会

2017年5月23日

毎年、この時期には行事が多くて、ダブってしまって参加できないこともよくあるが、今年は日程のダブりが少なくてラッキーだ。

その第一弾は、南城市学童保育連絡協議会総会。20日に市役所大里庁舎で開催。私は創立以来顧問役をしているので、欠かさず参加している。

今年は、例年以上に盛り上がった。印象深いことを書きならべよう。



1) 5年前の創設時と比べて、学童クラブ数が大幅に増加して、19学童となる。約700人もの児童が通う。学校内敷地に行政予算で建物が建設され、新クラブが毎年設置されてきたのが主因。それだけ、希望者が多いということで、今後も増えそうだ。

2) 既存のクラブが、学校内学童を担当し、第一～クラブ、第二～クラブ、第三～クラブと分割発展する例が増えている。設置されている学童クラブのほとんどが、南城市学童保育連絡協議会に加入しているのも、南城の特徴だ。それだけ、信頼も期待

も大きいということだろう。

3) これまでの枠組みを越えた、議案書・予算書を提案すべき時期にきていることを、私の方から提起。賛同の声が出た。

4) 取り組み、とくに研修企画が増加している。

5) 行政や市議会議員も熱心に参加し、発言。それだけ、市民の関心も高いということだろう。

6) 役員も大変だが、さらなる発展への意気込みは高い。40～50年前の公民館幼稚園（保育園）時代から長年活躍している方から、声をかけられた。当時からの歴史が引き継がれて、今日の学童につながっている、と言う発言を私がしたことで、すごく喜ばれた。当時の園児だったという議員も声をあげられた。

7) それにしても、指導員と運営者の自己犠牲的な活躍で、クラブは運営されている。抜本的待遇改善が期待される。

8) 設置運営への対応で繁忙だが、クラブの活動内容の充実のための検討ができるような体制を作っていくことを、私の方から提起。

9) 数十名の参加で熱気がこもっていた。今後のさらなる発展を期待したい。

南城市の学童保育 南城市学童保育連絡協議会総会に向けて 2016年5月21日

毎年この時期開かれる総会に、顧問である私は出席し挨拶している。挨拶は、いつもアドリブでしているが、たまには準備して臨みたいと思う。ということで、挨拶の下書き文を書くことにしよう。

学童連協加入の十数か所の南城市学童クラブの歴史はそう長くはない。学童クラブを必要としている子どもたち・保護者たちの声をもとに、ボランティア精神あふれた人たちが、自ら創設したのだ。きっかけは多様だが。

その際、保護者たちが組織を作って運営するという形よりも、創設者自身の努力工夫によるものの比重が高そうだ。自治体が設立運営するという他府県で見られる例はない。経費はすべて保護者負担であり、自治体などからの支出はなかった。

振り返ってみると、戦後長い間、親たち、そして集落の要請をもとに、「公民館保育園・幼稚園」というものが広く行われた時期がある。それらが、現在の私立保育園の前身になったり、公立幼稚園のさきがけになったりした。沖縄県の幼稚園就学率の高さをつくりあげた一因である。当時活躍した人々で現在も保育園で活躍している人もいる。70歳代後半になっているが。

学童保育も、そうした流れを汲んでいると考えてはどうだろうか。

しかし、ここ数年で事情が大きく変化し、ますます高まる需要にこたえて、自治体など公的機関からの支出が始まり、最近では、各小学校内外に公的支出による建物が建てられ、それをこれまでの学童クラブが受託して運営する形が今年度から始まる。政府・自治体が重い腰をあげて、制度的財政的サポートをはじめ、「待機児童」数減少をはかるために、学童クラブの量的拡大策を進め始めたのだ。

とはいっても、それらは不十分で、経済生活上厳しい保護者にとっては、保育料負担に耐えられず、入所を断念する例も多い。だから、そうしたことへの行政的対応は欠かせない。また、指導員が異常なほど低額所得を強いられている状況を抜本的に改善する施策が求められている。

こうした量的拡大と並行して、学童保育の質向上への取り組みが求められる。指導員の指導力の向上などの取り組みが全国的にすすみはじめているが、沖縄県・南城市でも、これまで以上に追求していかななくてはならない。

ところで、沖縄では、子どもも大人も人間関係が豊かであることを誇ってきたが、それに黄信号がともっている。子どもでいうと、たくさんの多様な子どもたちが戸外のあちこちで遊んでいることを目にするのがめっきり減ってきた。室内でのテレビやゲーム、そして家庭学習、また塾やスポ少などで忙しい子どもたちがごく普通になっている。そして、子ども相互の人間関係が薄くなり、また大人の過剰サービスのなかで、子どもたちは大人の指示に従って動き、自分なりに工夫して動くことが少なくなっている。また、「学力向上」をはかり、受験学力を高めることにかかなりの時間をかける例も増えている。

それらの中で、子どもたちの人間関係が薄くなり、社会性の発達に黄信号がともっている。また、創造性

を身に着けない「指示待ち人間」が増えている。テスト点数が高くなったとしても、創造性に焦点化する方向への、世界的に進む学力のありようの大転換への対応には、10～20年以上の遅れが顕著になっている。

そこで、子どもたちの社会性と創造性を高めるうえで、小学生時代に焦点化していうと、子どもたち自身が集団で何かを創造する取り組みを展開することが重要課題となっている。その点では、学童クラブでの活動が絶好の場を提供する。

すでに、そうした学童クラブの強みを生かした活動が各クラブで展開されているのだが、それを一層本格的に追求していく必要がある。

それは、たんに経験をもとにしてかかわるだけでは不十分だ。その点では、そうした実践を県内外の先進例から学ぶとともに、自らの学童実践を実践記録化し、研究会などで共同検討することが求められる時期になっている。

今年は、そうしたことへも意欲的にチャレンジされることを期待したい。

写真は昨秋の学童交流会の風景 ベーごまとけんだま



「南城市学童クラブ 現状と課題」 学童クラブと市議会との意見交換会

2016年2月21日

17日午前、南城市学童保育連絡協議会と南城市議会総務福祉委員会との意見交換会に参加した。「南城市学童クラブ 現状と課題」がテーマで、協議会の顧問をしている私も参加した。議員と協議会メンバーの熱心な意見交換で、私はほとんど聞き役だった。

南城市には現在14のクラブがあり、502名の学童がいる。27年度の市内の小学生総数は2876名で、そのうち3割ぐらいが学童クラブを希望しているといわれているので、計算の上では863名の希望者がいて、360名ほどが入所できずに待機しているという計算になる。人口増の南城市にあっては、小学生数推計によれば、平成33年には3454名になるとされているので、事態はますます大変になりそうだ。

そこで、市は、各小学校の敷地に学童クラブをつくる計画をすすめており、現在百名小学校と馬天小学校内に建設中だ。その運営は、連絡協議会に所属する学童クラブが当たることになっているようだ。だが、既存の学童クラブを閉じるわけにはいかないので、その学童クラブは、既存・新設の双方を運営しなくてはならないので大変だ。

振り返ってみると、30年以上前には、親が働いていても、地域での子ども集団が活発であり、そこで、子どもたちの多くは放課後生活を送っていたし、あるいは祖父母などが世話をする例が結構あった。しかし、そうしたものが年々少なくなってきており、子ども達の放課後生活は、大変になってきた。そうしたなかで、親たちが共同で、あるいは有志の人たちが、学童クラブを立ち上げてきた。私が南城市に生活しはじめて以降も、その増加が著しい。

南城市を含めて沖縄の学童クラブは、他府県とは異なって民設民営がほとんどで公設は少ない。南城でも、公設は児童館にある2つだけで、それも民営だ。

こうした事態のなかで国や自治体も、なんとかしようとする施策の乗り出したのは最近だ。担当部局は大忙しで、対応も大変なくらいだ。

そんななか、議員が積極的な対応をしてくれるのは嬉しいことだ。

だが、難しい問題が目白押しだ。たとえば、指導員（支援員）の給与は著しく低く、大人が家族をもって生活していくとなると、頭を抱えてしまうほどだ。だから、新規募集をしても、希望する人はとても少ない。



運営のためには、常勤3名が必要だ。とくに土曜日とか夏休みは朝7時から夜7時までの体制が求められて大変だ。無論バイトの人もいるが、バイトの人に頼りすぎる運営をするわけにはいかない。

そんなことで、施設の借用料なども加わって、保護者負担がとても高くなり、全国トップクラスになってしまう。保育料の額を聞いて、入所を断念する保護者も多いとのことだ。

ということで、公的な援助が不可欠になるわけだ。また、指導員・支援員の研修体制も重要だ。私はこの面で協力しているが、ほぼボランティアとしてやってきた。

こうしたことをめぐる意見交換の会だった。双方とも、大変熱心で、時間延長になってしまった。今後の特段の充実を期待したい。

写真は、昨年10月の学童クラブ交流会で、けん玉で遊ぶ子どもたち

知念のなかよし学童クラブ訪問

2015年8月15日

南城市学童保育連絡協議会の顧問をしているので、加入クラブをできるかぎり回ってみようと思い立って始めたが、しばし間が空いてしまった。

今回は、知念の久手堅にあるなかよし学童クラブだ。



訪問した時は、室内での遊びの真っ最中だった。私の知らない遊びがいくつもなされていた。数人ごとに夢中になって遊んでいる。ある一年生の子が、私に「オセロ」を挑戦してくる。オセロは、数年前、孫とやって以来だから、半分忘れていた。

やっているのと、周りの子が次から次へとアドバイスしてくる。「たくさん裏返せる」アドバイスだ。そのアドバイスに従うと、結果的に負けるので、アドバイスは無視して私流で応戦。おしゃべりを一杯しながら。途中で形勢がよくなってきたので、指導員の方に「本気でやっていいのかな」と尋ねる。「本気でやってください」といわれたので、そ

のまま続ける。結果的に勝つ。相手はくやしそうだ。でも一年生なら立派な実力だ。

他にも、色々な遊びがあり、いろいろと、子どもたちと、そして指導員の方々をおしゃべり。「人気の遊びは何」と聞くと、「ドッジビー」とのこと。なるほどと思う。南城市内のクラブ対抗大会があるほどだ。

元気よく楽しさいっぱいのクラブだ。

この日は、30～40名。男の子が多いのが特徴。異年齢でグループをつくって、色々な活動をしているようだ。次の日は倉敷ダムへお出かけという案内が貼ってある。遊び大会のポスターを書いている子どももいた。

前日は、隣の児童館と共催で、祭りを開いたとのこと。児童館見学にも行く。ここにも、一杯の子どもたち。



知念小学校の低学年中学年の子どもたちの半数は、クラブと児童館で過ごしている感じだ。このあたりは、



近くに、保育園・幼稚園・小学校・中学校があり、子どもたちがいっぱいのところだ。両親とも勤め人が多くて、学童クラブの必要性がとても高いようだ。

活動的で創造的な南城市学童保育クラブ指導員

2015年7月16日

14日午前、南城市大里庁舎にて、南城市学童保育連絡協議会主催の指導員研修のワークショップをした。そのレジメは次の通りだ。

タイトル——子どもたちとつながって、子どもたちを盛り上げる

じゃんけん列車 → 大きな輪ができる → あいさつまわし → 信号送り → 好きな動物の大きさ順に一列にならぶ → 5人グループ → 名札づくり 「名前・クラブ・ウリ」記入後 → 自己紹介 → 物語づくり → ほめ言葉大会 → 間くぐり → ほめながら頼む「おやつ準備」 → 好きな食べ物の味の濃さ順に一列にならぶ → 6人グループ → 自己紹介 → 私（私のクラブ）の自慢披露大会 → 頼む「自慢大会」出場 → 自動車と運転手 → 私のおすすめ学童取り組みアイデア → 即興劇 けんかはどう対応する・・・A 子ども1 B 子ども2 C 子ども3 D 離れた所にいる子ども E 指導員 F 別の場所にいる指導員 AとBが口喧嘩を始めるシーン 第一場 第一場をもとに作戦会議 第二場 → 今日の感想を漢字一文字で書く → 感想漢字への質問大会

実際の進行は、いつもの私のワークショップのように、このレジメとは大きく変わる。参加者の特性にあった展開をするためだ。類似のワークショップをしばしばするが、学童指導員、とくに今回のように「新任研修会」的要素が強い場合には、特性が出やすい。

タイトルにあるように、子どもたちとつながりながら、子ども達を盛りあげていくような関わり方を学び創造することが中心のねらいだ。

4月に初めて指導員になって、私にとっても初対面の人が多い。もっと緊張しているかと思いきや、子どもと積極的に付き合うことが好きで、個性的で創造的な人が多い。エネルギーッシュなのは、ベテランにしても新人にしても共通する特性だ。

即興的な演技を求めることが多かったが、緊張しつつも創造的に対応して、どんどん進んでいくのが素晴らしい。実は、レジメにあるメニューは、通常のワークショップだと、2、3割積み残すことになるくらいだが、今回はほぼすべてをやってしまった。それほど活動的だった。

ケンカへの対処なども、多様な対処法が登場してきて、興味深いものが続出した。二場までのつもりだったが、盛り上がってきたので、三場までやり、みなさんの力をおおいに発揮していただいた。

終わると満足感あふれる顔が並んだが、私も満足感にひたった。

南城市学童保育連絡協議会総会

2015年5月25日

今回は、土曜日夜の南城市学童保育連絡協議会総会の話。創立満3年になる。私は顧問役を務めてきた。

参加者は、12クラブから14クラブになった構成学童の指導員と保護者、そして南城市議会議員6名と市役所の担当係。この1年間は、行政制度の変化に対応することで大忙しだった関係者たち。一步前進ということだ。でも、指導員の待遇面の改善など、今後の課題は大きい。また、全小学校敷地内に学童向け施設を建設する計画も実施段階に入っている。

こうした課題の増大に対応すべく、連絡協議会の予算規模を大きくしてはどうか、という提案が保護者から出された。

今後の展開は、ますます活発化していくことだろう。輪番制だが、役員はやる気に満ちている。期待したい。

私は、顧問あいさつの中で、「指示待ち人間」ではなく、子どもたちが自分たちで協同活動をすすめるなかで、開発創造の力を高める場として、学童クラブのますますの発展を期待するなど述べた。

終了後、懇親会、つまり飲み会が開かれる。結成総会以後、初めてのことだ。たくさんの人、とくに市議会議員4名が参加し、懇談するという盛り上がりだった。私は、初対面の議員や保護者の方々と懇談した。

年に2、3回しかない私の飲み会参加だが、12時を過ぎたのは、何年ぶりだろうか。とにかく面白かった。

南城市議会の委員会学童保育を集中審議

2014年5月29日

27日午前にかかれた委員会に、南城市学童保育連絡協議会のみなさんとともに出席。連協のメンバーの説明に、議員が熱心に耳を傾け、たくさんの質問。議員の方々、よく勉強なされ、学童保育の盛り上げに熱心だ。つい最近の設置基準制定をはじめ、政府の急激な施策展開に対応するという面もあるが、これまで、ほとんどが保護者を含め学童関係者の自主的な共同努力で営まれてきたものによりやく政府自治体が動き始めたという印象もある。

田舎イメージが強く、子どもたちは近隣の共同子育てで「なんとかしてきた」という長い歴史がありながら、社会構造の変化のなかここ20年ほどで、学童保育へのニーズが劇的に高まってきた。いまや12学童



クラブに約500人の子どもたちが集う。申し込みにも関わらず入れない「待機児童」も多いし、月々の費用が払えないために断念する保護者もいる。

これまでの民設民営のクラブに加えて、小学校ごとに公設民営で作る計画が進行し始めた。双方あわせても、需要に対応できるかどうかというほどだ。ここ数年のうちはかなり前進しそうな気配を感じる。市役所・議員の奮闘が期待される。と同時に学童関係者のさらなる工夫努力も期待される。

工夫努力ということであると、学童保育内容面での更なる前進も期待される。自然豊かな南城での学童クラブは、大都市地区では得るのが難しい有利な自然環境条件がある。それを生かしつつ、子どもたちが協働で創意工夫に満ちた幼少年期を築き上げることをサポートする学童クラブ・指導員・保護者の更なる協働が期待される。それは、教育面での大きな前進と響きあうものだろう。受身的な指示待ち型が広がっている中で、学童で育った子どもたちが大きな活躍ぶりを示しはじめているのは心強い。

学童保育だけでなく、保育所の充実に向けての動きも大きいものがある。私たちはなぜか地域のこうした動きをサポートする役目を果たす機会が増えてきた。

前ページ写真は2013年秋の南城市学童対抗ドッジビー大会の様子

ドッジビー大会 南城市学童保育低学年

交流会

2013年11月11日



9日、玉城青少年の家キャンプ場で開かれた。8チームが参加して、子どもたちが、楽しく明るくそして元気良く動き回る。

男の子の女の子も、精一杯の力を振り切って投げ、逃げかわす。ドッジボールではなくて、フリスビーを使う「ドッジボール」だ。まっすぐ進むだけでなく、大きくカーブするものもあるからトリッキーだ。布製のフリスビーなので、当たっても痛くない。低学年向きだ。投げ

方もコツがあり、よく練習している子ども、初心者の子どもが入り混じって、ゲーム。

激戦の結果、「風の子」学童の優勝。応援合戦もすごい。自分のチームだけでなく、他のチームへの応援もすごい。



8. 保育園

保育にかかわる仕事をたくさんしている恵美子つながりもあって、私も保育園つながりを少しはもってきた。その一つとして、近所のどんぐり保育園の理事をしていた。今は退任しているが、つながりは続いている。

どんぐり保育園起工式

2017年2月7日

理事をしているどんぐり保育園の起工式に出席。

玉城保育センターとして20年余り地域に親しまれてきたが、2年前から社会福祉法人のどんぐり保育園としてスタート。そして、場所を移して園舎を新築することになった。南城市役所玉城庁舎、南城市中央公



民館、レストラン「シャム」の隣の絶好の場所。

まさに「縁あって」、私たちは法人化への道をサポートしてきたが、現在は法人理事としてかかわっている。いろいろと難題があったが、ここまでたどり着いたのには感慨深いものがある。

年内には完工の予定だ。

写真は、鍬入れ風景。園長、設計管理者、工事施行者によって、無事起工式が終わる。

右は、現場風景。

「こども園おはな」との出会い

2016年3月8日

ヤハラヅカサで、偶然、乳幼児と親・保育者たちの一行に出会う。数日前に見たブログ「こども園おはな」(<http://happy087.ti-da.net>)の写真光景そのものだったので、声をかけてみた。やはりそうだった。



知り合いの知り合いというつながりだ。森など自然のなかで、子ども達を育てている。健康でおおらかで
遅しい子どもたちが育っていくことだろう。保育者たちだけでなく、親たちも参加して、まさに共同で保育
している点も注目される。詳しくは、同園のブログをご覧ください。